
IS インフィニットストラトス × ACfa 【パブリックエネミー】

撃沈王子（笑）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニットストラトス×ACfa 【パブリックエネミー】

【Nコード】

N5592V

【作者名】

撃沈王子（笑）

【あらすじ】

すべての仕事を終えた首輪付き、彼は自らを世界に不要なものと考え、アサルト・セルと共に、この世界から消えた。

しかし、何故か彼は元の世界とは別の、ACとはまた別の兵器、ISと呼ばれる兵器がある世界に生きながらえていた。

そこで彼はどんな選択をするのか、というストーリーです。

プロローグ

過去の過ちを焼き払うため、人類の新たなフロンティアを手に入れるため、充填され、徐々に上昇するコジマ粒子の輝きを自らの機体と見つめながら、自分の死期を悟る。

ここまで来るのに、一体どれだけの犠牲を払ってきただろう。

恩師はすでにこの手にかけ、この世の人ではない、かつて共闘したリンクス達もここまで来るために幾人も葬った。

見せしめのために最後の同志と落としたクレイドル。

結果的に殺すことになった人間は、あの時直接的に殺した一億人の十数倍にも及ぶだろう。

時は――少し遡る。

『来たか、首輪付き、クレイドルを全て墜とす、…刺激的にやろうぜ？』

「ああ、……始めよう」

元々はこの空を飛ぶ巨大な居住区域、クレイドル03を防衛する任務だったが、今は違う。

人類最悪の反動勢力、ORCAすらも裏切り、一人のテロリストとしてこの場に居る。

クレイドルの推進力をブレードで切り裂き、マシンガンで撃ち貫く。

『何をやっている！やめないか！！』

「セレン姉さん、人類は目を覚ますべきだ、この世界は正しくは無い、企業の用意したぬるま湯につかりすぎたんだ」

『やり方というものがあるだろう！その為にORCAに入ったんだろっが！！』

『諦めな、セレンIIヘイズ、やり方がヌルすぎたんだよ、革命など、結局殺すしかないのさ』

クレイドルの推進力としては最低限確保されていた最後の一つのブースターが俺のマシンガンで潰される。

『一基落とした、……これで二千万ほど死んだ』

『……殺すことだけを覚えさせたか……、残念だ、お前とは、もう一緒にやれんよ……』

セレン姉さんはそう言って、俺の機体、ブラッディブラストとの通信を切った。

「……………」

『どうするんだ？首輪付き、やめるか？』

「冗談を、……転がり始めた石は誰にも止められやしない、本人でさえもな」

行きつく先は誰の目にも明らかだった、故に俺はもう止まらない。

最後のクレイドルのブースターが全壊し、停止する。

『……一億、終わったか、まだまだ腐るほどいるがな、面倒だが、先は長いぜ、相棒』

「ああ、……もう、二度とあそこには戻れない……」

『……後悔は……』

「……しないと決めた、当然の報いだ、それどころか、この大罪は償いきれはしないだろう、だからすべてをやり遂げる」

『上々だ、良い心がけだな、帰還するぜ』

ミッションの概要を説明します

ミッション・オブジェクティブは大規模アルテリア施設、カーパルスの占拠です

今回は、細かなミッションプランはありません、貴方にすべてを任

せます

あらゆる障害を排除して、目的を達成してください
ミッションの概要は以上です

ユニオンは人々の安全と、世界の安定を望んでおり、その要となる
のがこのミッションです

貴方であれば良い返事を頂ける事と信じています

『よう、首輪付き』

「ああ、オールドキング、……ころころ死ぬなよ？」

『分かってるさ、お前も気をつけるよ？相棒』

一か月、企業や世界情勢は、何かに縛られたように動かなくなり、
唯一見せた動きは先日来たその依頼のみ。

恐らくは最大のネクスト戦力を投下してくることだろう、確実に殺
しにかかってくるはずだ。

しかし、この戦闘さえ乗り切ればあとはすぐに終わる。

俺の機体の足がカーパルスにつくと同時に、サウンドオンリーの通
信回線が5つ開かれる。

『偽りの依頼、失礼しました、貴方がたにはここで果てて頂きます、
理由はおわかりですね？』

—— BFFのリリウム・ウォルコット

『……まあ、そういうことだ、どうせ確信犯なんだろう？話しても仕方
ない』

—— GAのローディー

『所詮は獣だ、人の言葉など解さんだろう』

「……テルミドール」

『……テルミドールはすでに死んだ、ここに居るのはカロードのラ
ンク1、オッツダルヴァだ』

…… オームルのオツツダルヴァ

『お前とこうなるとはな、… 残念だが、私が蒔いた種だ、刈り取らせてもらっぞ』

「—— セレン姉さん…！？動かして大丈夫なのか！？」

『今は敵だ、説教は後にするさ…… つは…』

—— 何故…、姉さんはAMSなんて動かせば確実に死に至るって言うのに…。

…… いや、それだけの覚悟という事、それに俺も止まるわけにはいかない。

「排除する…！」

『かかってこい…！』

「戦争屋風情が、偉そうに、選んで殺すのが、そんなに上等かね…」
『黙れよ、テロリスト、無差別に殺して楽しいか』

こちらの敵はウィン・D・ファンションにGAのローディー。

まあ、時間稼ぎくらいは出来るだろう。

俺はこの戦いを生き残る気はねえ、まだまだガキのあいつに、重いもんを背負わせちまうのは忍びねえが、この二人を相手にまともに勝てる気はしねえ。

「じゃ、始めつか、覚悟しろよ？」

『死ぬのは貴様だよ、オールドキング、ここから居なくなるがいい』

「ふはは…言う言う、まあ後悔するのは気づいてからじゃ遅いんだぜ？」

『『死ぬ』』

ハイレーザーの蒼い光、バズーカの弾頭が今まで俺の居た場所を焼き尽くした。

『遅いな、小僧、戦場に迷い込んだか』

圧倒的なスピードで空を駆けるステイシス、視界の中央に捉えるのも中々に難しい。

しかし、それ以上に気になる事でもある、俺達の目的の首尾を聞く。

「……オツツダルヴァ、…いや、テルミドール」

『…なんだ？』

「クローズ・プランはどうするつもりだ？今からでは巻き返せはしないぞ」

『そんなことか、なに、意志を継ぐ者はいる、次の世代には上手くやるさ』

「……ツメが甘いな、お前は。戦闘も、その作戦も」

『何……！？ミサイル！？いつの間に……！うぐああ！』

ぐらり、と軽量なステイシスはミサイルの連撃に一瞬では立て直せぬほど傾いている。

その隙を逃がすはずもなく、左腕に装備したO7-MOONLIGHT、そのエネルギーで出来た刀身をステイシスの体に叩きつけた。

『最後……負ける……そんな……運命……か……、……かあ……さん……』

両断されたステイシスが大きな音を立て、水中に没した。

『……！そんな……！ステイシスが……！』

『リリウム！来るぞ！』

上空からマシンガンを乱射、左肩につけたOGOTOをリリウムに照準し、——放つ。

『かわしきれない……！』

そして、アンビエントごとグレネード弾頭が爆ぜ、爆炎が血塗られた色の機体を艶めかしく海面に映した。

その機体は動きを止めたシリエジオの真正面に降り、マシンガンの銃口をシリエジオに向けた。

『これ以上お前を好きにさせておくわけにはいかな……』

「邪魔はさせない、セレン姉さんだったとしても」

「はっ、終わるか…、…すまねえな、相棒、この辺りが俺の器らしい…、良かったぜ、お前とは」

言うだけ言っちゃったな、あとは成り行きに任せるだけ…か。まあ、深海以外にないんだがよ、ざまアねえぜ。

あとは、頼んだぜ…リン…クス…。

私はあいつが勝利を手中に収めることを見ていることしかできなかった、あいつはシリエジオの機動力をあっさりと上回り、あつという間にシリエジオを切り裂いた。

同様に、後輩であるレイテルパッシュを駆るリンクスも、最強の老兵も、あつという間にあいつの前にひれ伏すのみ、だった。

「当然か……、私が見込んだのだからな…、お前にやられるのも、悪くない…」

『姉さん…ゴメン、俺、行くよ』

「何を言う…、成就…しろよ…お前の———」

そこで、私の意識は消え失せていく…せめて最後の一言だけは言いたかったが、しかたあるまい。

お前は…私の誇りだよ…いつまでも…。

記憶の海から浮かび上がり、目を開く。

目の前には緑の粒子がゆつくりとこの巨大な砲台に充填されて行く様子が写されていた。

俺は、ここで、この砲台とともに、過ちを犯した人の業と共に、この世から消えてなくなる。

…… 幸せになる術はすでにない。当然だ、あれだけの人の思いを断ち切ったのだから。

覚悟はもう、とうに決めている。

コジマ粒子の充填が完了され、エーレンベルクの砲口から緑色の光が溢れだす。

浄化の光、アレが、俺を連れて行ってくれる筈。

「やっと、行ける……、姉さん……」

プロローグ（後書き）

なんか最初から超クライマックスですけど気にしないで下さい。

ここらへんで首輪付き（主人公）の正体や性格について触れたかったんですが、触れられたのは正体のみ…、これは酷い。

ISは次話から出すつもりですのでよろしくおねがいします

chapter 1 - 1

……どこだ……？ここは……？

白い、限りなく白で埋め尽くされた何もない無機質な部屋、あるのは俺の寝ているベッドとドア、天井近くにあるガラス張りの場所、それだけだ。

しかし良く見ると、映画などで見る秘密結社の収容施設のような。まあここはどこであれ、俺は死にそこなったらしい。

「フ……フハハハハハハ……、そうか、許されるわけが無い、か、あれだけの人間を殺しておきながら、まあ有り得ないだろうな、自害など……」

俺は自虐的に誰もいない白い部屋で自らを嗤う。

どのみち誰も聞いてはいまい、上のガラス張りが気にはなるが、監視されていようが今だけは自分を嗤いたい気分だった。

ひとしきり自らを嗤うと、やるせない気持ちになり、ボスリと枕に頭を埋める。

指の隙間から見えた天井には、何も見えない、どうやってこの部屋を照らしているのだろうか。

そんな事を暇つぶしに考えていると白いドアが開き、流れるような金髪を持つ妙齡の女性が俺の元に来て話しかける。

「おはよう、随分と眠っていたわね」

「……貴女は……？」

「人に物を訪ねる時はまず自己紹介するのがマナーよ、まずはあなたの名前を聞こうかしら」

「あー、そうだな……、まあ、首輪付きとも呼んでくれ」

「本名ではないでしょう？」

「名前などつくの昔に捨てたさ、職業が傭兵なもんでな」

事実、リンクスだろうがレイヴンだろうがこの世界で本名を使っている奴は皆無といえる。

理由は簡単、本名を名乗れば弱みを握られるかもしれないから、ただそれだけだ。

「へえ、その歳で傭兵を……あなた随分物騒な生まれなのね？」

「は？A M S適性があればどんな年だろうが傭兵になるだろう、折角の武器を無駄にするつもりは毛頭ない、今の時代なら尚更だ」

「ふーん、あなたのところではI S適性をA M S適性というのかしら？それに、今の情勢を見れば普通の人間の方が生きやすいと思うけど？」

「I S……？知らん単語だな、それに、ネクストを操るリンクスは最高の高給取りで有名だぞ、それに、今は経済戦争の真ただ中だろう」

「……？」

なんだ、この視線は、まるでそんなものなど無いとも言っているようじゃないか。

「……まあいい、それよりも、貴女の名前と、ここがどんな場所なのかを聞こう」

「……そうね、私はスコールと呼ばばいいわ、それと、ここは亡国機業の収容施設、簡単に言えば捕虜や実験体を収容、監視、研究する施設よ」

「ファントム・タスク、ね、組織に一定の目標や思想はあるか？」

「いいえ、特に、今のところ世界も安定しているようだから思想

については話せないわ」

「テロリストでは？」

「絶対に無い」

「ふーん、……で、何故俺はこんなところに居る？」

「こちらが聞きたいわ、……あなたは機密の施設に突然現れたのよ、危うく施設はバレそうになったわ、見つかったら寝ているところに刺しに行っていたかもね」

「……ぞつとしないな、しかし、まあここに来た理由は全く分からない」

「本当に？」

「ああ」

「……そ、ならいいわ」

何故生きながらえてこんなところに居るのか、それは俺には全くもって分からない。

強いて言うのなら神の気まぐれ、もしくは天罰とでも言うのかも知れない。

「一つ、聞いていいかしら、首輪付き」

「なんだ？」

「貴女はさつき、経済戦争とか言ってたけど、詳しく聞かせてもらえるかしら？」

「……おかしな奴だ、まあいい——」

「なるほどね……」

何が成程なんだろうか、その女性、スコールは俺の説明を聞くと考え込むように俯いた。

そして、一言。

「首輪付き、貴女はこの世界の住人ではないわ」

「何？」

意味がわからない、何を以ってそれを断言するのだろうか。

「まず、経済戦争、そんな事はこの世界では起こっていないわ、ついでに言えばトーラスやオーメルなどの企業も無い、国家はしつかりと成り立っているし、クレイドルなんてものも無い、現状、地球で認知されている最強の兵器はネクストアーマードコアではなく、貴女が耳につけている待機状態のイヤークラス、ISよ」

完全論破、それは俺に、俺が違う世界に居るという認識を与えるものだった。

それに、なんだって？耳につけてる見覚えの無いシルバーアクセサリが現状での最強の兵器？

「」

「言葉も出ない、か、当たり前ね」

「……いや、なんとか落ち着いた、これがドツキリでもない限りこちらの言い分は事実だろう。俺の住んでる世界じゃ地上にこれほど落ち着いた施設は無いし、クレイドルも俺が落とした、俺に言わせればあり得ない施設だからな……」

「落とした……？」

「いや、なんでも無い。それより、ISの事を軽くでいい、教えてくれ」

「……分かったわ、ISというのはまず原理として女性以外には操縦できない兵器よ」

「……じゃあ俺は操縦出来ないか？」

「何を言ってるの？貴女、女でしょ？」

「……E？」

あわてて自分の体を見る、胸板には魅力的な丸い果実がくつつき、体の線も見慣れたラインよりかなり細い、手足も長さはほぼ同じながらそのまま細くなった感じだ、実に女性的なラインを描いている。

「……………な、なんだ…、これは……………？」

完全に女性だ、ブツも無い。

「…もしかして元の世界じゃ男だった、とか？」

「……………そうだ」

「決定、ね」

「どうしてこうなった…」

「で、そのISなんだけど」

続行かよ、…まあそっちの方が心理的に助かるけど。

取り敢えずはそのISの待機状態のイヤークラスを見る。

黒の金属に縁取られた赤い宝石に光が反射し、キラリと輝く。

「しかし、これが兵器だとは思えないな、宝石がぱっくり開いてピームでも放つのか？」

「どこぞのポジトロン。イフル二発で死にそうな使。みたいね、でも、違うわ」

ベッドから降りて、白い床に足をつける、それ自体にあまり意味は無いが、いつまでもベッドに体を沈めているわけにもいかない。

取り敢えずは耳に付けたイヤークラスが兵器になる理由をぶっくらぼくに聞く。

「じゃ、どうやってこれを兵器と呼べって言うんだよ」

「まあ、落ち着きなさい、その兵器の正式名称はインフィニットス

トラトス、そのイヤーカフスはISの待機状態よ」

「インフィニットストラトス…」

「今から展開方法を教えるわ、まあ、簡単に言えば、ペットに呼びかける感覚でもいいと思うけど」

「良く分からねが…」

心中でイヤーカフスに眠る何かに呼びかける、来い、とそれだけ。次の瞬間、俺の体はフルスキンの装甲に包まれていた、これがISというものだろう、装甲が間近にある事や、そのまま立っている状態を鑑みるとどうやらパワードスーツらしい。

モニタに映る機体の外観を注視する

「……なかなか複雑な心境だ」

「そうかしら、話を聞いた限りと今の反応を見た限りでは満更でもなさそうだけど」

それは、まあ、もちろん、少なくとも自分の愛機だ、思い入れはそれなり以上にはある。

それに、嫌な予感だ、パワードスーツらしいが、念のためコンソールを呼び出してチェックする

```
HEAD      03 - AALIAH/H  system  chec
k - - - - - clear
CORE      WHITE - GLINT/CORE  system
check - - - - - clear
ARMS      HILBERT - G07  system  check
- - - - - clear
LEGS      LG - HOGIRE  system  chec
k - - - - - clear
```

```

FCS                                FS - HOGIRE    system  chec
k - - - - - clear

GENERATOR                          GAN02 - NSS - G    sys
tem  check - - - - - clear

MAIN BOOSTER                      S04 - VIRTUE    syste
m  check - - - - - clear

BACK BOOSTER                      ARGYROS / B    sys
tem  check - - - - - clear

SIDE BOOSTER                      03 - AALIAH / S
system  check - - - - - clear

OVERED BOOSTER                    KRB - SOBREERO
system  check - - - - - clear

name "bloody blast"              system  all
green

```

Ready?

目の前に現れた文字の羅列、それは、完全に愛機、ブラッディブラストのアセンブリを示すものだった。

ご丁寧にも戦闘準備まで整えているし、しかも俺の予想通りなら、

この機体は恐らく…、ネクストの完全再現機。

ある種悪夢とも言えるだろう、あの世界ですらネクストは単機で猛威を振るつたのだ。

この世界で言うISがどれだけの物かは良く分からないが、ネクストを越える性能を誇る事はまず有り得ない。

「……何をそんなに焦っているのかしら？」

「あ、ああ、いや、何でもない、ところで、ISの戦闘能力ってのはどんなものなんだ？」

「そうね…、まあ、多分ネクスト程ではないと思うけれど…、恐らく現用の兵器等なら普通に破壊できるわね、それで？他には何かある？」

「ああ、…もう一つ聞くが、人手は足りているか？」

「まあ、ISの部門は人手不足かしらね、……仲間になる、とでも？」

「いいや、助けてくれた恩があるからな、二回、ただ働きしてやる、俺は傭兵なんでな、金さえ払えば味方するさ」

しばし、無言。

「分かったわ、依頼があるわ、まずISを解除しましょうか」

「…かつこ付かないからそこは黙っていてほしい所だったが、まあいいか」

ミッションを説明するわ

今回のミッションは、イギリスの第三世代IS、サイレントゼフィールの奪取が目的となるわ

恐らく、敵の攻勢も強いはず、なにせ守る物が国家の主力ですからね
場合によっては、敵パイロットがそれに乗ってくるかもしれないわ
その場合、落ち着いて試作兵器、リムーバーを使い奪取して
こんなところかしらね、このミッションで、貴女の実力を測らせて
もらうわ

くれぐれも、撃墜なんてされないように

俺は出撃に備え、ファントム・タスクのドッグにて、ISの基礎理論を確認していた。

まずエネルギーを供給する、ISコア、これはかなりのブラックボックスで、恐らくこの世界にしか存在しない物質を使っている、もしくはアーキテクトの技術による代物かと思われる。

ネクストのジェネレーター技術もこれの足元にも及ばない。因みに理論は全くもって不明、解体でもすればどんな素材を使っているのか分かるところだろうが、貴重な戦力故に説明はされていないらしい。

まあぶっちゃけ必要な素材が分かっても、加工してISコアに出来るだけの技術が無いと無駄になるだけだから判断としては理にかなっているといえる。

そしてPIC、このシステムはまず最初に俺の目を引いた。

これを使用すればISの周囲の環境はほぼ宇宙空間の様な状態に出来る。

宇宙空間と違う事といえばブースターが有効な事程度、宇宙空間ではブースターを吹かしても空気抵抗が無いのでちっとも前進はしない。

…ぶっちゃけどういう原理が分からんがまあ進行方向の空気抵抗が完全になくなって従来のスピードとは一段階上の1000km/h程度は楽に出せるようになれると考えればいい。

まあ、簡単にまとめるとブースターの出力やこのPICの出力が高ければ亜音速どころか、光速を超える事も可能という事だ。

しかし、それが出来ないという事を鑑みるにまだこのISという兵器自体は完成していない、ということか。

これはアーキテクトの発表によると元は宇宙開発用のものらしいし。

仕方ないのでこれは一旦保留するしかないだろう。

次に、銃器を量子変換して、常に携行できるシステム、これさえあれば武装の付け替えが容易に行える。

不要な時は武器をしまつて機動力の底上げも行えるし、どうやらISは単純な火力だけではなく、器用さも追求した代物のようだ。

まあ、この機体の後付装備枠がどれだけあるかが問題だが、それにこの機体に存分に扱える物が今装備している、つまり、いつもの装備以外に何も無いというのも問題だ。

しばらくはこれで我慢するしかない、と言うことだな。

それに、これはAMSと似たような操作方法なのだが、AMSには無い汎用性も備えているようだ。

パイロットは女性に制限されるようだが、少なくとも、操作していてストレスが溜まりすぎて廃人になるということは無いらしい。

しかし、これはフルスキンだろうが、視界の邪魔をすることはなく、バイザーを付けているのに、そのまま、いや、むしろ明瞭に世界が映る。良いカメラだな。

感覚的にだが、頭や体をうごかさなくとも360°を見渡すことができた。

「……もしかしたら、最初にAMSを作ったやつらも、こういう物を目指して作ってたのかも…、終ぞかなうことはなかったが」

しかし、実際まともにみるとネクストよりもデリケートで高度な技術の結晶だ、まあ軍事用としてはネクストの方が進んでいるらしく、実弾もエネルギー兵器の出力や変換効率はネクストとは比にはならなかったが。

そうして考察をまとめながら時間を潰していると、ISのモニターに
先程スコールと名乗った女性の顔が表示された。

『そろそろ時間よ、首輪付き、出撃しなさい』

「了解、ブラッディブラスト、出撃する」

新たな相棒、ISとなった愛機、ブラッディブラストと共に、暗く
なった空に飛び出した。

次話へ続く - - - - -

chapter 1 - 1 (後書き)

またこれか…、ラストが尻切れトンボ状態過ぎて生きるのが辛い…。

まあいい、首輪付きにはオータム共々彼女の毒牙に掛かってもらうさ(噓

後、機体構成は各スペック見ててけとーに決めました、機動力重視の中量機、ぶっちゃけガチ機でも良いような気がしてきた、一応ブレーダーだし。

下に赤い糸が見えるけど気のせいだと信じたい。

P・S加筆修正しました、自分で見直すのは当然ですよね…申し訳ないっす

因みに一週間ずつ更新していければいいな、と思っております

主人公設定（注、第二主人公も入る）（前書き）

よくよく思ったら随分と無茶な書き始め方したなあと自分でも思う、
まあ…楽しめればそれで良いか……？

主人公設定（注、第二主人公も入る）

主人公（首輪付き）

日本での偽名「白坏アリサ」

身長174.8cm

スリーサイズブホアアツ！

ISの待機状態、赤い宝石のあるイヤークラス

アーマードコア4系の世界のアナトリアの傭兵に次ぐイレギュラー
ネクストを駆るリンクス。クレイドルを落とし、世界を混乱に陥れ
た一般大衆から見れば悪魔のような存在。

汚染された地上で生まれた数少ない人々の内の一人で、師となるバ
バ：セレンとは少年兵時代に知り合っている。

元から傭兵気質であるということもあり自らの利にならない事には
決して手を出さない。

行動原理は金、次に自らの思想、人のために働くことはあまり無い。
セレンには心酔しており、基本的に逆らうことはしないが、腐った
世界には制裁が必要と考えることもあつてかA C f aにおける所謂
『虐殺ルート』を苦悩しつつも選ぶ。

師でもあるセレンを、血縁関係は無いが姉さんと呼び、彼女に相当
懐いている。

その姿はまるでペットの犬のようだったらしい（セレン談）
彼の呼び名の要因とも言われる首輪は、彼にとって初めてまともに

祝ってもらった誕生日にセレンから貰ったらしく、風呂に入るときでも喜んで付けている。

基本的に一人でなんでもできる人間で、彼の愛機、ブラッディブラストは彼がアーキテクトを勤め、作業用のワークローダーさえあれば整備のすべてを一人で行う事も可能。

また、面倒臭いから、という理由で殆どしないがセレンと一緒に居る時は家事の大体を彼が勤めていた。

交渉系統は経験という点でセレンに劣っているため彼女に一任してはいたものの、人付き合いも悪くは無いため交渉も人並みには可能。

年齢設定は一応17、8歳の少年で、性格は年相応ではなく、40代後半の社長ののような落ち着いた物腰。

ある種ジャック・Oと似たような人間、容姿は端麗な方で、良く誤解されやすいがアツ方向に発展してるとかは全くない。…多分。

でも本作では女に転生してるから問題ないよ！やったね首輪付き！

首「……誤解されたら色々マズいから止めろ、水没させるぞ」
作「大人げないなあ…、あと俺水没さんじゃないからな？」

桐原零

身長176・5cm

ISの待機状態は灰色に赤いラインの入った大きめの髪留め

自分では日本中の高校一年生の統計をとって平均を求めたものが自分だと思っている。

確かに一夏に比べると地味だが、やや女顔で中性的なために密かに人気があったりする。

実は前世がプログラマだったらしく、機械に対しては割と強い。

僕っ子で優しそうな印象を与える顔立ちだがシャルロットとは違い、主に身長やら何やらの問題でほっというも大丈夫そう、とか、むしろ引く張ってくれそう、というのがIS学園女子の意見データ。

と言うよりぱつと見人畜無害でいつものほほんとしている、仲間内においての役割はフォロー・アシスト。戦闘スタイルにおいても反映されているがために、技術は高いがこの性格のおかげで勝ちきれずにいる。

この世界に来てから、それなりに暗い過去が出来ていたりする。一夏と離れた原因となった事件だが、これ以上はよそう、いま私が語るべき話では無い、それにふさわしい語り部（フロム脳）がいるはずなのだから。

主人公設定（注、第二主人公も入る）（後書き）

今回は彼の人柄の説明編。

若干作者暴走中ですが、まあ、気にしないでいただきたい。

次話はミッションオブジェクティブ、サイレントゼフィルスの奪取です、…別にミッションではあるけどオブジェクティブじゃ無いんですけどね。

あと感想とかって気軽に書いてくれても良いのよ？（チラッチラッ

chapter 1 - 2 (前書き)

よくよく考えたら来週お盆でしたねえ…

帰省しなけりやなんので取り敢えず今のうちに来週分書いときます。

予約投稿があるだろそれ使えよってツッコミは無しで、それじゃ、お願いし申すー

高さ2〜3 m程の赤黒い機体が背中から異様なまでの輝きを放出しながら海面をすべるように飛翔していく。

オーバードブースト、それがこの世界ではその機体だけが所有する最速の移動方法である。

もともとは彼の世界で実用化されていた重金属粒子、コジマ粒子を使用し推進力を得るもののだが、まあもちろんこの世界で適用できるはずもなく（心理的にも物理的にも）代わりにPICを酷使しているらしいのだが、メーターが4000km/h行ってるのは何かの間違いだろう、外付け型の大型ブースターVOBでもそんな速度は出せるものではない。

それにしても、ステルスを搭載、さらに光学迷彩まで標準装備にしているとは、改めてこのパワードスーツ、ISに使用されている技術の高さに恐れ入る、考案した技術者は化け物か何かなのだろうか。

OBモードを解除、通常巡航に移行する、ぶっちゃけOBをしたのは機体のテストのため、本当は別にいらない演出、のようなものだ。てか今から光学迷彩使うのにOBなんかやってたらまず光でバレるだろ、見たいもんもあるし、別に今から何時間で着けとか言われてないから、そこは俺の自由にさせてもらう。

光学迷彩を起動、赤黒い機体が周りの景色と同化して徐々に高度を上げていくのを感じる、ホントに操作してる感じではAMSと変わらない、てかストレスが無い分こっちの方が調子いいかも。

高度2000mまで上昇してきた、俺が下を向くとISのハイパー

センサーとやらが見たかったものを拡張していく。

「……ああ……、やっぱり、か」

そこにあつたのは今までとは違う、美しい世界、地上では特別環境保護区にしか無い筈の樹木が見渡す限り広がっている、今までネクストと繋がって見てきた荒廃しきった世界とはまるで違う景色。

「……本当、なんだな……、一体、俺に何をしろって言っただろう……」

一人ぼつりと虚しく呟く、答えるものは何もない、――――
いや、居た。

『好きに生きてもいいんじゃない？人類種最悪の救世主さん』

後頭部のあたりに人の声のようなノイズが走る。

気のせいでは無い気がする、これは確か、ISの機能で、ええと……。

『プライベートチャンネル、本来なら直接会ってコアどうしで登録しないとできないんだけどねー、この束さんはどんなコアでもパパッと繋げちゃえるのさ！』

プライベートチャンネルか、よし、覚えた……って、タバネ？

たしかこのISを作った技術者の名前がそんな感じだった気がする、気のせいかな？

『いいや、あつてるよ』

「そ、そうか、で、一体何の用なんだ？」

『んふふ、まあそのうちに分かるよ、後々依頼を出すから、その時はよろしくね、傭兵さん？』

「い、いやいや、待て待て！いくら何でも…『取り敢えず、今はそれだけ、んじゃーねー』『ブツッ』お、おいつ！」

なんだったんだ、全く、それにしても、アレがこれを開発した張本人だつてのか？随分若い声に聞こえたが。

……ああ、伝言か、なるほどなるほど、あいつは助手だな、うん、ガキっぽかったしな。

取り敢えずはこの話題はここで終わるとする、まあ話題もなにも一人しか居ないからただの独り言だが。

「……目標ポイント1km先に確認、か、思ったより早く着いたってことだな」

ステルスも物がいい物らしいし少なくとも、そうだな…800mまでなら行けるだろう。

いつそバレルの覚悟でOBで突貫してもいいが、機体のかさが違うので現地点からでは割と時間が食う。

ネクストだったら5秒フラット程でたどり着けるんだろうが、ないものねだりはできない。

「いや、待てよ…？ISって展開に一秒もかからないよな……、じや、戦場が基地から海に移動する程度だろうし障害物も無いから好都合……、それに、ちよつとあれだけじゃ欲求不満だし…、うん、突貫でいいこつ」

光学迷彩、ステルス、解除

やかましいアラートが基地内部に鳴り響く、何だというのだろう、
こちらはまだ眠っているというのに。

エマージェンシー！基地に近づくISを確認！尚も急速接近中！
目的はIS、サイレントゼフィルスと思われる！繰り返す！――

「……何だと！？サイレントゼフィルスを！？私の機体を強奪、もしくは破壊しようとも言うのか、その機体は！よろしい！ならば戦争だ！！」

まだ寝ぼけ眼の女性が立ち上がり血気盛んな言葉を吐きまくる。
ちなみにこの女性の本職は整備士。……思い入れはあるとは思いつけど貴女の機体じゃないでしょうに。
つられて起きた私は一応宿めにかかる。

「落ち着いてよ、貴女整備士でしょう？大丈夫、この子は守りきつてみせるから」

「む、……しかたねーなあ、頼むぜ、アリシア！」

「分かってるわよ、万が一のために退避していてね」

そう言い残して宿舎から轟音の聞こえる外に飛び出す。

そこで私が見たのは、まさに、地獄絵図だった。

基地の各施設から火が噴きだして、そこら中から人の肉が焼き焦げる嫌な匂いが漂ってくる、管制塔をチラリと見るが、真っ先にやられたのか塔の上部分はほぼ消滅し、残された部分からはちろちろと火が上がっていた。

無事なのはこの宿舎や倉庫などのみ、戦力になりそうなものは片っ端から殲滅されたらしい。

しかし、アラートがなってまだ30秒程度の筈だ、敵はどれだけの戦力を誇っているのだろうか。

倉庫から戦車が出るが、空中から飛来した二、三発の弾丸にあっさりと決られ、弾け飛んだ。

その弾丸の元を見ると、”禍々しい赤”がそこに居た。

よく見ると人間がまるごと入ることの出来る形状をしている、もしやあれはISなのだろうか…？

フルスキンのISなど第一世代型以外には存在しないはずだが…。

しかし、今はそんな事はどうでもいい。

「よくも、皆を……！力を貸して！サイレントゼフィルスッ！！」

激昂した私はISを今までで一番速い速度で展開し、その赤いISに向かって飛び出していた。

一体なんだ、この馬鹿げた威力は……！あちらの世界でのOGOTOその物じゃないか……！

決めたとおり、俺はオーバードブーストで急速接近し、浮遊するよ

うに背中に展開されている有澤製グレネードOGOTOを牽制射に管制塔に向けて発射した、亜音速を超える速さで打ち出されたグレネードは管制塔には当たるように撃ちはしたが、まさかあれほどそのままの威力だとは思わなかった。

命中したグレネード弾頭は管制塔やその周りの物を根こそぎ吹き飛ばしていた、まったくもってわけが分からない。

それを完全に攻撃と見たらしく、MRLSやら、SAMがこちらをロックオン、無数のミサイルが発射された。

身を守るために迎撃として右手に持つレイレナ製のマシンガンの弾丸をミサイル群に放つ、ミサイルは狙いどおりに誘爆を繰り返し、すべて消滅したが、その煙が晴れ、俺の網膜に写ったのは、まさに地獄といふべき景色だった。

「なっ、これは…!」

まさか、すべてあの世界に有ったままのスペックで来ているとも言うのだろうか。

『貴様あああああああああつ!!!!!!!!!!』

「!?!」

オープンチャンネル、声の発信源を見ると蒼い装甲のISが空飛ぶ板を随伴しながら飛んできた。

登録名『サイレントゼフィルス』

どうやらアレが今回の依頼の目標のISらしい。

あの青い板は何なのだろうか、随伴する自動照準兵器?...あ、飛んできた、どっちかつつとハイエンドノーマルの装備、オービットに近いらしい。

まあ、そんなことは関係ない。

「……悪いが、依頼だ、狩らせてもらう」

『誰が貴様などに!!』

罪悪感はあるが、これは依頼だ、しかし、最悪の予想が当たってしまつたらしい、こうなればリムーバーとやらを使うしかないだろう。しかし威嚇程度にでも、もしこの弾丸が当たれば絶対防御があろうが、その箇所を決り飛ばす、それだけの威力を確信できるほどの物だった。

つまり、使えるのはリムーバーのみ、概要を聞くかぎりでは使えるのは恐らく一回が上限だろう。

「……5対2より正直きつい……!!」

ビットの連射を空を駆け、かわしていく。

完璧に連携されたビットと精密射撃の間を縫って敵の場所まで行くのに加えて、たった一回しかチャンスは無い。

これはなかなかの難題だ、しかも武器は使用禁止、パイロットを殺すことは禁じられているため、一撃ですべてが決まる武器があつても邪魔なだけだし。

敵は近接戦闘する意味が無いため、誘き出すこともまず出来ないだろう。

と、なると、やはり突っ込むしか無い、まあさせてくれるかどうかだが。

正直P I C切って連続Q Bの方が楽に済むのだが、まあ、無理と考
えるのが妥当だろう。

P I CはI Sにとっては常にO Nのため、Q Bなぞ使えば下手をす
れば宇宙の彼方まで飛んで行く。

P I Cを切る事も出来なくは無いが現在は戦闘中だ、O Sいじる時
間なんてありはしない。

「ぶつつけ本番でI Sの機動って奴になれるしか無いってことが…、
はっ、まあ、他にI Sが居ないことが幸いしたな」

敵に他のI Sが居たなら少しマズいことになっていた、と思う。な
にしろ勝手が違うからな。

メインブースタやサイドブースターを巧みに操り青色のエネルギー
弾のスコールをかわしながら接近する。

しかし、こちらの思惑に気づいたようで一層弾雨を濃くしながら一
言。

『接近戦など！させないわ！』

「時間が無いんだよ！させろ！」

身を捻りながら青いエネルギー弾を躲し背中にあるO B用のユニッ
トを展開した、チャージがすぐさま完了し、弾かれたように機体が
飛んで行く。

狙いすました一撃が防御した右腕の装甲を弾き飛ばすが、それで止まるようならリンクスなどやってはいない。

OBで完全にサイレントゼフィルスを殴ることのできる距離に来た、一瞬でリムーバーを左手に呼び出す。

予想通りにサイレントゼフィルスは慌てて身を翻し逃げようとするが、もう遅い、起動したリムーバーはサイレントゼフィルスをからめとり、蒼い装甲を剥ぎ取った。

蒼い装甲が無くなり、信じられないというような顔をした女性が茫然自失に呟いた。

「そん…な……、嘘よ……私の…サイレントゼフィルス……！」
「……………悪いな」

蒼く輝くコアを手にして赤黒い機体はこの場を去った、目的は果たしたし、この場に居る理由は既に皆無。

むしろ増援が来ることを考えれば一秒でも速く離脱せねばなるまい。

「スコール、聞こえるか」

『こちらスコール、聞こえるわ』

「サイレントゼフィルスの奪取を完了した、これより受け渡しをしに行く」

『了解、待ってるわ』

赤黒い機体は空を飛翔していく。

「……許さない、あのIS……どんな手段を使っても取り返してやる……！」

海に落ちたサイレントゼフィルスの操縦者、アリシア・ラヴィラヴィは飛翔する赤黒い機影を睨み、そう呟いた。

chapter 1 - 2 (後書き)

ああ、今更気づいたよ、そうだよ、呼んでくださった方は分かんと思うが、サイレントゼフィルスの所属はな…

フランスじゃねえええー！まあちがえたあああああ！？

ええそうですとも、完全に作者の過失ですとも、正しくはイギリスですとも…orz
なんだよ3日くらい開けて気づくって…

(# - 乙 -) <クズが…空気にもなれんか…>

う…言い返せねえ…クソ…

取り敢えず修正は必要なのでやります、お騒がせして申し訳ない…

しかも今気づいたけどブルーティアーズも待機状態イヤーカフスやん、素直に首輪にしようか良かったぜコンチクショウ…

(- 乙 -) <所詮は獣だ、裏をかくどころか恥をかいたことにも気づかんだろう>

うつせ、うつせ！乙樽のバアアカア！

くこつから作品関連の反省く

うん、まただね、もはやクセだね、これは、文が稚拙でホントに申

し訳ない

そして名字は四脚の人が登場、いや超とっさに思いついたネタです、次は無い、多分

よく考えて見ればP I C って慣性停止するだけの装置だから空気抵抗が無くなるってのもおかしい話だ……。

ナインボールが来ても文句言えねえな（ハアハア

後でちよっと修正しときます

おや、思ったより後書きが長くなってしもった

（　・乙・　）＜…まあ、アリじゃないか、貴様……＞

いや、ねーだろ常孝……

感想、レビューはいつでもお待ちしておりますよー、よろしく願いますー

chapter 1 - 3 (前書き)

……チャプターってやってるけどどこで区切りつけるか少し迷ってきた……話、(……)的な感じにした方が良いかな？

またグダグダと思われませんが、うん、楽しんでいってけると嬉しいですねえ

chapter 1 - 3

合板でできたピットの床に金属の脚が降り立つ。

俺はそれを確認して、ISを解除した。

ふわり、とPICの余韻なのか数瞬の間だけ俺の体は浮かんでいた。なかなかいい心地だ。

…いい心地なんだが、このISスーツとやらはどうにかならないんだろうか。

妙にすーすーするっていうか、ていうか生地の面少なくてね？

ピットの整備員もこれのことを考えたのか女性じゃないし、なんて面倒くさいシステムなんだろうか。

いやまあ肌からの電気信号でこの重い部品が動くつてのは画期的で理にかなっている、んだけど正直本音を言うとこの恰好は恥ずかしい。

……いまさら顔にだすもんでもないけどね、この恰好で機体についての分析とかやってたし。

「お疲れ様、首輪付き」

と、どうでもいいことを考えているとピットのハッチがプシュウとマヌケな音を立て開いた。

豊かな金髪を流した端正な顔立ちの美女がピットに姿を現した、先ほどのミSSIONの雇い主、スコールだ。

「ああ、出迎えか、随分気前がいいな」

「……冗談も程々に、でもまあ、仕事はちゃんとこなしたみたいね、合格ラインよ。さあ、戦闘データと依頼の品をくれるかしら？」

「ああ、ついでにこれも持っていつてくれ、性に合わん」

「へえ、こういうの嫌いなのか？」

「嫌いつてわけでもないんだが……、なんか……気持ち悪い？……まあとにかく、受け取ってくれ」

そういつて『サイレント・ゼフィルス』のコアとともに奇妙な形をしたコア剥離兵器、リムーバーをスコールに手渡す。

しかし、冗談と分かったのはいいことだが、ああいうのはノリだろうに、つれないな。

「軍隊とか、傭兵とか？……私たちはテロリストよ？」

「そんなもんか、変わらないと思うが……ってアレ？俺口に出した？」

スコールはンフフとか言つてごまかしてさっさと引ッ込んで行つた……セレン姉さんもそうだったけど女性って人の心読む能力でも持つてんのかな。

「……てことは俺もそのうち読めるようになるのか、うーむ……」

……複雑だ」

「お嬢様」

やや低いが芯の通つた女性の声に俺は首だけ振り返る。

スコールと入れ違いになつたのか、この場にそぐわぬ黒と白のエプロンドレス、のような物を身に纏つた丸い眼鏡を掛けたおかつぱおさげの女性が俺のすぐ後ろに居た。

人よりやや小さいであろう顔は眼鏡に隠れていてよく分からない、表情も分からないので少し不気味だな。

……それにしても聞き間違えでなければこの女性は俺のことを妙な呼称で呼んだ気がする。

お……じよ……？聞いたことのない名前だったし無視してもいいかな。

「お着替えの用意ができております、さあこちらへ」

さあこちらへって促す言葉のはずだよね？なんで首根っこ掴んでズルズル引きずってるんだろう、ああっ擦れて痛い！？

「ちよちよちよ待って待って、自分で歩くから！」

「……了解致しました」

何故少し間があった、ともあれ俺はこの不気味、もとい不思議な女性から開放される。

と、思ったら無言でさっさと行ってしまった、ついてこいってことなんだろうか……？

まあ、このままの恰好はかなり恥ずかしいし見失わないうちについていくべきだろう。

無機質な壁にかこまれ、複雑に入り組んだ廊下をエプロンドレスにまとった女性は、迷う素振りすら見せずすいすいと進んでいく。そのスピードは結構な早さで、彼女についていくのは骨のおれる作業だ。…別に作業じゃないけどね。

速いと言っても聞いてくれそうにないし、何だかなあ…。

それにしても不思議な場所だ、先ほどのピットから何分か歩いたことでこの施設が大分大きいことが分かるが、大きさに反してドアが少ない。

昔の牢獄のように一つの部屋に牢のようにいくつか部屋があるんだろうか、収容施設って言うてたし。

てかなんというかSFとか映画でしかこんな施設見たことないな、まあ、ぶっちゃけそんなことはどうでもいいけど。

そんなことを考えているうちに目的の部屋に到着したらしく、不思議な…いい加減この名前飽きたな、よし眼鏡ちゃんとも呼ぼう。

「……メイとお呼びください」

「また読まれた……」

簡潔に自己紹介を終えたメイは嘆く俺をさらりと無視して無機質な白い扉を開けて中に入っていく。

多分ここが着替えをする場所なのだろう、中は数えきれないほどの整理された洋服で埋まっている。

……この世界は本当に贅沢なんだな、服なんて何日も着てそれから着替えてたぞ、ちなみに夏がかなりきつい、匂いはパイロットスーツのがひどかったけど。

「この中から、お選びください。」

「……硬いなあ。まあいいや、えーと……」

俺は下着の上に普段着に近いジーパンと、Ｔシャツ、適当なＹシャツを選んで適当に着込む。

ラフで過ごしやすい恰好になるが、どうやら胸がつかえているらしく、腹が出てしまう。

今更だが何故こんなにでかいのだろうか、ＩＳを展開した時も胸部の装甲がなんか浮ついてたし、しかも肩が重い、なんとなくだが改めて女になったことを実感させられる。

「……はあ、仕方ない、メイさん！これのＬサイズある？」

「お言葉ですが、お嬢様、もっと着飾るべきですよ」

「……え？」

無表情のメイさんから俺から言わせてみればとんでもなく予想外な

ことを言われた。

「…いつもこの服装なわけなんです、そもそも好きで着てるわけじゃないですし」

「まあそれもそうか」

いつもこの服着てるってすごいと思ったけどそんなことはなかった、好きで着てる訳じゃないってことは仕事用のユニフォームみたいなものか？

なんでもいいけどエプロンドレスつけてやる仕事ってなんなんだろう、…料理人？

「メイドでございます」

「メイド…？」

「簡潔に言えば召使いですね、まさか知らないんですか？」

「召使…ああ、あつたなそんなの、随分昔に聞かなくなったけど」

召使いか、あの情勢じゃ誰かを専属で雇えるのなんてクレイドルのお偉いさん方くらいだろう、雇われ兵士の俺には全然関係ない、まあ専属っていうとエロい響きがあるから人気なのかもな。

しかし変態と名高い王のジジイならやってのけていそうだ、前にオーダーマッチで会ったけど、あれならやってたかもな…、印象は噂のとおりだったし。

具体的に言うと、基本的には好々爺だが、父性が疼くのかなんのか気に入った女性を見つけると目つきが変わっていた。ダメな方に金も持つてるだろうからなお質が悪いな、普段どおりにしとけばいい爺さんなのに。

「まあいいや、んで着飾る、ってのは？」

「お嬢様は「ちよつと待った」…何でしょう？」

「お嬢様つての止めてくれるか？そんな柄じゃない。呼ぶときは…
そうだな……」

しばし長考、偽名を言おうと思ったんだが、多すぎたし、何より今俺は女だ、偽名が男性用のばかりでつかえやしない、困ったものだ。

「そういえば、スコール様からお嬢様のコードネームができたと連絡されましたね」

「へえ、…なんかアレだけどまあいいか、んで？」

「マシナリー、だそうです」

「…とりあえずは区切りはつけてくれるらしいな、まんま過ぎてセ
ンズ疑わざるを得ないけど」

マシナリー、つてのは確か直訳で【傭兵】のはずだ、まああいつは
コードネームじゃなくて普通に首輪付きって呼ぶ気がするが、まあ、
とりあえずは認められた、と思って間違いないんだろう。…ないよ
な？

「では、マシナリー様」

「……落ち着かないな、もういいや、リネでいいよ」

「リネ、ですか？」

「ああ、偽名だがそっちの方が落ち着く」

「ではリネ様、こちらへ」

「おう」

「失礼致します」

メイはそういうと、目にも止まらぬ速さで俺の服を脱がしてしまっ
た。

「何をする！？」

「服を脱がしたのでございます、着替えやすいように」
「いきなり過ぎるだろう！」

メイは聞き止めもせずクロゼットの中身を漁り、フリルのついたブラウスやスカートなどを無表情で両手に下げ、ずんずんと俺に迫る。

「まずはこれを ……」

この後、マイペースなメイが俺を着せ替え人形状態にして、どこから嗅ぎつけたのかスコールも着せ替えに参加した。

後で気づいて時間を計算したら三時間ほどだったが、俺には十数時間にも感じられたのは言うまでもない。

「首輪付きは素材がいいからいじるのが楽しいのよ」

「着飾るのは女性の特権です」

「女も楽じゃねーんだな……、身に染みたよ……」

「~~~~~」

光が極端に少ない部屋に、不気味で聴くものを不安にさせるようなメロディが流れる。

少しだけ照らされた部屋を見ると、何に使うのか分からない機械から、あらゆる物を繋ぐケーブル、果ては何週間前に食べられたのか分からないインスタント食品の袋が散乱している。

そんななかメロディの元を辿ると、不思議な恰好の女性が異様なま

での数のディスプレイの前に座っていた。

目の下は長いこと寝ていないのか見るからに不健康そうな真っ黒な隈ができている。

しかし、目の下の隈とは対象に、体はある程度引き締まっており、一般に言うグラマラスなスタイルだった。

その体を包むのは、赤の頭巾とスカート、白いシャツ、いわゆる童話の赤頭巾の服装を模した服だ。

この部屋の主である彼女は、片手間に世界の情勢を見つめている。

”片手間”に世界の情勢を見つめられるのもまた、彼女の特異性故だろう。

そんな彼女は、ある粒子を解析していた。

緑に輝き、エネルギーを放出し終わると黒い雨のように地に墮ち、汚染の限りを尽くす粒子。

「ふふうん、この世界であるもので再現はできるらしいけど、この束さんでも開発できてないってことは、まったく未知の粒子なんだろうね、あの施設で精製できるものじゃないだろうし。すると、やっぱりあの機体は別世界から来たのかな？ふふう、久々に興味のあることができて、束さんは感無量だよ」

そう言つて、この部屋の主、篠ノ之束は淫靡に口元を歪める。

「それにしても、ああまですぐに回収班が来るとは思わなかったよ、結局持ってこれたのはこの粒子とあの子が傭兵さんだったって情報だけだったからね……。まあいいや、過ぎたるは及ばざるが如し、さすがの束さんでも時間は巻き戻せないんだよ、残念無念、またらいねーん」と

暗に仕方ない仕方ないと言ってはいるが、やはり悔しかったらしく、眉間に少しだけシワがよっている。

「来年っていえば…、そうだ、篝ちゃんが高校生じゃないか！うんうん、下らないところだったけどちーちゃんがいるし、…はっそうだ！んふふ…いっくんも巻き込んだじゃえばさすがの篝ちゃんでも楽しくなるよね！うん名案名案、それに、いっくんのIS作るのにかこつけてアレの実験も出来るし、やっぱり束さんってば天才だね！」

一石二鳥と、希代の天才、篠ノ之束はその場でくるくる回りだす。こう言っではなんだが、どう見ても、どう考えても変人だ、どうあがいても変人、大事な事だから二（ry

「うるちやい」

べすっ、地の文に攻撃するとは何事か！

「うる ちや い」

あ、ごめんなさい。

「ふふん、解れば良いのだ、さて、そろそろ例のあの人に連絡しようかな！」

そっとうと束は携帯電話を取り出し……

「あの人携帯持ってなくね？」

しばらく呆けるのだった。

chapter 1 - 3 (後書き)

うつむ、気分で書いてしまった、まあいいか

そうそう、感想で有ったんですが、コジマジエネレーターは再現されてません、使えば大変な事になるので

で、主人公の名前は基本的に思いつきですかね、偽名だし、思いつきでもいいよね！

今回のゲストは真改だったんですけど月光振りながらどっかにすっ飛んで行ったんで無しです、申し訳ない

感想、レビュー、お待ちしておりますー気軽にどうぞー

chapter 1 - 4 (前書き)

毎度の事ながら夜のテンションでそのまま書いてますよ！

それにしてもカオスが少ない？ハハハハハハ、ハア……

もう昼なんだけど？なあにいゝ？きこえんなあゝ（ダラダラ

まあいいや！駄文ですが、楽しんでいってけると嬉しいです

chapter 1 - 4

ファントム・タスクで眼を覚ましてから一週間。時間進みすぎ？なんだ、そんなに私のプログラミングテクを見たいのか？そうかそうか、奇特的な奴だ、だが断る。

面倒くさいし何より書くことがなく暇だしな。

そういえば気づいた奴もいるだろうが一人称が変わっているが気にするな、… スコール、怖い。

私は任務もなく暇なのでここ最近整備室、もといピットに入り浸っている。

簡単に言えば私のISブラッディブラストの整備だ、この機体の調整は恐らくこの世界では私にしかできないから入り浸るのも仕方ないだろう。

目下の問題というと……

「……この武装の異常な攻撃力だな、どうしたものか」

これは最優先事項だ、一度解析してみたが、どうやらこの機体のブースターや武装の攻撃力はネクストのまま来ているらしい。

元は10m超の機体を1000km/h以上にまで引き上げる推力に、下手をすればネクスト以上の装甲を持つノーマルを全武器最低クラスのマシンガンでさえ十数発で屠るのだ、簡単に言ってしまうばありえない威力だ。

ちなみにこの機体の最高速度は5873km/hマジありえん、まあ全高が約10mで重さが軽く20tを超す機体の推力がどう計算

してもせいぜい約2〜3 m程度の機体にかかるのだから当然といえ
ば当然だが。

ブースターについてはリミッターを掛けるのはそう難しい作業でも
なかったし問題ないんだが、やはりというかなんとというか、武器に
ついてはこの世界に有るので作るしか無いんじゃないか？といった
結論しか生まれなかった。だってそうだろ？武器にどうやってリミ
ッター掛けるって言うのか、一瞬PIC転用しようかとも思ったが、
パッシヴならまだしもアクティブとなるとシステム構成作り直さな
きゃいけない上に下手をすれば銃の意味を為さない。レベルを上げ
て物理で殴れ？どこの世界に使える銃をわざわざ振り回す阿呆がい
るんだ。

「まあ、そうなると一番簡単なのは”月光”か、レーザーブレード
だし、何よりこの世界じゃPICのおかげで重量気にしなくても良
いからな、度を超えるとあれだけど」

「なーにぶつくさ言ってるんだよ、マリー！」

「あ、オータムか、どうした？」

黒髪のやや粗暴な目つきをした美女、スタイルもそれなり、と言っ
たところだが、野犬を思わせるその目つきによって残念美女、それ
に、彼女はスコールの”彼女”だ、残念ながらオータムのお眼鏡に
かなう男はいないだろう、残念な事に。

彼女は覆いかぶさるように私に抱きつく、平均と比べれば豊かな膨
らみが首に押し付けられるが元男とはいえ別段気にしない、なんか
もう初日からアレな感じだったしスキップは割と当たり前だっ
たりするのでもう慣れた、オータムの体にはそれほど興味あるわけ
でもないし。

「なんか悪口言われた気がするんだが」

「気のせいさ」

彼女とは例の事件の明日知り合った、話し方も似ており（ただ単にあつちが男口調なだけ）後は…まあ特に思いつかないが妙に馬が合った、というだけだ。親しみを込めたのかマシナリーのシナを略してマリーと呼んでくる、盲点だった上にネーミングセンスはスコールより数段上だ。ありがたい。

「いやさ、超暇なんだよ、スペシャルで2000回なアタシと模擬戦しようぜ」

「なにその超惨敗フラグ、怖い」

「ひーまーなーんーだーよおお、潜入任務もねーしよう」

「スコールに構ってもらえよいつも通り」

「スコールはなんか書類仕事に没頭してる、正式な幹部だから多少は仕方ないしい、邪魔したくねーからおまえんどこに来たんだろう？」

「知らんがな、私も暇じゃないし」

「遊べ！」

「だが断る！」

「…またイチヤついてるのか貴様等」

ピット内で戯れていた私たちに冷水のような言葉を浴びせる声の方に視線を向ける、端正な顔立ちに切れ長の瞳、ややくせ毛らしく外側に跳ねた髪で狼のような印象を与えるせいぜい14、5歳の少女が壁に寄りかかって冷やかな眼でこちらを見つめていた。

『M』だ、オータムはこの少女が嫌いらしく、見る前に『あ”あ”ん？』とヤクザのような顔で振り向いてる。

…… っただけ嫌いなんだ、一体。

「Mか、出撃するのか？」

「あ”あ”ん？」

「おいバカやめろ、こつちみんな、あとお前じゃない」

「… 兎戯だな」

「あ”あ”ん？」

「オータム、頼むから黙つてろ、キヤラ崩壊が著しいぞ。で？ 出撃か？ M」

「いいや、暇なので貴様が『あ”あ”ん？』……ら貰ったS・ゼフイルスの調整をしようここに來ただけだ」

妨害にも屈しないか、新しい、惹かれるな（棒
それにしても、Mが調整、ねえ。

「正直に良いなよ、私に頼みに來たんだろ？」

「…… チツ、頼むぞ」

罰の悪そうな顔をして彼女はISを展開させる『あ”あ”ん？』
貴様…… もうマジ黙れよ……。

無視するのが吉とみたほうが良いのかねえ……と考えていると。

「貴様…… この世界には不要だ…… 消えろ、イレギュラー……！」

「ダアアアイレイヴオオオオオンッ……！」

「…… カオス……、てか同一人物やん？」

オータムは奇妙な英語を叫びながら一瞬でIS『アラクネ』を展開し、S・ゼフイルスに飛びかかる。

私はどこか諦めてピットの隅で戦闘を眺める事にするのだった。

ゆるしてください

…どうでもいいが何故こいつと戦う事になったのだろう。
私にはどうにも分からないがちょうどいい。

「テストの汎用性も高くなったな、いい傾向だ」
「野郎ムッコロツシャー!!」

(作)…どうでも良いけどカオス過ぎるだろう…。

黙っている、作者、ここは貴様の居て良い居場所ではない。

(作)…これは酷い。まあいいや、もつと罵ってくれ。
変態があ！

そんなことをよそに私は初めての实戦テストに思わず口元を歪める。

「行くぞ…、その首貰い受ける」

「じゃあ！この野郎！ズツタズツタにしてやるわ!!」

『どうでもいいが直すの私だからな、せめてピットの外でやれ』

「聞く耳もたん!!」

そういうとオータムは両手にカタールを展開し片方を投擲しながら
突っ込んでくる。

私はすぐさま 星を砕く者 を展開しハイパーセンサーとスコープ
を接続、スラスターのエネルギーチャージを確認して後退しながら
狙い撃つていく。

しかし、発射された3発のエネルギー弾は輝く尾を引きながら虚し
く虚空を穿つ。

「オラオラどしたア!!隙だらけだぜ!ええ?」M”さんよオ!!」
(…チ…FCSの調整が必要か?ズレが酷すぎる…)

オータムは狂喜に歪んだ笑みを見せながら片手のカタールと『アラクネ』特有の八本の黄と黒の装甲脚で連携攻撃を仕掛ける。――

「フツバカが。」
「ぐあっ!？」

黒と黄の装甲脚のうち三つがぐにやりと曲がり帰ってきたエネルギー弾に撃ち抜かれ爆散する。

星を砕く者は試作とはいえＢＴライフルと呼ばれる偏向射撃が可能な射撃武器だ、うまくできるかどうかは一バチだったが上手く行ったな。

「読みが甘かったな、オータム」
「チイッ!クソがあっ!」
「ＦＣＳが頼りにならないのなら偏向射撃をすればいいだけだ、フ、ぬかったな」

サイレントゼフィルスのＢＴビットを射出してアラクネを追い立てていく。

「チクシヨウ…やられるわけには……!」
「ふふははは、見る!ゴミの様だ!」
「あ…、できたできた、意外と簡単にできたなあ。よしよし」

仲間割れだがこいつなら墜としても構わんのだろう?ふははははは。

『いいわけ……無えだろっ!』
「!?!」

『喧嘩両成敗だ、諸君、派手に行こう……』

見ると、血のように赤黒いフルスキンのISが物理ブレードの柄のようなものから明るい赤のエネルギーブレードを発生させていた。

「ぐっ…！何故邪魔をする！マリー！」

『邪魔するに決まっているだろう、脳みそまでカビたか…？』

どこか呆れたような口調でマリーは柄だけのブレードをこちらに向ける。

『エネルギーブレードなら調整はまだ楽だったな、これしかないけど、まあ充分だろ？』

「嘗めてくれる…！」

「悪い！マリー、後は頼んだ！」

『あいよ。面倒くさいし大人しくしろ、”M”。いくら暇だからって戦うこともないだろうに…ハア……』

帰投するオータムを見送りながら、ブオンと音をたてマリーはうす赤い刀身を発生させた。…これはマズいかもな。
仮にも相手はこれの元操縦者相手に無傷で密着しなければいけないリムーバーを当てて来たのだ、実力は確かだろう。

「チツ分が悪い…、しかし、引かぬ！媚びぬ！顧みぬ！覚悟しろ、ブラッディブラスト！」

『実は余裕綽々なんじゃないのか……？それに仲間内で覚悟しろって言われても…』

実は何気にテンション高い、なぜかは知らないが。
BTビットを飛ばして足止め、そして偏向射撃で一気に畳む、よし、これで行こう。

「この勝負、貰い受ける」

『言っじゃないか、しかし……』

何が起こったのか分からなかった、ビットが……一瞬で……溶解した……！？

ど、どうなっている……！？

私は改良したエネルギーブレード、月光を進行方向にあるビットに当てるために……どう表現すればいいかな……。

ああ、置いた、という表現があっているだろう、要するに最低限の動きでBTビットを切り裂いた。

「くっ……ば、化け物め……、当たれ！」

『やれやれ……』

BTライフルの連射、偏向を確実にかわしていく、が、やはり追跡能力は大したものだ、二回も三回も曲がるとは思わなかった。

尚追いつかるエネルギー弾を確認し、クイックターンで反転、月光のエネルギーブレードでなんとか叩き落とし、現状なんとか可能なレベルのクイックブーストで彼我の距離を詰める。

『まだ、調整が必要か、メインブースタがイカれそうだ』

「な、なに……！？ぐあう！」

左手の月光で 星を砕く者 を叩き斬り”M”の首を掴む。

『さ、帰るとしようか、有無は言わせないよ』

「は、はなせ…、ま、まりー……」

ん、すこし強すぎたかな、と思いピット内で丁度良かったし、と手を離す。

『はあ……これ以上は暴走しないように、さて、これで借りは返したよ？スコール』

「やれやれね、メツ、よ、”M”」

「く…、失礼する」

私たち二人に諭された”M”は早々にピット内から立ち去って行った。

ISを解除して冷たい床に着地する、素足じゃないから別にいいけどさ、もう少し温かみという物を云々かんぬん。

具体的に言えばヒーター欲しい、今冬って季節らしいよ、ぐれ…りんこれき…？で一月って行ってたと思う。

「まあ、なんとか、だな。しかし気難しい奴だ」

「そうね、戦力としては充分でしょうけど、協調性が無いのは勘弁してほしいところだわ」

「気に入らねえ…気に入らねえぜ、ったくよオ…」

意外と仲が良さそうに見えたけど…まあこれは言わぬが吉って所か。

「それにしても、首輪付き」

「なんだ、スコール」

「ただ働きは終わってしまったわけね、残念だわ」

「…金を払えば雇われてやるさ、防衛だろうが襲撃だろうが、な」

「あなたは高給取りっぽいから何かにかこつけてタダで首輪を繋いでおきたかったのだけど」

「……クソアマめ。元手も貰ってあるし、さっさと行くな」

「どこに行くの？アテでもあつて？」

「あるわけなからう、自営業でも始めるさ」

「……ふうん、まあいいわ、これを持っていきなさいな、首輪付き」

「携帯端末……貰っておこう、一応な」

私はステルスモードでISを展開し、ふわりと体を浮かべる。

助けて貰った恩は返した、一応ファントム・タスクのエージェント扱いとなっているらしいが、ここにいる理由は私にはもう何も無い。――Mは気がかりだが、まあなんとかするだろう。私の預かり知ったことではない。

しばらく飛行していくうちに、ふと気づく。

「……あー思い出した、サイレント・ゼフィルスの調整忘れてら……」

「……あああ、あああああ、あああああああ……、なぜ止めなかった！？」

「ものの見事に忘れてたわ、でも、まあ」

「クソ……あそこまで完璧に調整できるのマリーだけだったんだぞ

……」

「……オチとしてはなかなかいい線だと思うわ」

「相変わらず、辛辣だな、まあ、嫌いじゃない……ぜ？あれ、店と
かって国籍無いと開けない……」

「計画どおり」

chapter 1 - 4 (後書き)

Mが大分柔らかい性格…、どうしてこうなったどうしてこうなった。クツまあいい、今回は二つのアンケートに答えてもらいたいのですよ、いきなりで申し訳ないが。

まず首輪付きの名前(偽名)なんですが、今のところ三つ候補があるんですが、決まりき란のです。今回は協力していただければうれしいです。

名前は都合上伏せさせて貰うんだぜ！

1、和風首輪付き

2、洋風首輪付き

3、中華風首輪付き

…料理の名前みたい、アルエー

そして二つめ、首輪付きがどこの国に行くか、とそこで何をやるかです、これは企画が決まっただけで何するか決めちゃいないんです。自営業なので割となんでもできます、ってかさせます。あ、でもR15系の店は流石に無しで。

期限は日曜日までですかね

よろしく願います m () m

chapter 1 - 5 (前書き)

あ、アンケート…くう、この話は飛ばそうと思ったが仕方があるまい…

お楽しみくださいまし…

chapter 1 - 5

光学迷彩、ステルスシステムを展開し、通常スピード（と言ってもスピードは約400km/h、制限してこれとかつくづく思うが化物だ）で私は空を駆けていく。

しかし、ネクストと乗ってる時と感覚はあまり変わりばえない、全身を装甲で覆っているのだから当然といえば当然だが。

眼下に広がる樹海や、山を見ながら改めて美しい、と思う。こんな風景クレイドルだろうが環境保存区でも見たことは無い、それどころか過去数百年、あの世界には数えるほど森や山といった場所は無かったらしい。

理由は簡単、その頃から戦争をし続けてきたからだ。それに伴って戦争に関する技術はありえないスピードで進化していった、気づかないうちにすむ場所が無くなって行くとともに知らずに。

ああ、相も変わらずバカらしい、しかし、ああまでやったのだからいくら何でも…いや…なんか今更心配になってきた。やっぱり天罰なのかな…、これ。

と

『やっと追いついたー！速いなあもう！』

振り向くと、オレンジ色の奇妙な…ああ、思い出した、確かニンジンって野菜、のはず。

ニンジンって高速で飛行して喋るのか…、凄いな、この世界……

「…んなわけねーよ、…何だアレ」

わけがわからないよ、なにあの気味が悪い物体。

『気味が悪いって何だよ！束さんは抗議する！』

私は機体をその場で停止させて光学迷彩を解除する、…よくよく考えたら完全ステルスの機体探し当ててそれ見つけるってすげーな、それはともかくとして幼げで若干甘ったるいような声でニンジンは喚く、非常にうるさい。

「抗議つて…ん？聞き覚えがある声だな、…ああ、あの時の博士の助手か？」

『助手じゃないよ！束さんが博士だよ！しかもスルー！？』

「ツツコミの激しい嬢ちゃんだな、博士というからもう少し年配のBBAかと思ったが、まだガキじゃないか」

『束さんがキつて言われたの初めてだよ！！？あと先入観でBBAはやめようか！』

私は頭を掻きながらため息をつく。

『超面倒くさそう…、な、なんか酷いよ…』

「あーまあ、なんだ、どうでも良いけどなんの用だ？」

『…もしかして嫌われてる？まあいいや！そのIS見せて！』

スコールもまあお構いなしって言えばお構い無しだけど、どっちかって言うところいつの方が『お構い無しの雨』って感じがするのは気のせいかな？

自分勝手過ぎるだろ…。

「まあ別に見せても断つても私はいいんだが…、まあペイ次第つて所だな」

『えー…、それじゃあ…私が持つてる危険な危険な緑の粒子ならどーお？』

「……なんだと？」

私は耳を疑った、何故奴がそんなものを持っているんだ？ここにアレが来ていたというのか？

「事実ならどこにあるか教えろ、アレをこの世界で使わせるわけにはいかない」

『うん、わかってる。あんなもの使えばこの世界はあつという間に腐っちゃうだろうね、束さんでも正直手に余るものだと思うし』

「わかつているならすぐに教えろ、アレの有毒性は危険過ぎる」

『じゃ、見せてくれるんだね？』

「……わかった、仕方あるまい」

『イエーイ！やったあ！！』

「レッドフォックス？」

なんかずれてると思いつつ、そんな事をつぶやく、ちょっと後悔したのは言うまでもない。

正直なんだコレ、としか言いようがなかった。

せいぜい2、3mが関の山のニンジンの中に天井が見えないほどの
ただっ広い部屋があったんだから当然だろ？あんたもそう思うだろ
？…思わないのか？

「一体何がどうしてこうなったんだ？物理法則軽く超越してる気がするんだが」

ふふん、と妙な赤い服を着てウサミミというらしいカチューシャをつけたタレ目の女性が自慢げに無駄にある胸を張る、これは…私以上か。

「ふっふー、流石の…名前聞いてなかったね、君、あっちじゃなんて名乗ってたの？」

「あー…そうだな、アッシュ・リンクスとでも呼んでくれ」

元ネタわかる奴いるのかな、結構古いし誰が聞いてもわからないと思うけど、とどうでもいいことを考える。

リンクス、というわけであやかってみたが、ほとんどの奴が首輪付きって言うってたなあ、リンクスって呼んでくれたのラインアークの連中だけだった気がする。

「じゃああつちゃんだね！」

「頼む、やめろ」

背筋がぞつとした

「リンちゃん」

「アウトじゃね？」

作者に言わせれば後々困るって話だ

「くーにゃん？」

「なぜにゃんなんだ」

「えー、しゅーちゃん？」

「マシにはなつたが何故ちゃんをつけるんだ」

「気に入ったらちゃんかくんをつけるんだよ！」

なんか何言っても無駄な気がする、どうすれば良いのかな。てかいつの間にやらお気に入りに登録されてしまったらしい、面倒くせー。

「…私を気に入ったというのか？」

「うん！ミステリアスで魅力的だよ！」

「ミステリアスってより胡散臭いとは思わんかね…」

「え？なんで？」

「理由はないけどお前に気に入られるのは致命的な気がする」

「酷いや！取り敢えずちゅーしよちゅー！」

「近づくな、そしてこの話の流れでどうしてキスにつながるんだ」

ISを展開したまま左手で束の頭を鷲掴みにして止める、ゴンツッて音がこいつの頭からしたけど飄々としてるから大丈夫か。

「ぶー、まあいいや、そのままいてね、ちゃっちゃんとデータとっ

「ちやうから」

「ああ、それでだな、束」

「なーに？」

「コードを直接ISにぶっこみながら返事をする束、…装甲に傷はつかないんだろうな？」

「コジマ粒子のこと…その緑の粒子なんだが」

「ふーん、コジマ粒子っていうんだ、それで、どうしたの？」

「アレはお前の手で保管してもらいたい、今の俺は容れ物を持ってないからな」

「コジマジエネレーターは擬似的な再現しかしていないらしく、コジマ粒子の容れ物にすらならない状態だった、あれではエネルギーは精製できないだろう。」

「故にそんなものを抱えて移動することなど賭けても良いほどに不可能だった。」

「うーん、まあ仕方ないよね、どっちにしてもそのコジマ粒子は何でかはしないけど量子化が不可能っぽいし」

「面倒な…、ますます野放しに出来んじゃないか」

「あ、見たこともないエンジン機構だ、これがその容れ物かな？かな？」

「ああ、まあ出来損ないだけどな、理由は知らんが気づいたら壊れていた」

「ほうほう、なるほどー、見たこともない技術が一杯だね、ふふふ、凄くいじりたくなってくるよ」

「ブラックな笑みを浮かべるウサミミ、頼むからやめてほしい、直すのかかなり面倒なんだぞ。」

事実あつちでの事実上最終決戦じゃ、こわされちまった部分も多くて修理すんのに俺と整備メンバー全員がかって丸二日かつたからな。

でかいながらまるで精密機械！まあロボットなんて事実上そんなもんだしな、しかたないね。

「でさあ、しゅーちゃんはさ」

「ん？なんだ？」

「別の世界から来たんだよね？」

…… 本当にこいつには驚かされる、理由は聞いちゃいないが、まあ、コジマ粒子があれば充分だったかね？

「いやいや、君自身だよ、体を改造されてるよね、それに、隠されちゃいるけど接続用のプラグがあるもの。なにに繋ぐのか知らないけどそんな非人道的な物作ってる場所は無いよ？」

「非人道的… そうなのか？」

「え？だ、だつて構造調べてみたけど脊髄に直接つながってるし、これじゃ繋がれたものに來た衝撃とか、痛みが直接くるんだよ？こんな人道的じゃないでしょ！？」

「……死ぬよりマシさ、それにこいつは良い商売道具になる」

「しょ、商売道具つて、君の世界じゃそんなのが普通なのかい？」

「傭兵の間じゃ心を癒してくれるのは金と女つてのは有名だろ？自然なんか見れたもんじゃねえ、いや、ここじゃ見れなかった、か」

人以外の生物はあの世界では殆ど死に絶えていた、まあ生き残ったのは家畜程度か。

「まあ、私はどこの世界でも生き方を変えるつもりは無いよ」

「生き方…？」

「どんなに愚かだろうと、人類に、黄金の時代を……つてやつ？」
「…変わってるね、私にはそんなこと思えないよ、あんな奴等、生きていてほしいとも思えない」

この世のすべてを嫌悪するような表情で束はそう吐き捨てる、それを見て私はニヤリと笑んで

「奇遇だな私もだよ」

「え……？」

キョトンという擬音が聞こえそうなほどに束は目を開き呆然として
いる、先ほどまで凄いい勢いでキーボードを叩いていた指も完全に止
まっている。

思わず吹き出してしまった、しばらく笑っていると束はハツとして
頬を赤らめ、私に抗議する。

「な、なんで笑うのさ！」

「はははっ、いやいや、ふっ、あはは！鳩が豆鉄砲喰らったみたい
な顔初めて見た…あははははははははっ」

「ひっひどい！束さん泣いちゃうよー！」

「ははははは、まあ抑えろ、ふふっ、ん”ん”っ、はあ…、いやい
や久しぶりに破顔したよ、まあともかく、人生捨てたもんじゃない
のさ、それに」

「……それに？」

「自分が絶望した世界を子供に見せる物じゃない、悪いことを連鎖
しようとするのはバカのやることさ」

真剣な顔に戻って私は束にそう言った。おい待て何故顔を赤らめて
んだ。

「ふ、ふふふ、しゅーちゃんって男？」

「はあ？」

「あんまりに恰好良かったからね、東さん惚れちゃった」

「顔も見れないのか？ともかくやめてくれ、…割とマジで」

呆れきつた顔でISを何となく解除する。

「わお、神秘的美人さんだね！冬に本が熱くなるんじゃないかな！？」

「は？なに？」

そういえば容姿って言ってなかったような気がするな、必要ないと思つてたけど、さくs…え？楽屋ネタはやめてくれ？仕方ない。

ペンキを塗つたように白い髪に、鋭く蒼い吊り目、形の良い眉、ややふつくらとした唇、普通に美人と言える容姿だろう、白髪？老けてる？地毛だよチキショー！。

ちなみに私は鏡を見て微妙にビビつた、だって元の私とあまり変わらないんだもん、あ、つまり男の時ね。

変わつてるのは…そうだな、特徴的と言えば特徴的な白い髪が長くなつた事くらいだろう。

「まあ…ISのデータ取りは終わったんだからいいだろう？流石に何時間も地に足がついてないと落ち着かなくてな」

「別に構わないよ！ていうかはぐはぐしよっ！ねっ！」

「……………な、なぜそんなに興奮してる？」

「超人さん！はっはぐはぐ！はぐはぐー！！」

こ、怖い、たまにセレン姉さんもこんな顔してたけどなんなんだよ…！へ、変態！？

くっ…………、仕方ない、ここは…。

「実力行使だ、悪く思ふな！」

回り込んで束の首の後ろに手刀を叩き込む、氣絶はするであらう威力で叩き込む、が。

「ば、化け物か!？」

「お、おいつや、やめろバカ、揉むんじゃない！ひあん！」

「おお……感度はよろしいようですねー、ぐふ、ぐふふ」

「フッフッフッフウッフッフッフッフッフッヒュー！」

「は……はあ、はあ……」

もう何やったかは覚えてない、とにかくボコボコにした。以上。

chapter 1 - 5 (後書き)

休みオワタ…、こつから不定期更新になりますかね…。

あ、あとアンケートは一応まだやります、一の方はなんとかかなると思うんですが…二の方は意見が少なすぎて…。

来週の水曜から土曜辺りを目処にしたいと思いますので、よろしくなのです^^

あ、あと首輪付きの容姿の描写は忘れてたわけじゃないんだからね！…すいません。

アッシュ・リンクスの元ネタ？バナナフィッシュっていう漫画です、わかんないだろうな……。

束さんは変態少し増し？他のSS読んできると変態過ぎて基準がわからなくなる…。

すっかり忘れてたけど後書きに出すゲストしばらく呼んでないね、よし次はジェラルドさんと呼ぶとしましょう。

番外編、私が人類種の大敵となったわけ 第一話（前書き）

話の構成上仕方なくなつたので番外編でお送りする次第となりました、独自解釈しかありませんが楽しんで行ってください。

番外編、私が人類種の大敵となったわけ 第一話

話をしよう。

あれは今から…、三十六万、いや、一万四千年前だったか…、まあいい、冗談だ。

私が傭兵となった頃の話だな。

そう、あの日は私の毎度の事祝ってもらえなかった誕生日の日の事だ。

黒い雪がさんと降り注ぐ中、重装備の対汚染用のスーツを着込んだ俺の目の前には、一つの大きな鉄塊が転がっていた。

この無残にも鉄塊と成り果てた鉄くずは、もとは最強の二つ名を持つ兵器。その名もアーマードコア・ネクスト、通称”NEXT”というその兵器は選ばれた人間、”繋がる者”リンクスによって操縦される。だったかな、詳しくは知らん。

この機体の名前は、たしか…”シリエジオ”だったか。欧州の訳で”桜”の意らしく淡いピンクが目によさしい機体だったが、ライフルやミサイルが着弾して所々黒ずんでる。

操縦者の顔もドックで見たが、きつつい目をした”姐さん”という表現にあう女性だったような気がする。どうでもいいか。

ともかく相手が悪かったんだろう、相手はかのリンクス戦争の英雄、ホワイト・グリントだったし。

被害は酷いもんだ、あいつ俺たちをおびき寄せてライフルで少しづつ狙い撃ちにしていきやがったからな、おかげで基地への被害は無かったが、こっちはNEXTと共倒れだ、俺以外死んじまった、無念に違いねえ。

ちなみにホワイト・グリントに依頼したらしいGA社の部隊はレオ―ネ…じゃない、インテリオルの”レイテル・パラッシュ”だかに全滅させられたって言ってたな、ざまあみさらせ。

しかし、よりもよってついてないな、折角の誕生日に血の海を見ることがなるとは、あながち白い死神って呼び名も納得が行くとい

うものだ。こういうのも飽きるほど見てきたしな。

それはともかく、さて、どこがハッチかな、一応生体信号は確認できたけど、正直な話この破損状態で生きてるとは思えない、まあ死体だけでも運び出してやらないとな、鉄の棺桶じゃむごすぎる。

「ん……しよつと……、ここか」

無理に登ったコアの上、もとい人間で言う鎖骨の辺りにハッチらしき取っ手があった、俺はおそらくここだろうと取っ手をグリツと捻る。

バシユンと音を立てて開いたのは首の付け根、後ろあたり、なんでこんな紛らわしい構造してるんだ。

ともあれ、開いたのは事実、中の生きてるかわからない人を迎えるために俺は開いたハッチに向かって金属の感触を確かめながらよじよじとそちらへ向かう。

ハッチを覗き込み、侵入、意識は間違いなく無いだろう、首の後ろからコードたらしで力なく頂垂れてるんだから。

「く……つしよ…、クソ重てえな…、手伝いくらい生きとけよ……」

がっちり首に刺さってたコードを丁寧に引き抜き、そこにカバーを付けて頂垂れた女性の体を運び出す。

正直なところ、理解しがたいほどに重い、スーツの重量もあるだろうけど、なんで女の体がこんなに重いんだ。

こちらら仮にも働き盛りの十七歳だぞ、今なつたばっかだけでも！

不意に背負った女性が動くような気配を察する。

「つく……、き、君…は…誰…だ……？」

sideセレン・ヘイズ

私は誰かの背中に揺られていた、頼もしいような気もするが、どうにも少年のようなやや華奢な肩が私の体を支えている。まあ断言しよう、男の肩だ。

とりあえずは目をなんとか開き周囲を確認、そこは今の時代珍しくもない、私の所属する企業、インテリオル・ユニオンの前線基地だった。

体を動かそうと、力を入れようとするが、なんとも言えぬ脱力感に支配されている。

動く事は無理か、仕方ない。

「……つく」

何て事だ、喋るのさえままならないか、最悪だな。

「き、君…は、だ、誰……だ……？」

なんとか尋ねることができた、言葉を発する度に痛みが走る。

黒い防護スーツを身に包んでいるらしい彼は、変声したてのやや低めな声で私に応じる。

「まだ喋るな、アンタNEXTに乗ってて墜とされたんだ、無理すりゃ二度と喋れねーぞ」

NEXTに…？ああ、そうだ、相手はあのホワイト・グリント、リンクス戦争の英雄。所詮旧世代の私には荷が重かったというわけか…。
しかし、相変わらずブリーフィングを裏切ってくれる、つかみ所のなさすぎる奴だ。
ただ単にGAの部隊を潰すつもりでかかったのは思い違いだった、というわけか。

そこまで考えると、私の意識はズブズブと闇に沈んで行った。

side unknown

やれやれだ、流石に体に堪える、一キロとは言え成人女性担いでここまで来るのは苦痛でしかねーぜ。

訓練で似たような事はしてたから多少堪えるくらいだが、もう今日は疲れた、明日あたりに医療班も送られてくるだろ。

ああ、そうだ、気は進まないけどあの人脱がさないとな、流石に放置ってわけにも行かないし…、まあ描写カットでお送りしよう、え？なんだよ全カット？需要が無い？…ああ、仕方ないな。

つてなわけで翌日、ぎゃーぎゃー言うな、大人の事情だ、ちなみに、ちよつと興奮したぜ（キラッ
それ以上に痛々しかったけどな、まあ仕方ないだろ。

というわけで一目、やはり傷は深かったらしくえーと…霞スミカ、だっけ？はずっと眠ったままだった。

生き残りも探してみたけど、やっぱりなかった、上層部はさっさと見切り付けてどっかに行っちゃったしな。

この辺りにいる人間は俺ら意外だと死体だけらしい。

死体処理も早々に切り上げてシリエジオをドックに収容、俺的にはNEXT技術ってやつに前から興味が尽きなかったからな、いい機会だ。

しかし、損傷は思った以上に深刻、内装にはあまりダメージは無かったが外装フレームは複合装甲を始め、果ては硬いとは言えないものの装甲に守られているはずのアクチュエーターまでも損傷、右腕部は吹き飛んでるし頭部はカメラまで露出され、両脚部は膝から下は穴だらけ、左腕部が健気にレールガンと称される武装を持っているが、そろそろ限界が来るだろう。

「外にもエネルギー切れのパルスガンやらが落ちてたな、後で回収しとくか」

まあ総合すると酷すぎる状態だ、整備士もないし、素人の俺じゃまず完璧に直すのは不可能だろう、資材もないし。

「はあ…、まあやるだけやるか」

どう考えても貧乏くじだな、これは。

side セレン・ヘイズ

目を覚ますとそこは無機質な病室だった、まあ…当然か。

しかし、確認できる限り私は全裸なのだが、まさか、あの男が私を脱がしたのだろうか、…寝苦しくて脱いだんだな、きつと、うん、そうに違いない。しかし、包帯も巻かれているところを見ると…、これは免れないな、よし、助けてくれたのに何だが、お礼に殴ってしまうとしよう。

まあそれはともかく、なんとか動く首を時計に向けて時刻を確認する。

どうやら一晩寝たみたいなのだが、体の痛みはそれほど軽くなっているとはいえないな、まわりつく汗が不快だ…。どれだけ文句を言おうとこの状況は覆せないことには変わらない、仕方ないので寝ることとしよう。

朝日に顔が照らされる、…まぶしいな。
ん？

「すう……すう………」

だ、誰だこの少女は…。

そこに居たのは白いショートカットの幼さの残る顔に疲れ切った表情を貼り付けて寝息を立てる少女だった。

「医療班か…？いや、ここは男しか居ないと聞いていたが、ユニオ

ンから増援が…?」

いやいや、なんで医療班がここで寝ているんだ、あり得ないだろう、常識的に考えて。

「ど、どういうことだ…?」

「俺がお前をここに運んできたということだ」

「…え?」

新たな登場人物か? いや、聞き覚えがあるな、まさか、と振り返ると、そこには目を擦りながらむくりと体を起こしている少女(?)の姿があった。

「…何を不可解だといったような表情をしている、霞スミカ」

少女ではなく、少年だったらいい、よく見れば肩幅もそれなりに広くがっちりしている。

「いや…、なんか…、うん、まあ殴るのはやめておこう」

「…恩人に手を上げるつもりだったのか、しょうもないやつだ」

「む…すまん」

氣勢がすっかり削がれてしまった。

「しかし、見覚えがないな、今までここに居たのか?」

「対コジマ粒子用防護スーツを着ていたからな、まあ見覚えがないのは当然だろう」

「しかし…、君は何才だ?」

「十七だ、まあいわゆる少年兵さ、ちなみに生き残ったのはアンタと俺の二人だけ、まあ相手が相手だったし仕方あるまいよ。……さ

て、あんたは養生しな、俺は基地の処理がある、あいつらを土に埋めてやんないとな」

そう言つて彼は食料を置いてさっさと出て行つてしまった。

「戦争孤児…か？それにしても少年兵とは……、未だにそんな人間がいるのだな…」

そつつぶやいて、セレンは上空を飛びつづける幸せで溢れた揺り籠を見つめるのだった。

番外編、私が人類種为天敵となったわけ 第一話（後書き）

話の構成上出さないといけないのにどうあがいても時間がとれない
…！？

で、でもこれをやらないと…にしてもセレンと首輪付きの出会いま
で戻すのはやり過ぎた…か？

うおお…まあいい、ゲームのときの話になればズンズン進むはず…
！本編中盤までに終わらせないと…。

ちなみに首輪付きはまだセレンにデレてないです、はやくデレが見
たい…？すぐデレるからちょっと待って！

chapter 1 - 6 (前書き)

ゲストだぜ！（トータス松本風に）需要ないんじゃないの？って指摘はなしで！さあどうぞ！

<噂は聞いている、よろしく頼む、アナトリアのレイヴン

（・作）<……え？あ、連絡事項忘れてました、今回から本編つす
…それにしても、どゆこと？

ふふふ、いやいや、世の中捨てたモンでもないね。

こんなにこの束さんの興味を引く人物がいたなんて思いもしなかったよ。

彼女の名前はアッシュ・リンクス、多分偽名だね、間違いないね。容姿のほどは申し分ないし頭脳に関してもプログラムについては私を出し抜けるだろうからね、紛れもない天才って奴だと思う。

あとどうやら彼女はずいぶん物騒な世界にいたらしい、ISのデータ取りだから！って言うって頭の中の記憶をスキャンさせてもらったけど、血塗られた人生なんてものじゃなかったよ。

屍の上を絨毯を歩くみたいに歩いてると言ってもいい人生だった、さすがの私でも少し堪えたね。

……まあ！それはともかく！今はこの作戦を達成するとうしよう！

目標は無防備に寝ているしゅーちゃん！全力でいくぜええ！

端から見ればカタパルトか何かで飛ばされたのか、と思うほど加速してベッドに向かって突っ込んでいく束、どう考えても人間に出せる限界速度を超えている。

「とうっ！」

「…ふにゅ…？…！みぎやあっ…！」

彼女は束の足から巻き起こる轟音に目を擦りながらむくりと体を起こそうとするが、致死の威力に達するであろう束のタックルに猫が踏まれたような声を出し、そして意識を刈り取られていた。

「あははは、しゅーちゃんみぎやって何さー、猫みたいだよ？」

タツクルの勢いのまま彼女に馬乗りになった束は、笑いながらバンバンと彼女の纏っていた布団をぶっ叩き埃を発生させていた、迷惑極まりない。

下敷きとなった朝っぱらから思い切り意識を刈り取られた彼女は流石と言うべきかすぐに目を覚まし、自分の上にいるモノを確認するや否や、暇つぶしに作ったというES用のリボルバー式のハンドガンを展開してぶっ放した。

「この前は上から降ってきて、一昨日はベッドの下から胸をもみ上げて、昨日は忍び寄って【自主規制】、今度はタツクルで意識を刈り取って【自主規制】でもするつもりだったのか？このド変態が」
「あ、あぶつ、危ないよお！いきなりリボルバーぶっ放すなんて！この束さんを殺そうとも言っの！」

「殺さない理由が見当たらんわ！危うく【自主規制】されるところだったんだぞ！！」

「いいじゃないか！愛を確かめあおうよ！」

「お前に対する愛情など私は欠片もちあわせてない！この変態め！！」

「ああっイイツもつと言つてええ！」

「目え覚ませやああ！！」

篠ノ之束謹製の移動型ラボトリ、我輩は猫である　は漏れることの無い雑音を出しながら空を飛んでいた。

「さて、これで偽装工作は完了か」

私の目の前には愛機、ブラッディブラストの前身である黒い機体、ストレイドが鎮座していた。

忘れてたけど今私、というかこのISは国際指名手配だったんだよね、サイレント・ゼフィルスの件で。

偽装工作云々はそういうことなのです。

まあそれは置いといて。

ストレイドは、レイレナード最初期のアリーヤ、と呼ばれる高機動型の中量二脚の機体をベースとしたものをセレン姉さんが少々アレンジを施した機体だった、今では私の扱いやすいようにフルチューンが施されている。

武装はレイレナードを元にした幅の広い剣のような形状のマシンガンに、安定性や威力を増すために重くなったホワイト・グリントが使用していたものを元にしたライフル、ネクストとして見せかけないために背中武装は非固定の翼のような形状の大型のスラスタ（天使砲ではないので悪しからず）と、それに付随するように中型のマガジンが翼の根元にくつついている。

なぜストレイドが再現できたか？これは束によると専門的な話になるんだが…、まあ飛ばしたいなら適当にマウスをスクロールだ。

このブラッディブラストは、ISコアだけで自律しているようなものらしく、本来このような装甲は無いらしい、代わりに莫大、否、無限とも言える後付の武装枠がある。

本来ISコアはISという機体があつてこそ機能を発揮するのだが、その常識をぶち壊し、その膨大な武装枠の中に、ACというフレームすらを取り込み運用が可能という夢のような代物らしい。

これが何を意味するのかといえば簡単だ、戦闘中に自由自在に機体を乗り換えることが可能なのだ。

そうすればあらゆる戦況にも対応が可能となる、束の持論によると、第四世代のその上…？いや、第4・5世代型とでもいうのかな？だそう。

おまけにコアは食わず嫌いと来ている、つまり、フレーム作ればどんな機体でも再現可能ということだ。現状最強のISといえるのだろ。

束でもこれの開発は不可能だそう、いや、まあ理論考えるとコアから作り直さないといけないしな。

それとこの機体のことは当面はバラすことは無いらしい、ありがとう。

だが…変態はどうにかならんものか…。

頭を抱えうなっていると、その噂の主がとこととあり得ない擬音を出しながら歩いてきた。

「どつたの？しゅーちゃん、機体は万全みたいだけど」

お前のせいだ、お前の！

とまあ、感情的に叫んで空気をぶち壊すほど幼稚ではない、つもりだ。我慢してちよつとした問題点を話題に出すことにした。

「いやな、ぶつちゃけ依頼もないし、お前襲ってくるし、そろそろここでどつかで細々と暮らそうと思うんだが…」

「そんなのだからよ！しゅーちゃん！」

予想通り、束は頬をぷくーと膨らませ私の胸ぐらを掴み顔を間近に近づける。

「しゅーちゃんは私と一緒に！神様が決めたことなんだよ！」

「どこの神様だよ…、ガキじゃあるまいし我俤言ってるじゃねえ、私だって仕事にありつかなきや行けないんだよ」

「むううー！わかった！依頼なら良いんだね？」

「…？別に構わんが」

「じゃ、これ！」

携帯型のウサミミ端末を押し付けられる。

どうやら録音されたニュースのようだ。

『世界初の男性IS操縦者、現る！』

そんなプロットとともに画面一杯に一人の少年の顔がアップされる。

やや間の抜けた印象はあるものの、それなりに精悍な顔つきの少年、やや幼さは残るものの、立派に男の顔をしているだろう、そういえばどこか”M”に印象が似ているな。

「で？」

「…で？つてそれだけ！？」

「これだけでは判断材料にかけるだろう、身内ならいざ知らず」

「これはいつくんだよ？」

「ほうほう、気に入った奴の一人というわけか、で？」

束は気に入った奴を愛称で呼ぶという変な癖、と言うよりもある種の区別か？をしている。

「IS学園の生徒として…」

「私はこうみえても19でな、わざわざ恥をかかせる気か？ともかく学園に潜入する依頼なら断る」

「うう……、あ、そうだ、ちょうど良いところがあったじゃないか！」

ぴこんと束の頭の上に乗っているウサミミが直立する、…どんな手品を使ったんだ？

そして良い予感が欠片もしない、どうしてだろう、いや、わかりきっている、こいつの事だから絶対なんか企んでる。

「えっとね、今から作る機体持つてあるところに行ってもらおうかな！」

限りなく純真に、悪魔の笑みを浮かべて束は私に絶望の一言を叩きつけるのだった。

……。

まあ、転生させていい目にあわせるとは言っただけだね、こんなの全然いい目じゃないよ。

なにさ、この状況。

いや原作である程度知ってるっちゃ知ってたけどね、なにこのキツさ。

まわりは女、女、女、女だらけ！隣にガツチガツチに固まっちまった原作主人公もとい幼なじみが居るんだよ！

………はあ……まったくわけがわからないよ。

いやまあ僕は生粋のオタクでISファンで死んでもこの世界に行きたい！って言ったこともあったけどね。

事実そんなことになるとは絶対思わないよね？夢だよ、夢、まあ15年も覚めない夢なんてないだろうけどね。

わかってる、何もかも受け入れてしまったんだ、これはもう仕方ないでしょう。

え？僕の容姿？なにさ、そうだよー夏より顔がいいわけないでしょ？ザ・地味顔NO.1だよ、くそそう。

まあ転生してきたから今のために一応体は鍛えてるけどね、久々にあったこの唐変木、ガキの頃より器量よしだもの、やってられないよ、まったく。

アラジンの魔神っぽいおっさんにイケメンにしてほしいって言うときや良かった。

え？何を望んだか？ISを操縦できるようにしてほしい、だよ。言わせないでよ恥ずかしい。

しかし、あのジジイも偏屈だよねえ、あのかっこだったらちゃんと三つ叶えてくれるのが定石ってもんでしょ。

一つだけって差別じゃない？

まあいいよ、そんなことは。

当面の問題は――

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく願いします」

この憎むべき唐変木、彼に女子から注がれる視線は『まだ終わりじゃないよね？』みたいな感じ。期待されてるってプレッシャーを感じるよね。

一瞬たじろいで――周囲を確認……頼るようにつつちを見たね、幼なじみだと思って頼ったのが運のツキだよ？一夏。

そんな一夏に僕はいいから早くいいなよ、と呆れつつアイコンタクトで伝える。え？見放してるよ？それが何？

がつくりと一旦肩を落とした、それにあわせて女子の視線が一拳に集中。

「以上です！」

キリッじゃないね、バカだねこいつ。

呆れたようなりアクションをする僕と、某集合する番組よろしくずっこけるクラスメイト、そして――

スパアン！

うわぁ…相変わらず良い音するなぁ、強度があるとはいえ市販の出席簿だよ？黒光りするあのガワが万人の恐怖の対象、だと思っ。なぜか副担任の山田まや先生は物欲しそうにしてるんだけど…、Mっ気があるのかな…？

ともあれそこに居たのは我がクラスの担任こと織斑千冬先生。相変わらず黒いスーツが決まってますね（棒

スパアン！

「何故僕まで叩くんです！？織斑先生！」

「黙れ、気に食わん顔をしているからだ」

「り、理不尽だ…」

本当に昔っからこの人は…、まあいいや、威力以外はもう慣れてるし。

いやまあ、一夏とは悪友見たいなもんでね、昔はさんざ怒られてたよ。

と、そんなことを思い出している内に織斑先生がクラスメイトからキヤーキヤー言われて、一夏が織斑先生にしめられていた。

やはりというかなんというかヒソヒソとつぶやく声が周囲に聞こえる。っていうか原作知ってるから…え？なに？アンタ誰？え？メタ発言禁止？…いや、知らないよ、どうせ僕が介入するから多少ストーリーも変わるんだろっしこれくらいは許してくれない？ダメ？あ、そう。

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟…？」

「それじゃあ世界で唯一男でISを使えるのもそれが関係してるの

「？」

おいちょっと待てコラ、僕も動かしたよ！IS！それにしてもスル―される僕って一体…。僕ってホントに転生者？空気すぎてmobっぽいんだけど。

ぽん、と肩に手が置かれる、報復は忘れない、具体的に言うて殴っておいた。一夏め、ニヤニヤしやがって…！

そのやりとりを見たのか、IS使える云々言ってた女子は僕を気まぐすそうな目で見て…。

「あ、うん…げげほ、忘れてたわけじゃないよ？」
「……………」

今更…？

ふ、ふふ…不幸だ……。

と言うわけで一時間目、授業は難なくついていった、原作知ってたし、わざわざ痛い目会いたくないし。努力の人なんだよ、僕は。

一夏が内容まったく理解してないっばかったね、まあ相変わらずヘルプ！って感じの視線送られたけど、僕は自分のことで精一杯って感じでノートをとっていた、さっきの報いだこんちきしょう。

授業が終わり一夏に話しかける。

「まあ、久しぶりって所かな？相変わらずだね、一夏」

そつ、実は家庭の事情で僕と一夏は3年ほど離ればなれになってい

た、鈴？顔見知り程度かねー、それほど接触はできなかったよ。

「おお、零、なんだよさつきは無視してよー」

「え？ナンノコトカナー？」

「棒読みじゃねーか、まあいいや、さつきの授業なんだけどな」

「うん、どうしたの？」

「さっぱりわか「ちよつといいか？」…お？」

純和風の顔立ちに、長い髪を後頭部少し上で纏めて垂らしている、有り体に言えばポニーテールだね、うん、実に似合っている。それに身体的にも随分…いかんいかん。

つまり、筈だ、そっか、6年だしね、随分印象も変わるもんだなー、綺麗になったもんだ。

「なんだ？」

「廊下で話そう、ここでは落ち着かない」

「いつてらっしゃーい」

蚊帳の外オブザ僕はその会話に取り敢えず割って入る。まあ、手のひらひらと…文にするとややこしいね、手をひらひらと振ってさっさと行け、とかそんな感じで見送る事にする。

「…零か？変わらないな…」

およ、気づいた？流石だな、まあ筈の言う通り僕の外見に関してはそれほど変わってないから何とか気づくか。

「うんそうそう、まあ行つてらっしゃいよ、積もる話もあるでしょ？」

「あ、ああ、すまないな」

「なんだよ零、こないのか？」

「邪魔しちゃ悪いよ、僕はやる事あるし」

密かにうれしそうにする筈、と唐変木は僕のことを訝しげな目で見て、いいからさっさといきなよまったく。

さて、まあ…用なんて無いからこの視線に耐えつつけるしか無いんだけどねえ、あーやってらんないなあ。

「ちよつとよろしくて？」

「ああ、はい、何かな？」

声に振り向くと、そこにはドリル…げふんげふん、えーっとセシリア・ウォルコットだったかな？

まばゆいばかりの金髪と均整のとれた体つきが特徴の白人の少女が居る。やや下がった目尻がアクセントって所かな？

「えーっと君は確か、セシリアさん？よろしくね、なにか用？」

「あら、少しはものを知っているようですね、でも、用が無ければ話しかけませんわ」

若干お嬢様を気取った風な口ぶりだねえ、随分刺々しい物言いだ。

そして僕はぴこんと頭の中に浮かび上がった単語をそのまま口にする。

「ああ…宣伝？」

「み、身も蓋もない言い方ですわね」

だってさー、各国の反応みててさー、唯一ってわけじゃないけど男のIS操縦者って結構微妙な存在だね？ある程度アクション起こしてくるのは予想できるよ。何より元さげフンゲフン。

「まあそんなところですね、お見知りおきを」

「うん、専用機持ちなんだってね、がんばってー」

顔が若干ひきつっている、突っかかるうとしたんだろうけど無駄足だったね、残念ですた。

え？つままない？なーに、大丈夫、どっちみち一夏が何とかしてくれるから。…あれ？なんか巻き込まれるような気がするよ！どうしてだろう！

はあ…あいつは絶対やりあうだろうなあ…仕方ない。

少し時は遡る。

「倉持…技研？」

「そうそう、あそこの社長さんとは少しだけ仲良くさせてもらってるからねー、まあ類友？」

「ああ、わかった、まあた変態の巣窟だな？」

「頼むよー、ねー？」

「……まず変態を否定してくれ、まあ……金によるな」

彼女の行動原理はまず第一に金である。

「…相変わらず守銭奴だね…、まああそこは打鉄で儲けてるし期待はしていると思うよ」

「打鉄…、第二世代のISだったか？スペック上では割と堅実だったからな、まともな奴が多いのかね？」

こいつの知り合いって時点で何となく嫌な予感がするのはデフォな気がするぜ、少しずつ慣れてきてるのは喜ばしいことじゃないな…、修正が必要だ。

「まあ、依頼ないからどの道やることないしな…、仕方ない、国籍の用意をしてくれる」

この世界は国籍って奴がないと、どうにも不便な世の中らしい、まったく、あっちじゃ国自体無かったから国籍なんてもん無かったしな…、まあ区域渡るためにある程度の審査は必要だったけど、実質フリーだったし、何だかねえ…。

「ふふふのふ……」

取り敢えずだが、彼女の了解に言葉に、束はほくそ笑むのだった。

chapter 1 - 6 (後書き)

まずアンケートに関してはGathithitoさんの意見を反映させていただきました、アンケートへの協力、ありがとうございました！

そして首輪付きの名前は和風で決定！イエーイ！

圧倒的人気でしたねえ…まあ、そんなに票自体集まっていんですけどww

<放置プレイ…コレツイッ／／／

さて、本編に差し掛かったところで新たな転生キャラが出てきました、名字の方は直に公開すると思うよ！人気は…出ないかな。

さて…キャラを煮詰めるか…。

<私も煮詰めてくれ

いみわかねーよこいつ……

<それはもちろんピーツガガッ

見苦しいところをお見せしました…申し訳ない……さて…次は…あいつ呼ぶか。

p・s 追記と修正しましたー、まあ、代わり映え無いですけどww

機体設定晒し（？）（前書き）

「マスター、BGMは「9」で」

「マスターって誰だよ。あと前書きでやる事じゃねえだろ、それ。しかもBGMせめて歴代のアセンブリの奴にしろって」

「んむう仕方ない奴だ、Rememberで頼む」

「人の話を聞け！このバカ！！」

機体設定晒し（？）

ブラッディブラスト

主人公、もとい首輪付きの愛機、カラーリングは黒と赤のツートン、のように見えるが、関節部だけが黒い、作中では赤黒い、と表現しているが、元々は鮮やかな赤だった。

これをアセンブリしたのはORCAに本格的に参入したときで、つまりはノブリス・オブリージュが初陣。

作中では割とあっさり表現しているが、クラニウム奪取の際は必ずこの機体で出ていた、首輪付き本人の思い入れはかなり強い。

機体は極力速さを求めた中量級で、射撃での牽制を主軸にスピードを利用して一気に斬り込むと言ったスタイル。

I S v e rはフルスキンなのでネクストと全く変わらない。

武器は

右腕部。

通称モタコブ、重量のあるマシンガン。

弾幕としての使用が主ではあるが、その使い勝手の良さ故に戦闘の主力となる事が多い。

首輪付きもお気に入り。

左腕部。

通称月光、ムーンライトの名の如き輝きと異怖に値する威力を持つ。消費ENが難点だが、機体がこれの運用のために組まれているため、事実あまり問題は無い。

右背部。

通称オゴト、重量グレネード。

撃ち負けはせんよ…、当たるのであれば…！これは弾幕のついでにたまに撃つ程度。

牽制用のためにFCSはこれに向いていないが、中量～重量ならばまともに当たるためにたまに大活躍したりする。

また、本来首輪付きの技量は軽量機でも当てられない事は無いというレベルだが、堅実に攻めるスタイルのためにこれを使用するのは稀。

左背部。

通称おさげ、なんだか名前を見るとほのぼのするが、垂直ミサイル。基本的な性能が高く、火力の高い武装との相性がいい。

対フレアにも効果が高く、右腕部のモタコブと連動して弾幕を形成する。

ストレイド

レイレナード製のアリーヤというフレームで完成された首輪付き本来の乗機。

カラードにはこの機体で参加した。

カラーリングは闇のような漆黑で、本人の容姿になぞらえて”死神”とも揶揄された。

EN関係を主にチューンされていて、本来ならシステムでチューンできない消費ENをシステムブロックしてまでチューン、継戦能力は同じフレームを使用したどんな機体よりも高い。

ISVerでは頭部は黒いレーシングヘルメットのようになり、黄色い複眼がハイパーセンサーとなっている。

コアの特徴的などがった部分は鋭さはそのままに縮小されている。主な変更点はコアから脚部…というより腰部にかけてであり、形状

としてはアニメで良くある西洋風の鎧を模したもの。分かりやすく言えばセ○バーの鎧。

元々アリーの腰にあるスラスターは肥大化して大型の追加スラスターとして使用される。

…とある事情により腰部にスタビライザーが集中しているが、あまり意味は無い。(ハズカシガリヤガッテ…
特筆していない部位については基本的にネクストverと同じ。

右腕部

モタコブ、右はこれで確定の様なものらしい(首輪付き談)

左腕部

051ANNR。通称は良く分からない。BFFライフル?

比較的遠距離仕様といえるライフル、威力は高いが、重量が少しきつい。

しかし、首輪付き談ではあの重さがいい、撃ってる感じがする。との事らしい。

マガジン数も標準的で、十二分に運用に値する。

ハンガー、というよりも予備兵装

近接物理ブレード、西洋剣を模したいわゆるロングブレード。両刃で刃が厚いため戦術的な用途が広い。多少無理をしても大丈夫!(死語)

順次追加予定

非固定武装

無骨な翼の形状をした大型ブースター。
ミサイルポッドを内蔵しており、外付けに比較的大型のマガジンがある。

クイックブーストが使用可能、最大出力では擬似的なVOBとなっている。出番？ねえよ、んなもん！

白式

織斑一夏の乗機。

基本的に原作と変わらない。

順次追加予定

打鉄零式

もう一人の男のIS操縦者、桐原零の専用機

第三世代型IS、ワンオフアヒルデュー単一仕様は父神の楯 クロノス・レジスト

レジストは鎧じゃね？っていうツツコミは無しで。

その楯、不信であり、不可侵。

カラーリングは灰色、各所にアクセントとして赤いラインが入っている。

見た目はアーマードコアfaにおけるカラードランク7のロイ・ザーランドの搭乗機、マイブリス。

コアというより胸部装甲だけはテルスではなく、アルゼブラの軽量コアの見た目をしている。

スラスタとP.E.C.の出力はかなり高く、鈍重な機体を高速戦闘が可能な機体に仕上げている。

ちなみにネクストでは無いため、クイックブースト、オーバードブーストは使用不可能。

基本的にマイブリスのコンセプトは健在だが、搭乗者、零が実弾系統の武器の扱いに長けているため、一次移行で開放された武器は「ホルス」や「タイタン」などの実弾兵装。

ホルス

アサルトライフル、鷹の翼のような意匠を持ち、剣の幅広さはあるものの、厚みが無いため、無理に振り回して斬るよりも、敵の装甲に突き刺し、接射する事に長けている。

タイタン

巨人の神の名前を冠している、重量のあるガトリングマシンガンで装弾数はかなり多い。

名前の通り巨大で、零式の全長の半分ほどもある。

アダマス

零式にある近接武器では唯一比較的まとまな物理ブレード、タロットにおける死神のもつ大鎌の形状を模しており、レンジは広い。

しかし零式の武器では唯一アリスの作ではない。

エネルギーブレードも展開可能でその場合鎌の中心にある一種の展開装甲からエネルギーを発生させる。雪片式型の試作品。

アンロック・ユニット
非固定浮遊武装

天蓋

優美な曲線を描くシールド・ユニット、裏には換装可能なミサイルポッドや、グレネードキャノンを持ち、敵の裏を斯くことをコンセプトとしている。

見た目はラファールのシールドに似ているが、こちらは一回り大きく、装甲も厚い。

設定は順次追加予定

機体設定晒し（?）（後書き）

白式はいじらせてもらっただけだな！ちょっとだけだな！
いい、よね？

まあ、書いている通り、ここは機体が出てきたら順次更新して行きますので、よろしく！

chapter 2 - 1 (前書き)

新章突入、うん、いま思ったんだけど第二主人公不幸になりそうですww

chapter 2 - 1

第と一緒に帰ってきた一夏は着席にもたついて鬼の怒りが着弾、ご愁傷様。

そして二時間目、一夏が「電話帳と間違えて捨てました」と言って織斑先生にぶっ叩かれてた、以上。

これで四回叩かれた、まだまだ先は長いぜ、一夏。

簡単ってか手抜きすぎ？いや、いいんだよ、このファクターは物語ではそれほど必要じゃないもの。

そして待ちに待った（嘘）休み時間！嫌な予感しかしない、もしくはどうあがいても戦闘！だね。やれやれ。

まあセシリアが来るまで僕は一夏の相手をすることにしよう。

「それにしても相変わらず筋金入りのマヌケだね、一夏。普通あんなに飾りっ気の無い本電話帳と間違わないよ？」

「うっせー、俺にはどうしても古い電話帳にしか見えなかったんだよ」

「ふーん、まあ、どうせ、分厚い冊子もらった時点でみる気なくしたんでしょ？」

「うっ、な、なんでわかった？」

「小学校のころから結構難しい問題に当たるとき、まず答えを見るか僕に聞いてくるかのどっちかだったものね」

冷たい視線で一夏を貫きながら教科書をしまって次の授業の準備を

していく。

一夏は凶星だったのか苦い笑いを口元に浮かべていた、…一夏がやるとどこか格好良く見えるから困るね。

……さて、そろそろかな？

「ちよつとよろしくて？」

うん予想通り、そこに居たのは腰に当てた手が様になっているイギリス国家代表候補生、セシリア・オルコット。

うん、口にだしていつてみたけど随分長い気がするね。

もうセシリアでいいね、ちなみに僕はオルコツ党じゃないんだよね、まあ僕等の基本は……ってなにを言ってるんだ僕は。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ、訊いてるけど…どういう用件だ？」

おつとつと、変な事考えてる内に話が少し進んでる、置いていかれないようにしないと。

「まあ！なんですか？そのお返事！わたくしに話しかけられただけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではなくて？」

「「……………」」

うわあ…、ここまでウザいニュアンスで話しかけてきたんだ…、一夏がキレるの無理ないよ、これじゃ。

ぶつちやけこついうの多くないとは言いきれないんだけどさ、ISが女しか操縦できない欠陥兵器である限りこついうのは居ないとは言いきれないんだよね…、残念ながら。

IS強いよ！↓女にしか操縦できないんだよね！↓あれ？私たち超偉いんじゃない？↓言う事聞きなさい！みたいな？

ブス…じゃない、モテない女性ほどこういった傾向が多いんだけど、うん、僕等にとっては屈辱的だよな。

まあ、どうでもいいか、実害ないし。セシリアは一応僕も認める美少女だしね！え、調子のんな？あ、あう、ゴメンナサイ…。

「悪いな、俺、君が誰だか知らないし」

無然とした表情で一夏は冷たくセシリアに言い放つ。うん、不機嫌そう。

その反応を察知したのかセシリアは氣に入らないものを見る目で一夏を睨んで、こう続けた。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

そんなことぶっちゃけどうでもいいんだよ、入試の成績なんて一々気にしてる場合じゃないだろうし、一夏の場合。

僕？入れればいいと思ってたし、ぶっちゃけ正規の入試じゃなかったから成績とかどうでもいいしね。

「質問いいか？」

「ふふん、下々の要求に答えるのも貴族の勤めですわ、よろしくですよ？」

「ああ、代表候補生ってなんだ？」

ズコーッ！つと後ろの方ですっこける音が続く。やれやれだね。

「あ、あ、あ、……」

「ちょっといい？セシリアさん」

「なんですの！？」

すごい剣幕、話したいことも話せないじゃないか全く。

「一夏は織斑先生からISに関する事は接触しないようにって釘刺されてたみたいなんだよね、だからISに関してはほとんどの無知なんだよ、代わりに謝るから許してくれない？」

「……そういう事なら……、仕方ないですわね」

（零、フォローサンキューな！）

（いいんだよ、友達だろ？それに、これ以上は続けてほしくは無かったしね）

（……？まあいいや、でも釘さされてたことなんで知ってたんだ？）

（第一回のモンドグロッソの時に見ない？って誘ったのに千冬さん理由にして帰っちゃったじゃないか）

（……よく覚えてんなあ……）

まあ（メタ禁止、な。）うわ、またアンタが、いいから下がってろよ僕のターンだぞ。

「それで？代表候補生って？」

「エリートなのですわ！」

「セシリアさん、飛ばしすぎ。簡単に言えば国家を代表してISを操縦する人、その候補生だね。言葉で意味はわかんと思うけど？」

「おお、なるほど、盲点だったぜ」

思わずフォローに走ってしまったよ、どうやら僕はこんなキャラらしいね。

「本来なら私のような選ばれた人間とは、同じクラスになるだけでも奇跡、そう、幸運なのですわ、オーケイ？」

「そーなのかー」

「…バカにしていますの？」

うん、僕もそう思った、完全に気が抜けてるよね、っていうかルーミア…。

無意識なんだろうけど怖すぎる、この世界って東方ないよね？

「大体貴方ISについて何も…ハッ、…なんでもありませんわ…」

憎々しげにこつち見ないで欲しい、なんでありのままの事言っただけで睨まなければならないのかな？まったく、わけがわからないよ。

「…それでも、まあ、ISの事でわからないことがあれば、…まあ泣いて頼まれたら教えて差し上げてても良くってよ？何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

あーそうだったね、うん、それはよかった。

「入試ってあれか？ISを動かして戦う奴か？」

「それ以外に何かあるというのですか？」

「なら俺も零も倒したぞ、教官」

「……は？貴方もですか？」

「あはは…、うん」

うんまあお察しのとおり教官は倒したんだよね、初回限定なのかこう、体を通して出るパワーっていうの？

お前は这个世界にいちやいけない人間なんだ！！うん、ちがうね。

まあ、意外とあっさりと倒せたんだよね。不思議なパワーは教官倒

したらすぐになくなったけど。

「わ、わたくしだけと聞きましたが……？」

こ、怖い…、俯いてぼそぼそ言ってるあたりにヤンデレの気配を感じる……！

「女子では…ってオチじゃないか？」

このKY一夏！余計な事を…！いやまあ多分そうだろうけどさ！

「つまり…私だけではないということですのね…？」

「……あ、ああ、ま、まあ取り敢えず落ち着いてくれよ、えーっと、セシリアさん？」

「これが落ち着いて…」

キンコンカンコン、とレトロなチャイムが鳴り響いた、休み時間終了のお知らせだね、助かった…。

「チツ…また後で来ますわ、逃げないことね」

怖い…原作こんなに荒れてなかったような気がするんだけど…、まさか…、いや、あらゆる意味で僕の所為？

ナチュラルに舌打ちしたもの、セシリアが。怖いっらないよ…、全く。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

各種装備…武器じゃなくてハイパーセンサーとかの類…だよな？実

実践だし、武器の特性については結構後ろの方のページにあるし。えーっと、ああ、うん、やっぱり基礎知識だから前の方にある。これのことだね。

と、そんな僕の奮闘虚しく。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

忘れてたんだぜ（キリッ

スルーシヨルダーだね（ドヤア

じ、自分ながらウザい…。

「クラス代表者とはそのままの意味だ、対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ有り体に言えばクラス長だな。ちなみにクラス対抗線は、入学時点での各クラスの実力水位を測るものだ、今の時点で大した差はないが、競争心は向上心を生む、一度決まれば変更はないのでそのつもりでな」

そうだよ、なぜこれを忘れていた！？マズい、マズいぞ…、管制室！援護しろ！！

「はい！織斑くんを推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「一風変わって零くんっていうのも！」

「アリね！支持します！！」

悪化……だど……？管制室！援護しろよお！！

「お、俺！？」

「い、イヤだ！」

立ち上がる一夏と、ドン引きしてがたと椅子に座ったまま少し下がる僕。

「織斑、席につけ、邪魔だ。桐原、他薦されたものに拒否権は無い。さて、他には居るか？いないのならこいつらのどちらかになるぞ」

「き、鬼畜……！！！」

「断固抗議する……！」

「ええい黙れうるさいぞ馬鹿者共」

スパパアン！と良い音が僕と一夏の頭から鳴り響く。痛い……！

「待つてください、納得いきませんわ」

あくまで冷静にセシリアが言い放った、その声は異常に存在感があり、うん、すごく怖いです。

「このような選出は、わたくしには侮辱にしか聞こえません、大体、男がクラス代表など、恥さらしな良い所ですわ、このセシリア・オルコットにそんな屈辱を一年間味わえというのですか？それにイロモノを使って、もしクラスが負ければどうなさるおつもりなんです？」

うわ……これはひどい、全部正論なんだけど、…………イロモノとか道具扱いか。

「実力からいけば私がクラス代表になるのは必然、それを物珍しいからといって実力もない極東のサルに任せるなど、ありえませんか！私はこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、

サーカスをするつもりなどカケラもありません!!」

途中から普段の調子が復活したみたいで、少しだけやかましいセシリアが戻ってくる。

しかし日本人を極東のサル呼ばわりとは…おにーさんちよつとイラツと来たよ。

「いいですか!クラス代表は実力トップがなるべき!そしてそれはこのわたくしですよ!!」

若干演説みたいになってきてるね、そしてクラスの数人が熱心にセシリア見つめてんだけど…、まあいいやほつとこう。

「大体文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体!わたくしにとっては「もういいよ、黙ってくれる?」…!??」

いやー流石にキレるわ、もうこれ以上聞く気もなくなった。

「後進的って言うけどIS開発したの日本だからね?それに、イギリスだって島国でしょ?何を血迷ったことを言ってくれてんだか」
「イギリスだって大してお国自慢ないだろ、世界一マズい料理で何年覇者だよ」

もういいや、宣戦布告じゃ、ものどもであえい!

「なっ!!?」

確信犯です、ハイ。

「あ、貴方達ね!わたくしの祖国を侮辱しますの!??」

「…先に日本侮辱したのそっちじゃない、それに、それ相応の悪いところを指摘しただけなんだよ？」

セシリアさんのぐぬぬ顔いただきましたー、ウエヒヒ。

「決闘ですわー！」

「おう、いいぜ四の五の言うよりわかりやすい」

「一夏は単細胞だなあ、まあ僕もそれで構わないよ、一夏の言う通りわかりやすいしね」

「言っておきますが、わざと負けたりしたら二人共私の小間使い、いえ、奴隷にしますわよ？」

「なめられたものだね、僕等が手抜きをするとでも思ったのかい？」
「全力を持ってお前の腐った根性を叩き直す…！」

「ふ、上等ですわ、オルコットの名を持って、その鼻っ柱、へし折って差し上げます！」

そしてふと気づく、織斑先生は後ろでニヤニヤしていた、…まさか…この展開、狙ったか！織斑千冬！クッダメだ、打開策が思いつかん！こんなものが僕の最後だと…（飛躍しすぎ）認めん、認められるかこんなこと…！

「さて、話は纏まったな、それでは勝負は一週間後の月曜、放課後に第三アリーナで行う、織斑、桐原、オルコットはそれぞれ準備しておくように、それでは授業を始める」

…逃げられないよ、君たち、そういうことだ、決らせてもらおう、セシリア・オルコット。

まあ、かっこつけてみたけど、授業中頭を抱えてどうしてこうなった？どうしてこうなった？ってやってたら出席簿アタック喰らったよ！一瞬記憶がとんだ気さえするほど痛かったです。

授業が完全に終わり、放課後。

昼休みに学食へ行く時大名行列ができたり、モーゼの御前の海のよう
に人の山が割れたり、今では教室の内外で女子がキャイキャイと
騒いでるが、まあそれはそれとして。

「と、まあ、大見得切ったのは良いんだけどね」

「な、なんだ？ 零」

ハッとしたように机に突っ伏していた一夏は隣に座る僕に顔を向け
る。

「僕等圧倒的に不利じゃない？ 一夏は専用機支給されるだろうけど、
それにしたって練習時間が圧倒的に足りないんだよ」

「え？ 零、なんで俺に専用機支給されることわかるんだ？」

「あのね一夏、君は仮にも初めに発見された男のIS操縦者だよ？
根拠はぶっちゃけ無いにしても二番目に発見された僕より渡される
可能性は高いでしょ？」

「あー、成る程、頭良いな、零」

感心したようにうんうんと一夏は頷いている。

「…？ ホームルームの時に織斑先生がなんか言ってたような気がする
けど、全然聞いてなかった。なんて言ってたんだっけ…」。

「お、お、おおおおお織斑くん！ 桐原くん！ どうして来てくれな
いんですかああああっ！！ 織斑先生ともう一人の方がお冠ですよ
おおおっ！！？」

テンパった様子の山田先生が教室に駆け込んでくる、うん走ってた時の事は忘れよう、あの胸は15歳には目に毒過ぎる。

「ど、どうしたんですか、山田先生、落ち着くためには深呼吸です！ハイ吸ってー……」

一夏の奴も暇人だなあ、でもなんだかヤバい雰囲気がある、こつ、全身から恐怖がにじみ出てくるような感覚。
先に行くべきか、山田先生を助けるべきか…。

「ぶはあぁっ！まだですかぁ！？」

「あ、すいません、山田先生」

「バカも大概にしておけよ、クソガキ共…」

…え？だ、だれ？織斑先生にちょっと似てる声だけど…、聞き慣れた普段からドスの効いた声でなく、恐怖を増すために普段使わないから故の恐ろしさがにじみ出てる…。

ギ、ギと錆びた歯車のような音を首からだしながら一夏とともに振り向く。

「初めましてだな…、このクソガキ共、聞けばHRで言っただけにも関わらず20分も人を待たせるたあ一体どういう見だ？」

「あ、ああ、あ、あのっですな…、ちょ、ちよっ、ととときゅう、きゅ、休憩をつ、して、かかかか、から、ですな」

原作では聞いたことも見たこともない白い髪の女性が僕等の頭にアイアンクローを決めている、いたたたたっ、織斑先生もただけどうして人間にこんな非人道的な威力を振るえるんですかっ！？

「それは貴様等が人を必要以上に待たせるからだ、馬鹿者め」

「織斑先生！た、助けてください！」

「ち、千冬ねえ、この人なんなんだよ！？」

「お前らの機体の責任者だよ、クソガキ共、いいか、私はな、面倒が嫌いなんだ」

ステインガー、だと？また昔のネタを…、あぎゃー！流石にそろそろヤバイ！貴方の所為で、頭がヤバイ！！

「白坏、世話をかけたな、もういいぞ」

「…ふん、こんなものが、まあいい、さっさとついてこい」

え？そ、そういえばさっきお前らの機体の責任者って言ってたっけ、ということとは倉持技研の人か？

なんでこんなメインヒロインにも負けないルックスなのに描写されてないんだ？

そうして考えている内にアリーナにつながるピットの扉の前で一行は止まる。

「余計な事を考えているな、さ、ついたぞ」

「えーっと、まさか…、専用機ですか」

ニヤリと楽しげに白坏と呼ばれた白い髪の女性はほくそ笑み、アリーナのピットの扉を開けた。

「さあこれがお前らの専用機」

そこにいたのは、混じり気のない”白”と、曇天のような”灰”だった。

「
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
” 白式” と 打鉄零式” だ」

chapter 2 - 1 (後書き)

…う、うあ、あああ。首輪付きの名前明かせなかった、ほんとにすいません…。

し、仕方ない、後書きで言っちゃうぞ！

首輪付き（以下白坏）「ダメ人間め」

う、うるせえやい！仕方ないじゃないか、セシリアとの戦闘フラグ建てなきゃいけなかったんだから！

白坏「ふん、それにしても体力的にはまだ余裕だろう？」

まあ、キリが良かったんだよ、あそこで切る方が。

白坏「仕方の無い奴だ、…自分の名前を自分で発表するのか…、複雑だが仕方あるまい」

どうぞ！

白坏「…白坏^{しらつき}アリサだ、嬉々としてどうぞって言うのはどうなんだ？お前」

…もっと睨んで…！

白坏「束と同類だったのか！貴様！」
フフン！（ドヤア

白坏「ドヤアじゃねえよ、ああ、何言ってもわからんだろうな、犬畜生にも劣るのだから」

ヒヤア我慢できん！もっと罵ってくれ…！

白坏「…まあ、アレだ、いつも通り、感想、レビュー、評価、お待ちしている、これからもよろしく」

chapter 2 - 2 (前編) (前書き)

まさかの前後編、ありえねー。

そして長い!!

chapter 2 - 2 (前編)

「言葉は不要か…」

いや必要でしょ、えーと、白坏さん…だっけ？が来て原作通りの白式と打鉄零式って言うのを持ってきてくれた。

原作じゃ白坏さんって人も打鉄零式も無いんだよね、やっぱり僕が最強か〜。

「……………白式と打鉄零式、だ」

「零式…、これが……僕の、専用機……」

その機体は一言で言えば世界を覆う曇天のような灰色だった、真紅のラインが機体に走っていて原作の打鉄よりも刺々しく感じる、その印象に反して機体の表面は全体的になめらかで、そう、西洋の甲冑を劣化したような鎧がそこに鎮座している。やっぱりコンセプトはガードを重点にしているのかな？

アンロックユニット
非固定浮遊部位は一見してラファールのシールドユニットのようだが、よく見れば裏側に銃口のようなものとミサイルポッドらしきものがくっついている。

「ああ、それはグレネードと多連装のミサイルだ、式式の開発も進めるに当たって試作してみた」

ほうほう、ということは、まさかマルチロックオンシステムが使えるということ？まあ装弾数はいかに多連装とはいえ式式には敵わないだろうけど、最大で48発ってなんだよ、消し炭にでもする気なの？

ってか、白式が軽そうなのに比べてこっち超重そうだなー、しかし、この胸部装甲アルゼブラの軽量コアに似てる気がするのって僕だけなのかな、まわり丸いから余計気になる。

あ、なるほど、どっかで見たことあると思ったらマイブリスに似てるんだ、まあ武装はかなり違うだろうけど。

「何をぼうつとしてるんだ？さっきから。まあいい、まずはISSスーツに着替えてきてくれ」

先ほどの恐ろしい雰囲気はどっかに霧散したのか、白坏さんは冷静に指示をする。クールキャラみたいだね、髪も白いしラウラと被ってる？

でもラウラってアルビノなんだよね、アルビノは目が赤くなるらしいけど深海みたいな深い青だし、…どうなってるん？とか考えながらISSスーツに着替える。ちなみにISSスーツは学園から配給されたもの、サイズぴったり、で一夏はどういう趣味なのか知らないけどへそだしスタイル、そんなに目立ちたいか、このイケメン（笑）え？僕の？もうほとんどダイビングスーツとかそんな感じだよ、地味？弁えているといってほしい、まあ学園から配給されたのだけど。

「準備できました」

「ああ、じゃあ早速乗ってくれ」

その言葉に鎮座しているISを見る。鎮座しているとはいえ仮にもIS、俺の身長よりはるかに座高も高い。

「えーと」

「よじ登れ」

「マジすか！」

思ったより無茶言う人だった！やっぱり千冬さんと似てるよ！この人！

まあ抵抗はできないから仕方ないのでよじ登ることにする、当然諦めきつてて苦笑しているよ、こういう人には逆らうたらいけない、僕の勘がそう告げてる。

ふと一夏の方を見ると何て言うんだろ、えーっとドックとかによく有る移動式の階段付きの台座？つばいので白式に座ろうとしている、えーと、身内臍履？ひどくね？

「いいからさっさと座れ、そうだ、椅子に身をもたれさせる感じでいい」

カシュ、と簡素な空気の抜ける音がして金属の鎧が僕の体にフィットしていく、それと同時にこの機体のあらゆる情報が頭の中に流れ込んできた。成る程、理解できる（・・・・）。うん、これはなかなか気持ちいい感覚だ。

「ふむ、なるほど」

「どうかしたんですか？」

「いやなに、こちらの話だ。よし、アーリーナの使用許可は出ている、機体が並行して初期化と最適化をするので白式と模擬戦でもしている」

うーむ、流石倉持の派遣員、キビキビしてるね。

どうやら一夏にもその旨が伝わったらしく、白式が先にピットを出て行く。

「さて、出るのでしょうか。行くよ、零式」

僕の言葉に呼応するように零式が脈動した、気がする。

鈍重な見た目とは裏腹に零式は上昇、ある程度アリーナを中心に رفتたところでスラスターを停止させてPICで停止させる。

先にピットを出ていた一夏は振り返り、少々驚いたように僕等を刮目する。

「しかし、初戦がまさか一夏だとは思わなかったよ、… 負ける気はしないけどね」

「だよなあ…、まさか初日からIS操縦できるとは思わなかった、にしても、負ける気はしない、か言ってくれるじゃねーか、零」

「ふふん、まあ見せてあげるよ、格の違いって奴をね！」

僕は登録されていた初期装備、翼の形状をしたアサルトライフル「ホルス」を両手に展開し一夏をロックオン、簡単に近づけなくさせるように連射する。

一夏は元々の反射神経がいいのかすぐさま弾道から外すようにスラスターを噴射させた。しかし端から見れば無様としか言いようのない体勢のおかげで自動姿勢制御装置が発動、隙が生じる。

「うお！？いきなりかよ！」

「ここは戦場だよ！一夏！負けたくなければ武装を展開するんだ！」

それを見逃すわけもなく「ホルス」の弾幕は一夏を追い立て、シールド・エネルギーを徐々に削り始める。

近接武装しか無いのに気づいたのか、焦った表情を浮かべる一夏。
しかし、覚悟を決めたのか――恐らくは見よう見真似で――照準を左右に振らせながら突っ込んでくる。

「どおうおりやああ！」

「くっ……！でも、甘いね！」

「ホルス」の銃身のついている翼のような物理ブレードで一夏の剣戟を受け止める。

どうも防御用のブレードらしく、攻撃に向いた形状ではない。……刺突用なのかな？なら相応の使い方をするまでだ。

僕はブレードを一夏に向けて掌打の要領で突き出す。

「うお！？」

「火力を集中させる！」

白式は衝撃で大きく体勢を崩し、僕はスラスターを前方に噴かし後退、非固定浮遊部位のグレネードを展開させて片方ずつ連射する。

「当たってたまるかよー！！」

「くっ、躲された！？あの体勢から！？」

「正面から行かせてもらうぜ！それしか能が無い！」

一夏はブレードを振りかざし突っ込んでくる、これは……、間に合わないか……！なら！

「ミサイル展開！」

非固定浮遊部位のシールドが開きミサイルポッドからミサイルが大量に連射される。

「躲す！」

一夏はそう吐き捨て原作もかくやという速度でミサイルと交錯して行く、…ほんとにISに乗って数分の技量が疑わしい、しかし。

「それは囿さ、ぬかったね、一夏」

「……！な！？」

ミサイルの弾幕を抜けた先には、完全に一夏をロックし、グレネードキャノンの銃口を向けた僕の姿。

言ったように、ミサイルの弾幕はグレネードの再装填の時間を作るために発射したもの、本命は絶大な威力をもつグレネード、しかも今、一夏はどんなに急速にスラスタを噴かそうと音速の弾丸から逃れられる術は無い状況にある。

「貰った……！」

「凄いですね……、二人とも……、ISに乗って数分とは思えない動きをしています」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた山田真耶が感心したように呟く。

確かに、二人の戦闘は初心者戦いではあり得ない程の戦いだっ

しかし、隣で戦闘を見ていた千冬はいぶかしげな顔をしていた。

「……白坏、たしか倉持には零式という機体は無かったはずだが？」
「ああ、アレは私が作った機体だ、倉持のデータに無いのも無理は無い。研究用のほつたらかしにさせられていたコアを拝借して零式にする為に追加の兵装を開発したり、第三世代型に引き上げるためにシステム面とかも強化させたものだ」

「え？白坏さんって確か倉持のテストパイロットでしたよね？機体の開発も担当したんですか？」

そう、白坏は倉持のテストパイロット、しかし、出自が尋常でないほどに特殊だった。

「東もとんでもない奴を子飼いにしていたものだ、今各国が必死になって開発している第三世代型をたったの一週間で作り上げたのだから」

「え？」

真耶はその言葉に硬直していた、恐らくは、前者にも、後者にも。しかし白坏はそんなことはどうでもいいと言わんばかりに片眉を少しだけ持ち上げ、千冬にこう言った。

「東と親しいのか？ならあいつに言ってくれないか、変態ぶりを押さえろと」

「ふむ、その様子だとうやら相当に好かれたらしいな。まあ、あいつは誰に言われても自分が信じた事は疑われない性質だ、諦めるんだな」

「この世で一番面倒くさい性質の奴だったか、はあ……、まったく、頭が痛くなる」

千冬はどうにもこの白坏という女性に親近感を覚えていた、束と一緒に居るとどうにも気苦労が絶えないのだ。だからその立場に居たらしい白坏はなぜか他人の様には思えなかった。

話し方が似ているというのもあるのだろうが、やはり、束からの迷惑事を突き付けられているという共通点が大きなポイントだろう。

（しかし、目つきはいくつもの修羅場をくぐりぬけて来た雰囲気があるな、ある程度気を配らねばならない、か？）

「あ、ああ！勝負が決まりそうですよ！」

真耶の言葉にモニターを見ると、ミサイルをかわしきって零式に接近した一夏と、その一夏にグレネードの銃口を突き付けた零の姿があった。

そのままグレネードを発射した零は爆風から逃れるように後退しすべての武装を格納、「ホルス」と言うアサルトライフルを手の内から消失させた。

しかし、千冬の目には白式がファースト・シフト一次移行をしたのが見えていた。

「ふ、機体に救われたな、馬鹿者め」

「…ふむ、このタイミングで…か」

「え？」

状況が読めない真耶の声がピットに響いた。

……？なぜエネルギー反応が？白式は落としたはず。

ハイパーセンサーで爆煙の中を探り、白式を探る、その瞬間、僕の背筋には冷たいものが走った。

いや、忘れてる事多すぎだね、まさかこんな重要な事忘れるなんて、ていうかこのタイミングだったか。

そっぴいや原作でもセシリアのミサイルビットが直撃したとき移行したんだっけな。

やがて煙が晴れて僕の目の前により洗練された装甲をもつ白い機体が現れる。

「行くぜ、零、これが本当の白式だ」

一夏は雪片式型を僕に向けて言い放った。ううん、決まってる。他の奴がやればただのカッコつけにしか見えないんだろうけど…、様になるってすごく怖いね。

「貰った！」

「！し、しまった！？」

一夏の機体、白式は雪片式型からエネルギー状の刃を出し、強化されたらしいスラスターで一気に僕の懷に飛び込んでくる。

反応しきれなかった、といえばそこまでだ、僕のシールド・エネルギー

ギーは雪片式型の零落白夜であつさりと切り裂かれる、筈だった（・・・）。

「シンオファビリティー クロノス・レジスト
単一仕様父神の楯発動」

「フォーマット ファइटティング
初期化と最適化を完了しました、確認してください。」

「…ふふ、あははっ」

…思わず笑いがこみ上げるほど都合なタイミングだ。まあいいや、これで目の前の敵（一夏）を倒す事が出来る。
条件はほぼ対等、この単一仕様父神の楯っていうのが少し気になるけど、今は絶対負けたくない、なんとなくだけ。

「僕ら（・・・）は強いよ、一夏」

「…上等！仕切り直した、零！行くぞ、白式！！」

武装のリストを急いで確認し、マシンガン、「タイタン」を展開してやはり鈍重な機体では想像もできないほどのスピードで一夏に追い縋る。

高機動型の機体らしく、白式は僕の零式のスピードをはるかに上回るスピードでアリーナを飛び回る。

しかし、それだけでこの機体のロックオンを振りきれはらずもなく、徐々に徐々にシールド・エネルギーを減らしていく。

分が悪いと判断したのか、一夏はあり得ない速度で零式に肉薄してくる。それに呼応するように零式の脚部スラスタの出力が最大にまで引き上げられた。

「この手に賭ける！うおおおおッ！！」

「受けて立つよ、一夏。来てくれ、アダマス！」

鎌状の近接ブレードを呼び出し（コール）、最大出力で”白”と”灰”が交錯する。

——バリアー貫通、ダメージ700。シールド・エネルギー残量0、実態ダメージレベル、低

「……………へ？」

…そうか、零落白夜か、シールド・エネルギー満タンだったのに全部持ってたよ、マジ化け物だね。

——試合終了、勝者、織斑一夏。

無機質なシステム音声が一リーナに響き渡る、その場に居た人の内、僕と千冬さん、それに何故か知らないけど白坏さんだけが普段通りの顔を維持していた。

「ふん、まあ勝負にはなっていたな、良くやった」

「はは、ありがとうございます」

「え？なんで俺勝つたの？」

「零落白夜、か、まさかここまでとはな」

「し、白坏さん！あれって何があつたんですか！？」

模擬戦が終わり、ピット内では五者五様の反応を示していた。

白坏さん、冷静に分析してるよ、まあ作つたところの責任者だしね、当然と言えば当然か。

それにしても零落白夜のことなんで知ってるんだろう。と、あとで聞いてみたところ――。

「この学園に来るに当たつてある程度過去は調べさせてもらった、特に織斑千冬の元専用機、暮桜が気になつたので束に情報提供を要請して、その特性は零落白夜という事はすでに知っている。同じ名前だつたからもしかして、と思つたが、案の定というわけだ」

なんでもアリーナ内の白式や零式の、というより機体のデータは逐次モニタにアップロードされる、無論、ワンオフアビリティ単一仕様も例にもれず、というわけらしい。

僕と一夏、山田先生は感心したように頷いていた。

取り敢えず後半に続く。

chapter 2 - 2 (前編) (後書き)

切る場所ミスった！もともと二話で丸く収めるつもりだったけど…。
まいっか。

そして途中でテンションがおかしくなったのでおかしい部分もある
かと思いますが、楽しんでくれたら嬉しいです^^；

アーメンアーメンゴスペルアーメン！

ラーメンとかソーメンとかじゃないんだからね！（オエッ

なんか、すいません…。てゅーか疲れてテンションがおかしい…。

感想、指摘、レビューいつも通りお待ちしております。

chapter 2 - 2 (後編) (前書き)

サブタイではっちゃんけたくなってきた、ダメだ、死のう。

chapter 2 - 2 (後編)

IS学園に僕等が入学してから一週間、現在、アリーナで戦闘中なのだが、この僕、もとい桐原零は戦闘中にも関わらずあることを考えていた。

え？時間が進みすぎ？うん僕もそう思う。

ちなみに僕が一人部屋だったり一夏が同室だったらしい筈とラツキー スケベしたり(ちなみにこの時顔真っ赤な筈に泣きつかれた、人畜無害っぽさってこんなときに役立つんだね、フヒヒ)、セシリアに改めてケンカを売られたり、教室が僕等と山田先生のせいで微妙な空気になったり、一夏がアリーナの使用申請忘れてて全然練習できてなかったりするが。

(作) <全！割愛！

とのことだ、気分が向いたら書くらしい。

いや、まあ、プランはあるらしいのだが、原作って今(ダアアー！ヤメロオオオー！！)…まあ急いだ結果だそうだ、焦りすぎですよ、バカじゃないの？

とりあえずは今現在の思考を言葉に出して言ってみよう！

セシリア僕に惚れるなんて事ないよね！？……うん、実に下らない。

いや、別に惚れられてもいいんだけど当事者ほど面白みの無いものも無いんだよね。

で、その結果普段どおりに振る舞っていることにしたんだけど、うん、僕は元々一夏ほど唐変木でも無いから分かるんだ。徐々にセシリア√フラグが”僕”に建ってきている、実に由々しき事態だ。

なんとか一夏に押し付ける術を模索しなくては……！

あ

147

全力出すふりをして負ければいいんじゃないか！アハハハハハ！

僕負ける

セシリア「期待したわたくしが馬鹿でしたか……」

一夏勝つ

セシリア「一夏さんならあるいは……！」

名案キタ！これでかつる！

……うん作戦に穴は無い、筈だ。

一応この前の喧嘩も中途半端に終わったし、一夏は僕とは別の強さがある、女は強い男に惚れるものだよね！

と言うわけで戦闘に戻るとしよう。

現在の状況、僕、S・E残量363、実態ダメージ小破。セシリア、S・E残量402、実態ダメージ中破。

……どっちかって言えば僕が優勢、かな？S・Eでは負けてるけど、セシリアのブルーティアーズは二基が損壊、他には実質使い物にならないのが一基、他は健在だ。

やっぱりあの時吹っ切れたのが原因なのかブルーティアーズを動か

しながら正確な射撃をしてくる。
実にマズい事をしたのかもしれない。

まあ一夏は戦闘すれば慣れてくるから多分勝てるレベルではあるんだろうけど、…ああ、不安になってきた。

「やはりやりますわね、零さん」

「いやいや、セシリアこそ。公開された資料ではブルーティアーズとの連携射撃が出来るなんて載ってなかったんだけど？」

「貴方が目を覚ませてくれたおかげですわよ？ですから――――」

あーうん目で言ってることが何となく分かる、絶対倒してやるって目だよ。

「行くよ零式、フルスロットルだ、今までの御礼をしてやるうじゃないか」

実は本心から、だったが、…いや、もういいや、全力でぶつかってやる。

「さあ！終曲の幕開けですわー！踊りなさい！セシリア・オルコツトと、フィナーレ
ブルーティアーズ青い雫の奏でる旋律でー！」

「いいさ、全力でくるといい、零式と僕が！最高の舞台として終わらせるよー！」

僕は高々とそう宣言して「天蓋」を今日初めて展開させ、内蔵されたミサイルを撃ち尽くし、右手に「ホルス」左手に「アダマス」を展開し、チャージ最大出力で突進する。

セシリアは両手にパルスガンを展開し、ついでといわんばかりに最

後の半自律型の「ブルーティアーズ」を特攻させる。

すれ違いざまに「アダマス」で「ブルーティアーズ」を一閃、セシリアもパルスガンでミサイルをすべて撃ち落としたらしく、僕を口ツクオンしたことをシステム音声が簡潔に伝える。

そこからは恐らく見ている側には殆ど分からなかった事だろう、シユーターフロアや三次元機動を基本とした持ちうる限りの全ての技術を駆使して互いの必殺武器を牽制、セシリアがわざと許した隙を掴み、僕が「アダマス」で斬りかかり、セシリアが「弾道型」の「ブルーティアーズ」を発動、あらかじめ察知していた僕は、それを切り捨て返す刀でセシリアのブルーティアーズを切り裂こうとしたところ、「スターライトmk-III」で撃ち抜かれ絶対防御が発生、僕のS・Eが消失した。

――試合終了、勝者、セシリア・オルコット

無機質な音声がただそれだけ告げて、激戦の余韻を裏付けた。

「は、はあ……、負けた。もうっ……、もう少しで勝てたのになあ……」
「はあ……はあ……、ずいぶん、オーバーに能力を使った気がしますわ……、とても疲れました……」

ちなみに何故あんなに動けたかというと、僕の特訓になぜか山田先生が付き合ってくれたから。あと僕自身のIS適正も左右したのだろう。まあ結局負けたけど。

……悔しい！！まあいいや！どのみちそのつもりだったんだし？別に悔しくなんて無いんだからな！！（泣）

僕が涙目になりながらピットに戻るとなぜか同じように涙目になっていた山田先生を確認、すぐさま僕はISを解除して互いに抱きつ

く、え？邪な気持ちなんてあるわけないでしょ？何よりも悔しい！
そりゃぁ胸板のあたりにふよふよとやわらかいものが当たる感覚は
あるけどね！

「桐原くんは頑張りました！先生の腕の中で存分に泣いてください
！」

「うつつ…、有難うございます、先生！」

ところで、なんかいい感じで終わろうとしているが、一夏にフラグ
を押し付けようとしたのは間違いなく零である。
報復をしてくれるのはやはりこの方。

バシン！

「茶番は済んだか？暑苦しかったぞ。山田先生も場の空気に流され
すぎないでください」

「「酷いつ（で）す！」「」」

正論過ぎてこれしか言えないんだけどね、仕方ないね。
そして何故僕にだけ落雷が直撃した。

「いやー凄すぎて参考にならない闘いだった」

「そうだな、ところで零、いつの間にあんな技術を手に入れた？」

「一夏達、淡泊過ぎるでしょう！いたわりの言葉はないの！？」

原作で筈と千冬さんの事優しさ欠乏症とかなんとかほざいてたけど、
君も十分優しさ欠乏症だよ、一夏。

いいもんね、教えないから。寂しくなんか無いやい！

「ふん…、一夏、勝ちなよ、絶対に」

「お、おう」

言ったなこのやろ、フラグ引き受けてよ？このイケメン。

- - - - - ?

「あ？何？このデータを見てほしい？」

「なんだ、無人機のシステム構成じゃねーか」

「はあ？強化？これを？まあ確かに出来るけどさ」

「…おい、それはちょっとした脅迫だろ、分かった、分かったよ、仕事はしてやる、で？報酬は？」

「前払いねえ…、嫌な予感しかないぞ」

「……何だと…、おい、確かなんだろうな、その情報」

「ucci、分かったよ、やりやいいんだろ、やりやあ」

「クソが…、何だってんだよ。あつちでもこつちでもやる事の量が変わらないなんて」

「やっぱり、これが”罰”なのか？それとも、為すべき事がまだあるっていうのか？」

一人の弦きは、徐々に闇の中へ消えていった。

やった……、一夏が、勝った。

ふ、ふふ、あの（・・）決め台詞も言ってくれたし、フラグ回避成功というわけだ……！
フーハハハアー！！

side一夏、しようと思ったけど次っていうか番外編でまとめてやろうと思う。

「おめでとさん、一夏」

「おう、ありがとな。まあ零がかなり疲れさせてたから勝てたんだけど……」

「ん？どした？」

「いや、何でもないぞ」

なんだろう、一夏でもぼそぼそ喋ることがあるんだね、珍しい。

しかし、ここでなんとかセシリア戦は終了か……、次は……鈴だな。どんな展開になるんだろう。

後日……

「となるとやっぱり俺がクラス代表になるわけか、で、どうしたん

「だ零？」

「聞くな、一夏」

「零さんはわたくしに負けましたから、まあ、本気で戦ってくださいだったので敬意を払い、一週間執事になっていただくことにしましたの」

「別に執事に仕立てあげるのは構わんが、服は制服にしろ、馬鹿者」
「バシン！」

「なんで…僕だけ……？」

chapter 2 - 2 (後編) (後書き)

白坏「何故私の出番がないんだ、そして手を抜きすぎじゃないか？」
ほぼ、テンションで、書いてた…出番は…待つテ……

白坏「そう言えば今日は行事があったらしいな、それでか」

マダ…アルヨ……

白坏「…所詮粗製という者の運命か……あるいは、その程度が限界だったか」

ファ、ファァーティ…マ……、一話チュウ…二、二…セント…カ…
…ブツチャ…ケ…モウ…ムリ……

白坏「…仕方の無いやつだ。いつも通り、感想、指摘、レビュー、評価、お待ちしている。これからも宜しく」

、 3 乙「フラジール、今日の飯は？」穴「はい、納豆&卵かけペペロンチーノ

中々出来ん…だが！負けられん…！バルバロイツ！

、3 乙「フラジール、今日の飯は？」穴「はい、納豆&卵かけペペロンチーノ

久しぶり、と言っておこう、干されぎみの首輪付きこと白坏アリサだ。

チャプター2に入るまでほぼ私の出番だったからな、少々欲求不満だったところだ。

まあそんなメタな内輪ネタは別として、話を進めるとしよう。

「楽しみだねっ！しゅーちゃん！」

「どうしてお前もついてくることになっているんだ、ようやく解放されたと思ったのに」

そう、私が依頼を受け、出向することと相成った倉持技研に、束も何故か憑いてくることになっていた。誤字？いやいいんだよ、この場合は。

束のお気に入りであるという少年、織斑一夏の専用機、白式は7割がた完成された状態でこの移動型ラボトリ 我輩は猫である の無限とも思えるスペースの、私たちに見えるところにぼつんとおいてある、まあ憑いてくる理由にはなっちゃいるけど、迷惑極まりないな。

ちなみに別件となるが、束がIS委員会やら日本政府とOHANA SIしたらしく、私の機体に使われている未登録のISコアは新たに作ったコアとして登録。この時IS委員会がこのコアの引き渡し

を要求してきたが、全てのハッキング済みのミサイルを発射すると同時にISコアの機能停止を行うと束が脅迫したため、そのままスルー。

無論私は要注意人物として倉持のテストパイロットとして就職する、という形で監視されることになった。：まあ今の予定じゃ別段行動起こすこともないし、勝手にしろって感じなんだけどね。

暇になったのでこの移動型ラボに備え付けられたレーダーを一瞥すると、精巧な3Dで表された地形がゆっくりと回っていた、：別にもう驚きはしない、他にも色々凄いの作ってたらしいし、まずこの移動型ラボ自体がありえない技術の結晶だからな。ふと、レーダーを見てあることに気づく、赤くマーク付けされたポイントに、結構な速さで空から近づく光点が――ガクリ、と乗り物ごと体が傾く感覚が襲ってくる。

「な、なんだコレは!？」

「しゅーちゃん、急降下するから口は閉じておいてね」イヤアッホオオオオオウ」

「きゅ、急降下だつて!?!?そんなの聞いてない!!!」

「中止は認められないのだっ」さあケイムヒアア!」

束がバカっぽく両手を広げて満面の笑みで私を抱きしめようとしてくる。それにしてもなんでこんなにテンション高いんだ、ウザい!あ、バランス崩して機材の山に突っ込んでった、うわ、大丈夫かアレ?

ズドオンっと外から轟音が轟き、揺れが止まる。

「……た、助けに駆けつけてくれるって…か、甲斐性があっても…」

「…いや殺しても死ななそうだしなあ……」

この前全力でアイアンクロー仕掛けたらあつさりと抜け出しやがったし、機材に埋もれて頭になんか屑鉄ぶっ刺さっててもわりかし平気な顔してたしな…こうして振り返ってみると人外だな、一応強化手術受けるからアイアンクローから抜け出せるわけないと思ってたんだが。

「ま！いいや！さあれつつらごー！」

「…なんていうか、心配する方がアホらしいな、このウサミミ生命力G並だし」

「んー？なんか言った？」

「いいや、別に何も」

相変わらず構造がわけが分からない移動型ラボからするつと出て行き、目の前の建物を見上げる…程もなかった。

倉持の建物は地下に重点を置いているらしく、地上にあるのは第一アリーナと受付、格納庫程度しか無いらしい。つまり少々背の高い小屋程度の高さしか確保していないということだ、なんていうか外から見ると地味極まりない。

まあ企業らしく敷地は広いのだが、それら全てが貯水タンクやら太陽光パネルやらで埋まっているという有様。

なんか全てが台無しの上、倉持につけられたあだ名は「蟻の巣の住人」とか「鎧土竜」とかetc, etc……

…鎧土竜で…、巨大Gやん。やはりアレか、裏を返すと気持ち悪いのか、流石技術屋集団、トー。スやらア。アビットやらの上を行く変態なわけだな。PQ? ああ、いい奴だったよ。

と言うわけなので主な移動方法はエレベーターとなっている、…すこし無理やり過ぎたか? まあいい。

束が先導するように歩いて社長室と書かれた部屋に辿り着いた、本当に蟻の巣みたいっていうか…迷宮だよな、ここ。

「これからよろしくねー! よーくん!」

「おお、束ちゃんか、久しぶり、待ってたよ。…ん? 君が束推薦のテストパイロット? 僕の名前は倉持陽一」

よーくんと呼ばれたずいぶん軽薄な印象の青年は、スキンシップは当然といった調子で見送る。どうも見た感じでは束と同じ年らしいが、まとう雰囲気は束とはまったく逆で落ち着いている。やっぱりアレだな、どこか社長らしい貫禄って言うのがあるんだな、見た目完全に遊び人だけど。

っていうか先に雇い主に挨拶させるって、ぼうつとし過ぎか? いやまあ、IS委員会に出向した時の束の雰囲気っていうか機嫌が凄いことになってたからな、テンションの差が酷すぎて呆気にとられたあの時の束の顔は遠目から見た感じ、まわりのモノは全部宇宙外生命みたいな顔だったからな、話かけられてもつつけんどんに返していたし。…いかん脱線した、以上0.1秒の思考の世界ということにしておいてくれ。

「白坏アリサだ、ここにいるウサミミの推薦でこちらの世話になる」

「写真でみるよりずっと魅力的だね、宜しく頼むよ(いろんな意味

で)グホアア!？」

束がなにかを察知したらしく、挨拶を終えた彼のどてっ腹に黄金の右ストリートを直撃させ、ドヤ顔をしながら仁王立ちをしている。…ウザいな、あのウサミミ引き千切りたいな…。

あとなぜか秘書さんが倒れた彼をガツガツとヒールで蹴っている、痛そうだけど助けたら飛び火しそうだからほっとこう。

「ふふふ、しゅーちゃんは束さんのものなんだよ、束さんだけのものなんだよ」

「ヤンデレっつーかスティングーじゃない? どうしてそんなチョイスにしたのさ」

ボコボコ蹴られている格好のまま彼がそう言うのと、ガツと束が勢いよく私に抱きつき、私の胸を鷲掴み一言。

「俺はこいつと一体となった!」

「……」

ズドンッ

「それですね、ペイの相談なんですが…」

「あ、ああ、うん、ちゃんと払うよ、…ああ、機体についてのデータを提供してくれば多分弾むけど? ははは」

「そこまで逼迫してるわけでは無いので提供はしませんよ? ふふっ」

実に黒い、何がとは言わないが。そして束？誰だい？腐りきったウサミミならここにあるがね。

まあ、取りあえず、社交辞令もここまでにしよう、今まで黙っていた秘書が私たちを睨んでいる、仕事でも溜まっているのだろう。

「それで、提供してくれるというラボはどこにあるんです？」

「うん、出来れば僕が直接案内をしたいところなんだけど…」

と彼は困った表情でデスクと秘書さんの顔の間を行ったり来たりさせる、当然大量に積まれた書類が消えるはずもなく、さらに般若の顔をした秘書さんがにつこりと笑うわけでもないので、虚しくキョロキョロしているだけにしか見えないが。

彼はしばらく秘書さんと無言の会話を続けると、キーを目の前におきすくすくことデスクに撤退していった。

「申し訳ありません、社長はご覧とおり多忙でして…、私も離れるわけにもいきませんし。ここの案内図を渡すのでそれを頼りに向かってください」

なんだか秘書って言うより迷惑かけられる幼なじみ的な立場の不幸な女性っていう表現がしっくりくるな、秘書さん。

「…ここか、はあ、本当に蟻の巣のようだったな」

亡国機業の時のあの廊下に見た感じ似ているのだが、いかんせん狭くて岐路が多くてまさに蟻の巣って感じだった。

ちなみに束は途中で寝てる振りをしてベタベタ色々なところに触って来たので、気絶させてスカートごと足を持ってズルズル引きずってきている、ピンク色の髪が雑巾状態でやたら汚れてるがんなこと知るか。

ちなみに、経歴を確認してみたんだけど、24なんだぜ？こいつ。

「ん…？」

「起きたか、束」

「寝起きにヘソチラ…ハアハア……」

「……」

グシャ

「オゴフ！？」

またか、とは思うが、折れたら負けだと思ってる。なし崩しでどこまでも行きそうだからなこいつの場合。

っていうか、また気絶したよ、なんで幸せそうな顔なんだ。

「……ん、なんだ、これ」

部屋に入ると、そこには金色に輝く特殊なレアメタルで作られた金属の塊がある。

ISコア、だ、どこからどう見ても。

なぜこんなところにあるのだろう、研究用としても明け渡すはずの部屋に置いて行くわけがない。

「……」

私は半ば惹きつけられるようにISコアに手を伸ばしていた。

「———そうか、お前は…分かった」

その後、私は気付かぬ間にこの機体を組み上げていた、頭にあるISの基本データをもとにして。何が私を支配していたのかは分からない、ただひたすら、組まなければいけないような感覚に襲われていた。

目がかすむほどの時間を機体を組むことに費やして、出来上がった機体は、すべてを覆う雲のように暗い灰色だった。

誰に渡したもんかねえ……。私は論外だ、もう一つあるからな。

「おおー、凄いいもんだね、流石だよ、しゅーちゃん」

「束か、…私は寝る、解析でもなんでもするといい」

「随分自信があるのかな？」

「…さあな、だが、私が持ちうる技術の限りを費やしてこいつの要望に応えたつもりだ」

「そう、…ところで、もうここにこもって一週間になるんだけど？」

「そ…か…、…………ふぁ…………んん…………、…白式は？」

あくびをしながら凝り固まった体を伸ばしていく。うわ、すげえボキボキいつてるよ、何これ。

「組み上がったよ」

そう言いながら束はいつもどおりにするつと私の体にくつついてくる、抱きついてくるって感じではない、こつ、ぴとつと、えーつとみた事ないけどコアラみたいな？後ろから。

「くつつくな…、じゃあ私も眠ってからIS学園に向かうでしょう、お前はどうする？」

「ここに居すぎるとしゅーちゃんにも迷惑が掛りそうだからそろそろ上に戻るよ」

「そうか」

おい、揉みほぐしてんじゃねえ、毎度のことだから慣れたけどな、今は力が出ねえしよ。

「んふふ、意外と抵抗しないんだね？」

「…反応する気すら起きんよ、何をしていようが」

「ふははは、ナニをしているのだよ!」

「……たまにお前本当に女かと思う事があるんだが、気のせいではないんだろうな」

「酷いや!しゅーちゃん!」

憤慨したように今度は私の体に乗っかってくる、振りほどく気すら起きないのでそのままラボに申し訳程度についているベッドに向かう。

「そう言えばさ、あれを渡したい人っている?」

「なんだ?急に?」

「ちょうどいい人が居るんだよ、データはここの端末に置いて行くから見ておいてね」

興味本位に端末に映るデータを眺めていく。

「ふん…二人目の男とは……、因果なものだな」

「ふふっ、そうだよねえ」

「別段構わんさ、合わなければあいつが拒否するだろうしな」

「…分かるの?」

「何を言う……—……ふぁ……む……限界か……」

意識がどんどん薄れて、瞼が自然に落ちた。

「ふん、どうやら、随分気にいったと見える、適性Sとはね」

そこには表向き打鉄の新型として作られた『0』と、その操縦者のパーソナルデータなどさまざまなデータが私の目の前に展開されていた。

「それにしても、随分と早い段階での発動だったな、もう少し遅いのが定石かと思ったが」

桐原零……か、見たところ技術も初めてにしては随分と高いみたいだし、……ISに対しての適性が高いのかね？

どちらにせよ、これで社長に目をつけられてしまったようで打鉄式式の開発に巻き込まれたからな……それに作った以上追加武装の開発も行わなければいけないだろう。あえて言おう、いいか、私は面倒が嫌いなんだ。

そう言えば束はいつの間にか倉持の施設から居なくなっていた、……無駄に手際が良かったので誰も気づかなかったそうだ。

、3 乙「フラジール、今日の飯は？」穴「はい、納豆&卵かけペペロンチーノ

前半はギャグパート、後半はシリアスパートにしようと思ったんですが…。

シリアス、薄くありませんでしたか？（えいぷー風に）

ぶつちやけ書きたい事は一杯あったんですけど、余計な事が浮かんできて集中できませんでした、具体的に言つと3巻辺りのエロチックな……何をやってるんだろう、俺。

そしてネタとしてステインガーさんの台詞投入、上手く出来たかは分かりませんし、東さんがセクハラ親父となり果てている件についてはスルー…あれ？スルーしたら何も残らないんじゃないかね？

そして見た感じキレが非常に悪い気がするんだム、必死こいてテンション回復しないとな…

4、生徒会長キャラって不敵キャラが定着してる気がする（前書き）

前話からお気づきの方もいると思うけど、すこし仕様を変えてみました。

これではっちゃけられるよ！やったね撃沈王子！おいばかやめろ

4、生徒会長キャラって不敵キャラが定着してる気がする

あの代表者決定戦から約一週間、今日で執事の仕事からも解放されて晴れて普通の制服になったよ。

ウキウキしながら登校して、実習の授業にてセシリアのフラグもすっかりと一夏に建てられているのを確認、ついでに言うとその後一夏は原作どおりに墜落していたね。ざまあ

そして現在、僕以外には誰も居ない部屋で端末を展開してネットサーフィンを楽しんでいたところ、携帯から着信音が鳴り出す、ちなみに無難なJPOPだよ？アニソンにしようと思っただけはIS一色な事になった今の時代、正直に言ってしまうばまともなものが何一つない、世知辛い世の中だね。
んで、しばらくアレな内容だったのでかくかくしかじかと言う感じで流すことにするよ。

「はあ、それで、手伝え、と？」

とんでもない依頼を僕に回してきたのは零式や白式の責任者、テストパイロットも努めているという白坏さんだった。

『ああ、そうだ。聞けばお前昔からパソコンのプログラミングが得意技って言うじゃないか』

いやまあ確かに得意ですよ。前世でプログラミングの仕事してたんだから。でもね？

「いやFCSの調整に機体の制御プログラム、おまけに零式にあるプロトマルチロックオンシステムの完成って一介の高校生が出来る仕事量じゃないですよ、それどころかISのプログラムなんて零式いじったときに少し見たくらいですし」

ぶつちやけていうと、無理だね。とまあそれは置いて、大体の人はここで誰を手伝えって言ってるのか分かったことだろうね。そう、打鉄式、更識簀の専用機だ。本来ならもうこの時期に渡されている筈、だったんだけど、マルチロックオンシステムの重大な欠陥が発見されて難航、+白式のデータが置き去りにされていてその解析に人員が回されているんだとか。

ちなみに零式は普通の第三世代型の域を出ないので、はあーこんなもんか、と言われてスルーされたいらしい。PICとかスラスターの大出力については、なんでもスポーツ用のISの出力は制限されているらしく、それを少しだけ解放して軍事用寄りにしたただとか。ちなみにこれの関係でスポーツ用のISはエネルギーの回復が速い、対して軍事用は常にフルパワーなのでタフな代わりに回復が遅いらしい。

この前の授業でやってた内容だけど、原作で女子五人が福音とかに割とあっさり制圧されてたのはそう言うことなんだね。

『なに、基礎を齧ってたのならそう難しいことではない、設計図どおりに組み立てればいいのだから、簡単だろう？』

「……設計図があるんですか？」

『ある、と言うよりも先ほど完成した、有志二名での作業は難航したぞ』

「うわぁ……」

僕は思わず若干引いたような声音で反応していた、いや、プログラミングする上で最も重要なことが二人で完成させたといったその事で、これに関しては誰にでも分かるように設計しなくてはいけない、故にとつても難解でプレッシャーのかかる作業なんだよね。

「体力、大丈夫ですか？」

『正直言えば限界だ、だからさっさとお前に押し付けて眠りたいんだ、私は』

「…分かりました、手伝います。あと、ご苦労さまです」

『ああ、やつと眠れる…』

白坏さんが超眠そうな声でそう呟くとすぐに電話は切れた、…うん、まあ取りあえずは整備室あたりに向かうとしましうかね、どちらにせよ簪さんの行動パターンは整備室か教室しか僕には分からないし。

IS学園の制服は着たままなのでそのまま整備室に向かえるね、楽でいいね、ただの惰性だけど。

「やあやあれいいい、ご機嫌はどうだい？」

とてととダボダボの服…というより見た目完全な着ぐるみをきたばわわした雰囲気的女子が近寄ってくる、いつも思っけど速度が遅い、あれで実習の授業普通に間に合ってるんだから凄いいよね。

「ん？のほほんさん？今から整備室に行こうとしてたんだけど、何か用？」

「んつとねー、おねえちゃんたちがねー、れいれいに用があるんだってさー」

「お姉ちゃん”たち”？」

なんだろう、嫌な予感しかしないよ？特に”たち”あたりで背筋に冷たいものが走ったんだけど、やっぱりあれか。

「ほらほられつつご〜」

「あ、ちよつ、まつ……あー………」

整備室が遠のいていく…、なんていうかのほんさんには逆らえないんだよね、やっぱりアレかな？このぼわぼわした空気がそうさせるのかな？ていうか振りほどいたらなんか…ねえ？
白坏さんと簪さん、マジすいません。

そして連れてこられたのは生徒会室、……理由なんか見え透いてるけどどうしてこうなった？

目の前に立つスタイルの良い女子が無言で扇子を取り出しぱんつと良い音を立てて開いた、そこにかかっているのは『計画通り』の四文字、…謀ったね。

にかつと笑わないでほしい、別にどうとも思わないし。それに貴方僕を嵌めた張本人のように、これ以上どんな顔すればいいって言うのかな、まったく。

「ま、気楽にして？」

どこかコケティッシュな雰囲気をもつこの女子はこの学園の生徒会長、更識楯無、いわゆる学園最強の称号をもつ女子だ、ちなみに手伝いに行こうとしてた簪さんのお姉さん。

気楽にしてって言われてもね…、微妙な顔するしか無いじゃない？

「まあ、ここに呼んだからにはそれなりの用があるんですよね？頼まれ事しているので早めに終わらせてくれるとうれしいんですけども」

「んふふ、まあまあ、話はこれからするから、今はティータイムを楽しみましょう？」

放課後ティータイム…、なんかシユールだなあ、こっちは。

っていうか空気があかん、ここは寮の廊下とかよりもいろんな意味で空気が甘い、何の香水使ってるんだろ…あ、紅茶か…。

「ふう…、それで、先輩はなんで僕をここに呼んだんです？」

「あら、見え透いたことを聞くのね？」

やっぱりかああああ…、うん、まあどうせそんなことだろうと思っただよ？

「生徒会に引き込むためですか」

「ご名答」

ぱんつと扇子を開く楯無先輩、扇子はいつの間に変えたのか達筆で『見事』と書かれていた。

「…一夏の方が役に立つと思いますが？」

「あら、クラス代表決定戦後の一週間、一夏くんに勉強を教えたのは誰かしら？」

「勉強だけです、デスクワークなんて出来やしません」

「つていうかまずなんで知ってるのか、…ああ、生徒会長権限か、この人ならしそうで怖い、後で部屋チェックしとかないと。」

「取り敢えずは何とか諦めてもらおうと頑張ってみる、この生徒会はいろんな意味で危ない、主に生徒会長が。」

「ふうん…？毎回アリーナへの申請書をきちつと短時間で書いてきているのに、デスクワークは苦手？」

「…訓練できないと困りますし」

「ずいぶん勉強熱心ね、感心するわ。そう言えば小学生の頃はよく委員長を任されていたそうね」

「…委員長なんてお飾りみたいなもんでしたから、書類なんて書いてません」

「なかなかやるわね、そんなに生徒会をやりたくないのかしら？」

「そう言つてチラリとのほほんさんを見る楯無さん、うわ、伝家の宝刀あつさり抜いてきたよ、なんてことだ。」

「ええっ、れいれい、生徒会たのしいよ？」

「うつ」

流石は伝家の宝刀、威力がダンチで困るね。主に精神的なダメージが凄い。

改めて生徒会メンバーを見る、3人が3人ともいわば美少女なんだよ、割り切りはしているつもりだけど、理性がマズいことになるかもしれない、無論勝てる気などしないけど、立場が危なくなるような事はぶっちゃけてしまえばしたくは無い。

まあ入るだけならどうということはないだろうけど、その後が問題だよ、……やめて、のほほんさん、瞳をうるうるさせながらこっち見ないで。

「れいれい」

「うつ、うつうつ…」

ギツと楯無さんを睨みつける、飄々とした態度であっさりスルー、うるうるとした瞳で見つめてくるのほほんさん。さつきから虚さんが空気？何を言ってるのかな、もっともプレッシャーになる視線を送ってきてるのはこの人だよ。なんでこんなコンビネーションがいいんだろっ、やっぱりあれか、幼なじみだからか、これに簪さんがついたらどうなるんだろっ、恐ろしすぎて想像も出来ないよ。

「うつうつ、分かりました、生徒会に入ります」

「「やたっ」」

パンと楯無さんとのほほんさんが手を合わせて喜んだ。

「ただ、今日は用事があるので仕事は勘弁してください」

「用事？」

「ええ、打鉄式の手伝いです、完成できなかったのはある意味僕の所為でもありますから」

う？なんか一瞬楯無さんの目つきが鋭くなったような気がする、…
…そう言えば楯無さんって重度のシスコンだっけ…。

ああ、なんだか嫌な予感がするよ、…今更だけど学園生活終わるまで僕は生きのこれるんだろうか。いろんな意味で。

「え、ええと、では、僕はこれで」

「ふふふ、また明日も来てね」

……… 凄い、怖い。

その頃第三アリーナでは…、

「お、お前ら！また二人がかりかよ！？」

「黙れ！！お前がいつまでもウジウジしてるからいけないんだ！」

「そうですね！一夏さん！どちらかに決めてくださいまし！」

「意味わかんないだあ！あぶねえ！！なんでこんな時に限ってコンビネーションが抜群なんだよ！？」

「「抜群などではない（ですわ）！！！」」

なんだかもういつも通りの風景にいろんな人たちが呆れていた。

4、生徒会長キャラって不敵キャラが定着してる気がする（後書き）

さて、いつも通りだったな、テンションは若干低下しているが。

零「…なんかテンション低くない？」

いや、この話で普通に簪ちゃんとの絡みを見せられると思ったのにこの有様だからな。

零「で、なんで僕がここに呼ばれたのさ？」

…それは何とも分からん、ちなみに作者は白坏さんサイドよりお前サイドの方が書きやすかったりする。需要無いのにな。

零「本人目の前にしてその台詞吐いちゃうんですか！ホントクズだな！アンタ！」

アアツイイツ！…いやねえよ。

いつも通り感想、レビュー等お待ちしています、宜しくー！

5、 視線は死線（前書き）

更新遅れて申し訳ない！PCダウンしていて今まで使えませんでした！

でもおかげでハアツハー！妄想だ！悪くないぜこの案！状態だったので、…保証はしないけど更新頻度は上がるかな！な！

5、視線は死線

目は口ほどに物を言う、こんな諺だかなんだか知らないけど、作った人は物事をまっすぐに捉えられていた人なんだろうね、え？どうでもいい？…まあ、それはそうだよな。

ともかく、僕が今立っているのは整備室の入り口、当然ここには代表候補生じゃなくても訓練機をできるだけ自分専用として登録させたい人とか（主にクラス代表）整備科で自分の腕を磨きたい人とかがたくさん居るわけで。

そして僕は学園内ではトップレベルで有名な男のIS操縦者、一夏でなくとも男であるって事でそれなりに興味を引く対象みたいなんだよね。

だったら長文で喋ってんじゃねえ？…デスヨネー、うん、まあ結論から言っと。

痛い、主に視線的な意味で。

整備室に入った途端に何人かがグリーンと首を回してこっちを凝視してくる、……なんかやたらと熱っぽい視線というかネタを仕入れた似的な視線が混じってるのは気にしたくないね。

取り敢えずは仕事だ、これをえーっと確かあのイベントの日までに終わらせないと僕が死んでしまう。

何故か、よろしい、ならば回想だ。

『はあ、ええつと式式の操縦者がキレて自分で完成させると言い張って学園に持ってきている…と?』

『ああ、語弊はあるが間違っではない、それでだな、何にせよ式式はうちの管轄なんだ、そして倉持が技研であれ企業である以上、納めるもんは期限内に納めなければならん』

『そうですか、で、その人だけの作業では恐らく間に合わないの』

『そう、お前に作業のサポートを頼みたい』

『……別に構いませんけど、式式はまだ五割しか完成してないんですよ? 来月までに二人だけで完成させろってのは少し無理があるんじゃないですか?』

『荷物運びには織斑でも使え、知識の勉強にもなるだろうさ』

『まあ一夏はそれでいいとして、僕一介の高校生に過ぎませんよ? プログラムなんて触ったこと無いです』

『嘘はいかな、桐原。千冬から聞いたぞ、小さい頃は暇つぶしにやたらとクオリティの高いゲームを作ってたとか何とか』

『…千冬さん……、まったく分かりましたよ、やればいいんですよ』

『よろしい、でだな、期限は来月のリーグマッチだかあるだろ? あれの一週間前だ』

『ああ、そう言えばありましたねえ、…ってか一週間前って実質一ヶ月じゃないですか』

『充分だろう？確かにマルチロツクのシステムは曲者だが。まあ、期限内に間に合わなければ私が乗り込んで完成させるさ』

『え？じゃあ……』

『お前らが期限内に完成させられないのなら、その後で私の運動に少しばかり付き合ってもらうことになるがな』

『……』

『嬉しくて言葉も出ないか、フ…まあよろしく頼んだぞ』

以上、白坏さんとの会話でした。
うふふ、いつの間にか千冬さんと仲良くなっているっていう、そして付き合ってもらうあたりで秀麗な顔が蠱惑的に歪んだのがすごく怖かった。

アレだよ蛇に睨まれたなとか的な。

ってどうでもいいや、まずは更識さんを探さないと、そう言えばウオーリーを探せって難しかったよね。これまたどうだっていいけど。

えーっと……………あ、居た。

なんで更識の人って髪がガチ水色なんだろう、探しやすいけど不思議でならない。

「えつと…更識さん？」

「……………」

機体に向き合って無言で作業を進める簪さん、無視…されたわけではないと信じたい。

「更識さん、聞こえてます？」

「……………」

……………とうーだうーん。

ピトッ

「ひゃあっ！？」

凄いな、飛び上がったよ。

ちなみにウチでは三度目の正直、もとい三度目の実力行使なんだよね、…断っておくけど別に三回も実力行使するわけじゃないよ？

ちなみに先ほど使った実力行使の材料はキンキンに冷えてやがるジューズでした。…ビールじゃないよ？

「……………な…何…………？」

「いや、聞こえてなかったみたいだから、こっ、ぴとっ」と

「……!!……!!」

二次ファン

真つ赤な顔で無言の抗議、すいません、上目遣いで可愛くしか目に写らんです…。

取り敢えず僕は右手に持ってた果汁100%ジュースを簪さんに手渡す、…好み分らないし、仕方ないよね。

「白坏さんから聞いてない？サポート人員の事」

簪さんはジュースを飲みながらこくりと頷くと、もそもそしゃべり出す。

「貴方は…知らない…私…一人で完成させ…る」

そんなことを言いながら両手でジュースの缶を持ってくびくびと飲む簪さん、…それにしても、よりもよってここが原作通りか…。

「サポート人員の事白坏さんから聞いたとき、期限内に終わらせられなければあー…その…」

「聞いた…貴方に…迷惑は…かけない」

「速く完成したほうが機体のチェックが十分にできると思うけど？」

「私一人でも…出来る……」

むう…意外に強情だ…、そうしている間に簪さんは缶ジュースの中

身を飲み干したようでゴミ箱に持っていこうとこの場を離れる。

さて、どうしたものか……まあ、マルチロックオンシステムはこっちに一応あるけど……、どうしよう、出来れば任意の方がいいだろうし……。

「ジューズ……ご馳走様……」

「あ、ううん、いいよ。当初の予定より遅れたお詫びみたいなものだから」

「……そう、……ねえ、一つ……聞いていい……?」

「うん?なに?」

「何で……、手伝いたい……?」

「え?あー……」

なるほど、一夏が言葉に詰まったのも分かる気がする、言いづらいよね……さり気に視線に包囲されてるし。

っていうかまあ分かったことなんだけど、ここに入学してからこう……視線が絶えたことが無いんだよね。ストレスで胃に穴が開きそうだよ。

それはともかく。

「うん、まずは手伝って確実に終わらせないと酷い目に逢うだろうってというのが一つ、僕等にはこれの開発を贈らせたしまった責任があるって言うのもある。で、一番の理由は、僕がそうしたいからそうするんだよ」

これが僕が手伝いたい理由のすべてって感じかな、…うーん、ちょっと恥ずかしいけど事実だしね、それに、こういうのは言葉に出さないと伝わらないものだよね。

「……」

「……」

…妙に気恥ずかしい沈黙。僕は少しずついたたまれなくなって目をうるうると虚空に漂わせ始めると、簪さんの雰囲気は少しだけ和らいだ、簪さんはずっと立ち上がり、僕を真面目な顔で見ながら一言。

「…今日は……これでおしまい…、貴方については……考えさせて…」

それだけ言って、簪さんはその場にあつた作業用の端末やら道具を持ってさっさと整備室を出て行ってしまった。

「ふう…、まあ、引っぱたかれないよりは随分マシか…この調子で頑張りたいけど…」

僕はぼそりと呟いて、時計を見る、時計の短針は7時を差し、長針は半分を回っていた。そろそろ一夏達も訓練を終える頃だろう、ちようどいいので僕は寮にある食堂へ向かうためにゆったりとしたス皮ードで整備室から外に出た。

桐原零、彼は名乗らなかったが、これであっているはずだ。

なぜ彼の名前を知っているのか、そんな理由は単純明快、彼が男のIS操縦者だから。ただそれだけ。
流石に学園で今最も有名な話題を知らない程に疎いわけではない、それに、彼の機体の事もある。

ある特定の女子は桐原零と聞くと、び、BLとか…そっそう言うことを想像する、らしいが、私は断じて違う。

女顔だし、背が高めな方とはいえ、全体的にほっそりとした印象&学園で二人きりの男子…そしてあやまち、違う違う何想像しているのだろう。

取り敢えず、白坏さんから推薦があったからプログラミングに関しては信用してもいいのだろう。

人柄的に言っても温厚で、優しい性格らしいので、問題はない。

それでも、私の中には意地とでも言うべき意志が確かにある。これだけは絶対に譲れないのだ。

手前あんな返事はしたものの、手伝いを受ける気など、どこにもなかった。

そっ、姉を……越える、ただそれだけのために。

端から見れば、それこそ白坏さん達から見れば、相当に下らなくて
どうでもいい、自己中な意志なのだろう。

それでも、私はやらなければいけない、そんな気がした。いや、厳
密に言えば、やらなければ、姉の影はどこまでも私を覆ってくる、
それから逃れるために――――保証など一切無い、しかし私
にとっては、そんなものでも縊るしかない、と思うほどに、姉の影
は大きい。

いつの間にか、寮の自分の部屋についていたようだ、目の前にドア
がいきなり現れたことで、私の思考は一時中断した。悶々とした気
持ちのまま、ルームメイトは夕食に出かけて、誰もいない部屋に入
る。

ボスリ、と顔から布団に突っ込んで、体を埋める、撮りだめしてお
いた特撮物があるが、今更見る気にもなれない、私の意識は暗闇に
少しずつ吸い込まれていった。

「桐原……零……」

ぽそりと、無意識にあの少年の名前をつぶやきながら、意識を失っ
た。

「う上をむういてーああーるこおおう、涙が、とぎれーないよお
おに」

別に嫌なことがあったわけでも無いけど、なんか夜道を一人って凄
い寂しいじゃん。

いや、厳密に言つと一人じゃないんだけどさ。

「相変わらず下手ね、歌」

「う、まあ、得意ではないけどさ…そこまでバツサリ言われると…」

僕の隣にいるのは鳳鈴音ファン・リンインというさばさばとした少女、長い艶やかな
黒髪を両サイドで結い上げているのが特徴、ちなみにリンリンと呼
ばれると癩癩を起こすんだよ。

さつき歩いてたらいきなり後ろから覆いかぶさってきた、小さいか
ら割と余裕で支えられたけど、二重の意味でビックリして金魚みた
いに口をパクパクさせてた、らしい、鈴ちゃん談。

「それにしても驚いたよ、鈴ちゃんがIS操縦者になってるなんて」

「うん、っていうかアタシもビックリよ！あんたら二人共IS操縦
者になってるんだから」

「ああうん、僕もビックリしたよ、あの時は、今はどこかほっとし
てるんだけどね」

「え？なんで？親元を離れて寂しくないの？」

「んー？ふふふ、それよりさ、鈴ちゃん凄く勉強したんじゃない？
凄く大変らしいじゃん、普通に代表候補生になるって」

「なによわざとらしく話題変えて…ま、いつか、まあ大変だったって言えば大変だったけど、楽しかったからね、割とすぐに覚えることと覚えられたし」

しばらく他愛ない会話をして、鈴ちゃんが探していたというアーリーナ横の受付まで案内して、そこで別れる。

・・・一夏たちがアーリーナから出てこなかったのは引っかかるけどまあいつか。

「む？零か」

「あれ？箒？」

「お？零じゃん」

幼馴染一同ここに会す。どうでもいいわあ…、まあそれはともかく、どうもこつちが予定より早かったみたいだね、こつちのニアミスっていうんだっけ？

「それにしても箒さ、なんだよずかーんって」

「…ずかーんという具合にだな…」

「いやわかんないでしょそれ」

こちらでも先ほど同様ほのぼのとした会話をしながら寮への道を歩いているのだった。

……？背筋に悪寒が…風邪でも引いたかな。

一方その頃

「2組の代表誰だか分かりますう？」

こめかみにやたらとでかい血管マークを浮かべた鈴音が窓口担当の先生に詰め寄っていたのはまた別のお話。

「……ん、メールか」

据え置き端末にピコピコとアイコンが光る。

作業を中断して、すべてのウィンドウを最小化、メールのアイコンをダブルクリックして内容を確認める。

「無題……？」

かりかりとマウスをスクロールする音が彼女以外誰もいない部屋に響いている。

「……………こんな奴が、この世界にもいるのか」

最後に出てきたエンブレムと、差出人の宛名、そして、その組織の名前を彼女はぼそりと呟いた。

「グローバル・コンテクス……接触してみる価値はあるか……」

5、 視線は死線（後書き）

フロム脳から！妄想が逆流する！ギヤアアアアアアアアアッ！

と言うわけで更新遅れて申し訳なかった、撃沈王子（笑）です。
上記のとおりです、言葉を飾ることに、意味は無い。

こんなんでもテンションはちゃんと夜のテンションなんだからねっ！
なにはともあれ、感想、レビュー、その他諸々待ってます、これから
もよろしく！

6、
アリー。よりテ。スだよね、**歯茎最高。**
(前書き)

6、アリー。よりテ。スだよ、歯茎最高。

黒い仮面の下。その仮面は私の目を覆っているのに、鮮明な景色が網膜の上に広がっている。

――テストモードを起動、テストを開始します

無味乾燥とした女性の声が塞がれた耳の奥にある鼓膜を叩き、目の前にある景色に空中投影型の仮想の的が大量に表示される。それに合わせて両手に持つ武器がテストモードに移行、いくら撃つても弾丸は発射されなくなったのを目の前に表示されるモニターで確認する。

ドヒュウツ！と風を切る音が鼓膜に響き、クイックブーストが正常に作動している事を確認。

ISに搭載されたハイパーセンサーが高速戦闘モードに一瞬で切り替わり、鮮明な映像が360度全方位を駆け抜けて行く。

それを見て右手のモーターコブラの銃口を目と水平になるように構え、銃弾をバラ撒いて的を的確に落としていく。マシンガン故に多少の討ち漏らしは有るが、割り切って左手の051も構え、高速で飛翔、それに伴い目に写る的をすべて撃ち落としていく。

「…ッ…！」

やはり、きついか…。

しばらく高速で的を撃ち落としていたが、急減速し空中で完全に停止。

背中にある羽根のような追加スラスタを前に突き出して、レーザー

ーカノンモードで展開、チャージを開始するとともに、ミサイルハッチをフルオープンにする。
ほんの数秒でフルチャージに達したレーザーカノンの砲口から膨大な光条があふれ、目の前にあった的をミサイルとともに全て消滅させた。

テストモードを終了させ、私はべっとりと肌にまとわりつく汗を流すためにシャワールームに直行した。

シャワー室に入り、私は先ほどのテストの反省をする。ちなみに入ったからにはきちんとシャワーは浴びる、ので、蛇口を捻ってお湯を出していく。

「やはりクイックブーストはPAのG軽減効果が無いと身体的な負荷が高かったな…PICでブースト直後の急制動が可能なのはいい発見だった…」

耳についたままのイヤークラスをチラリと見る。これの性能を限界まで発揮する為には、やはりコジマ粒子が不可欠だろう、だが。

「今はその時ではないな、まあ…今はそれどころではないし」

サアアアアとやや温めの温度設定をされた温水が肌を流れていく。年齢相応に瑞々しいその肌は、汗を含んだ水滴を弾き、そして照明がその水滴を照らし、白い肌をより強調している。

そして背中側のラインも美しい曲線を描いている、何より特筆すべきは形がよく、それなり大きい胸につく二つの丸いものだろう。

そして特徴的な白い髪が濡れた体に張り付いているのが、妙に官能的な魅力を発している。

なぜ自分自身の体だというのに少しやましい気持ちになるのだろうか。まったくもってわけが分からない。

とかく彼女がシャワールームを上がるとともにこのサービスシーンは終了するのだった。

「おい、なんだサービスシーンって」

地の文見ない、さつさと髪乾かしてらっしゃい。

変態、この言葉が誰が為にあるか、と今聞かれば、まず間違いなく、私はこう応えるのだろう。

それは同僚たちの為にある言葉なのだ、と。

ここに、否、この世界にやってきてから…正確には目を覚ましてか

ら、もう半年を数えていた。

今現在、私の所属は倉持技研、という割と有名な企業に所属していることになっている。まあどっかの変態ウサミミの仕業だ、ちなみにそのウサミミからは二日に一回ペースで連絡がくる。が、今は別段どうでもいい。

目下の問題は――

「ふふふふああふつくしい、ふつくしい凶面だよ、君がこのままずうつと2Dであればいいのに、いやわか（ry」

「やはり搭載するのならグレネードで固めるべきだろう、あの鈍重なフォルム、鈍く光を放つあの銃身…そして何よりも至高とも呼べる爆発範囲、最高ではないか、なにがいかんというのだ」

「弾速が遅いんだよ、グレは！やはり多対一に置ける戦闘ならば弾幕で敵共を一瞬で黙らせられる、やはり五連装式ガトリングをだな…」

「わかつちゃいない、そしてなつちゃいないぞ…！いいか貴様等、時代は実弾ではなくエネルギーなのだ、圧倒的な威力、そして下手なバズーカよりも弾速の速いあの圧倒的な光条！素晴らしいとは思わんか！」

「この装甲の曲線美…！ああ、時よ、止まれ…！その時君は美しい……ッ…！」

――この変態共だと、私は思う。

ちなみに紹介したのは一部のもので、もっと酷いのが沢山…星の数

程いる。

ああ、そうとも、気にしなければそれほど害でもないんだが、非常に見苦しい、頭にバケツかぶって首もとあたりから塗料垂れ流しながら歩いている奴なんかいたら見苦しい以外の何者でもないだろう。とはいえ、こいつらに矯正など、もはや手遅れ、無理、無駄、無意味、の三拍子が揃って顔を出しそうな程に。

ここを抜け出す…簡単だろうが今後ろ盾をなくすのはかなり痛い、別に何をしようと思っているわけじゃないが、今の立場はそれなりに使えるものだ。

仕方なく私は『ストレイド』の調整作業に戻ることにする、後ろで何事か協議している三馬鹿の熱意が飛び火しないか心配だが、気にしたら負けだろう。

「また調整してるの？零式の管轄してるの貴方なんだから、追加パツクの会議に参加してらっしゃいよ」

私に話しかけて来たのは研究所唯一の良心とも言える女性、名前は草薙優子という、純和風の顔立ちによく似合う緑色の服をいつも着ている。

スタイルや姿勢がよく、身長が高いようにも見えるが、じつは160cmでよく意外と背が低いんだねといわれてよく怒っているのを見かける。コンプレックスらしいがこれさえ無ければかなり魅力的な女性といえよう。

注釈しておけば彼氏募集中とのことだ。…すべからくどうでもいい説明だった。

ともかく

「パスだ、あいつら勝手に決めようとして勝手に喧嘩してるからな、

結局取り敢えずはあの三馬鹿に任せようと決まった、それに、まともなのはこっちで製作段階に入ってるしな」

「ああ、想像がつくわね…、みんな一国一城の主って感じだから」

草薙は苦笑しながら必死こいて議論をし続けている三馬鹿に目を向ける。

「だから！零式に今必要なのはエネルギー兵器に決まっている！」

「彼は実弾武器の扱いに長けているのだ！それを伸ばしていつかガトリングモンスターと呼ばれるようにだな！」

「何を言うか！実弾といえばグレネードだろうが！マシンガンなど取るに足らんわ！」

私はいい加減にかける言葉も失し、草薙は苦笑しきった表情でこう呟いた。

「全部合わせるってことは…」

「できんのだろうな」

「そうよねえ……」

私が端末を使ってシステムを再調整していく音がかすかに木霊し、草薙のうつすらとしたため息が流れ、三馬鹿や変態共の歓喜の聲がそこかしこからぎゃあぎゃあ聞こえる。

これが私の所属する倉持技研、追加装備開発部の日常。

ちなみに、比率はなぜか男：女↓7：3という今の時代ではやはり異質な部署である。

side 零

「ごめんなさい…やっぱり…私一人で…完成…させる…の」

うつむ…やっぱり、といえばやっぱりか…。

しばらく粘ってみたけど意志を変えるつもりなんて微塵もないみたいだし…、どうしたもんかなあ…。

取り敢えずは一旦引くしかないか…。

「分かった、僕は更識さんの意志を尊重する」

「え…」

思いつめた表情を、驚きに少しだけ和らげる簪さん。

「無理強いは馬鹿のやることだからね、僕は君を信用する、その代わり」

「……その…代わり…?」

「なんでも相談して、僕を頼ってよ?一人で何でもかんでも背負うと潰れちゃうからね」

ぴしつと指で簪さんを指して強調する、原作でも色々背負っちゃったしね、この子の場合にはきちんと言っておかないと本当につぶれちやいそうだから。

「う、うん…うん…!」

コクコクと繰り替えし頷く簪さん、やっぱりかわいいなあ…、それとも真面目な顔で気圧させちゃったのかな?

「うん、よろしい、じゃ、僕はこれで…っ」と…」

「…?…どう…したの…?」

「えーっと……携帯番号教えてくれない?」

「あ…う、うん…、せ、赤外線でもいい…?」

「おっけーおっけー、全然良いよ」

……ぴろりん、…ぴろろん。

音間抜けすぎんだろ?うん、僕もそう思う。でもさ、ほのぼのして

ていいじゃない！

「え、ええっと……」

簪さんはケータイを差し出すようにしながら、徐々に顔を赤くしている、…そこまで赤くしなくても、なんか恥ずかしいことでもあるのかな？

「うん？」

「あ、ありがとうっ！」

簪さんはそう叫ぶとすぐさま踵を返してどたとと廊下の向こうに消えていった…えっと、まさか。

「あれが零の好みなのねー」

「随分と初心な女子が相手なようだな」

「あれがフラグというものですのね、勉強になりましたわ」

「なんで君らここにいんのさ!？」

思わず突っ込んでしまった、なぜここに幼馴染コンビ+1、もといヒロイントリオがこんなところに。

てゆーか、もっと重要な事が今さっき目の前で起こった気がするよ？

「まさか…僕がフラグを建てた…だと……?」

「零、零落ち着きなさい、いつもの口調じゃ無くなりそうよ」

いや、二重の意味でフラグ建ってしまったことに愕然と……ヒヤア
すげえ寒気が！

ばつと後ろを振り向くとそこには悪寒の気配だけが、既に本体は去
ったというのに、なんということでしょう！

ん？あれは何だろうか、悪寒の場所に紙片が…

『オボエテロ』

たったの五文字、のたうち回っているような字がくしゃくしゃにな
った紙片に書かれている。

「きよきよきよきよきよ今日ははははは、かかかか帰ってねね
ねねねね寝ようかなあああ…！」

「お、落ち着け零！」

「い、いきなりどうしたのよ！？」

錯乱する僕、紙片を落とす。なんかもう自分でも分かる、すごい錯
乱っぷりな事が。

「……………」

完全に沈黙するセシリア、どうやらあの紙片を拾ったようだ。顔が
ヤバイ程に青ざめてしまっている。

うん、ホラーの域だよ、どうしてこんなことになったんだろうか。
恐るべし、シスコン。

逃避の為に頭を回転させていると、あることにふと気づく。

「……訓練は？」

「え？ああ、一夏が千冬さんに連れ去られたからね、デバガメする方が訓練するより楽しそうだし」

そんなんでいいのか、代表候補生、しかもセシリアも箒もうんうん頷いてるよ。

最高級の餌みたいだなあ…一夏。

side 一夏

「ふいー…」

千冬姉に連れ去られて、わけの分からない書類のチェックをしてそれにハンコを押すという単調な作業を終えて、俺は椅子に体を凭れさせる。

「ご苦労だったな、一夏、もう戻ってもいいぞ」

「あ、ああ、千冬姉」

あ、出席簿アタックがこない、よかった、今はこれでいいみたいだ。

「…よもや、お前がISに乗ることになるとはな、今でも信じられんよ」

ため息混じりに千冬姉がそう呟く。

「ああ、俺も信じられない、でも、俺はさ、何て言うのかな、満足？してるんだ」

「……………まだ、引きずっているのか」

「……………まあ、そりゃな。でも、これで千冬姉の足を引っ張らずに済む」

妙な空気になって、なんだか居づらい空気がそこに充満する。あの時、俺は無力だった、でも今は”力”がある。守りたいものを、家族や仲間を守る力が。

「……………ふん、まずは守るべきものに勝てるようになれ、話はそれからだ」

「はは…、相変わらず手厳しいな……………ん、時間か、そろそろ行くよ」

「さっさと行け、馬鹿者」

ぶっきらぼうな千冬姉の言葉を背中に受けて、苦笑しつつ部屋を出る。

「……………死ぬなよ、一夏」

「…ん？」

なにかを言われたような気がして振り返る、が、既に圧縮空気が補充されてドアが閉まっていた。

まあ…今はいいか…、野暮ってもんだろうし。

時計は既に5時を指していて、訓練に行くにも微妙な時間帯だ。

「どうすっかなあ……」

「……………あれ…？ねえ、君、一夏くん？」

「へ？」

そこには、リボンの色で三年生と分かる、妙に大人びた少女が不思議そうな表情で俺のことを覗き込んでいた。

その少女は、ここににいる友人によく似ている、否、彼の……………

……………姉だった

6、 アリー。よりテ。スだよね、 齒茎最高。（後書き）

いえーい、いつも通り目がしょぼしょぼの撃沈さんですよ（＾q＾）

今回はなんかすつごいの詰め込んだじゃった気がします。

後半に中身が無くなるってのは勘弁だね、

白坏「無能だからな、仕方あるまい」

やめろー！薄々分かってても言わないんだ！大人ってのは！

白坏「ガキのくせに何を言うか」

うつ…、うつ、感想、レビュー、指摘など、いつも通りお待ちします…うつ、言い返せない！悔しい！でも（ry

7、シリアスはこりこりだよ。弄くられるのはもっとこりこりだけぞ。(前書

な、難産だった…

7、シリアスはこりこりだね。弄くられるのはもっとこりこりだけぞ。

正直に告白するでしょう、僕は女性が苦手だ。

何故か、…そこは…まあ、複雑な事情というか…なんというか。

決してこの世界での実の姉や元々僕がいた世界で親類にいじられまくったわけではないんだよ！？

そして、今僕が一番苦手であろう”天敵”とでも表されるべき人間が、部屋の片方、もとい僕の使うベッドを占領している。非常に迷惑極まりない。

「なんでここにいます？楯無先輩」

「鍵開けて入ったの、なにか問題がある？」

問題…ありありだろう、まず、なんで僕と教職員しか持っていないはずの鍵を持ってるのか。

あと非常にきわどい恰好をしていらっしやる。具体的に言うと肌着に男物のシャツ一枚、スタイルがいいことも相俟ってなんというか危険極まりない。

「生徒会長権限よ？この部屋には前からちよくちよく侵入してたし、それにしても自己主張が薄いよね、ベッドからあまり匂いがなくてロマンチックじゃないわ」

「……悪かったですね、影が薄くて」

「まあまあ拗ねない拗ねない、ところで、簪ちゃんには振られたみたいね？」

どこか勝ち誇るような顔をした会長はその直後のことを思い出したのか僕に向ける笑みの質を徐々に黒いものに変化させる、うわぁ…視線だけで心臓止まりそう…。

「え、ええ、どうしようも無くなったら力は貸すと約束したんですが…」

あの娘の事だ、おそらくギリギリまで粘って自分の力だけで式式を完成させようとするだろう。

あと今ちよっぴりシリ阿斯に入っているが、楯無さんの服装は肌着にシャツである。…普通の格好をしてほしい、頼むから。

「そうね…もうちょっと頼ってくれれば…」

どこか引け目のあるような表情で視線をさまよわせる先輩、それを見て僕は思わずため息を吐いた。

「はぁ…先輩…」

「な、何かしら？」

「草葉の影から見守るだけじゃ簪ちゃんとの仲は縮まりませんよ？」

「わ、分かってるけど…」

たじたじとかもじもじとかそんな感じで落ち着かないようにさまよわせていた視線がさらに動揺したようにそのスピードを上げる。

まあ、頭ではわかってているのだろう、そうでなければストーカーみたいな真似はしない。

「…分かってるんなら実行に移してやってください、これは多分ですけど、簪ちゃんもあなたを待っています」

「……え…？」

何故にここで鳩がクラスター爆弾喰らったような表情するんだろう、当然じゃないのかな…家族…だから。

「どう……したの…？」

楯無先輩が心配するような表情で僕の顔を見ていた。

「気分悪いの？すごく辛そうな表情してたけど」

「ええ？そんな顔してました？気のせいですよ、気のせい、あははは」

端から見ればとんでもなく不可解な行動だったのだろう、その証拠に楯無先輩が怪訝な顔をして心配そうに僕の顔を見てくる。わあ近い近い。

「大丈夫です、大丈夫ですから離れてください、あと何でもいいので服着てください」

「え？着てるじゃない？」

「肌着にシャツだけは着てるとか言いません」

「いいじゃない、っていうかなんで零くん部屋に直行してるのかしら？書類仕事手伝ってもらいたいから来てちょうだい」

「なっなんでその恰好のまま部屋から出ていこうとするんですか！頼むからなんか…スカートでもスボンでもいいから！着てください！」

ていうか今まで真面目な感じだったから気づかなかったけど、いろいろアウトな恰好の楯無さんとよくまともに話せてたよな…、偉いぞ僕。褒美なんかあるわけないけど。

そしてまさかのパターン！とものすごい音を立てて開かれる部屋のドア、入ってきたのは涙目になった鈴ちゃん…え？なんで？

いや、そんなことよりも、だ。出入り口に涙目になっている鈴ちゃん、そして肌着・シャツの楯無さんと出ていこうとする彼女の腕を掴んでいる僕、まずいパターンだ、明らかに、まずい状況だ。

涙目になっていた鈴ちゃんは赤くなっていた顔をさらに真っ赤にして瞬時に腕部装甲を部分展開、思いっきりぶん殴るモーションに入っている。

「なななななな！？なにしてんのよ！アンタはああッ！！」

「り…理不尽n」

頭からものすごい音が鳴って僕の意識は完全にブラックアウトした。避けられないよ…あんなの……

side 一夏

「なんだあ…？鈴の奴…」

俺はぶたれた頬を擦りながら鈴の走って行った方向を見る、熱を持つている頬がジンジンと痛む。
しかしおかしな奴だ、約束を覚えていたっていうのにまさかキレてぶってくるとは。

ちなみに先ほど箒を見て視線で『なんこれ？』と問うたところ、馬に蹴られて死ぬ、だそうだ、俺の幼なじみはみんな冷たいな、ちなみに騒ぎを聞きつけたセシリアにも同じようなことを言われた。女子は分かん。

「さて、居づらいし飯にでも行くとしますか…」

本来なら二、三人、主に箒とかセシリアがいるんだが何かの会議をするように追い出されてしまった。

ちなみに今の時間はすごく微妙で、訓練しようにも移動する時間などを考えれば30分程度しか訓練できない。

と言っわけで食堂……結構早い時間かと思ったんだが、意外

と人が多い、うんうまいもんな、食堂のメニュー。

「えーっと、ど・れ・に・し・よ・う・か・なっと…」

最近和食とかしか食ってなかったからな…どれにしよう。

「……今日はラーメンにするか…」

ぴっ、かしゅん、今更な感じだが、食券は札みたいなものになっていて、どこか高級感を漂わせる。装飾とかはほとんど無いが、やっぱり使い捨ての紙じゃないことがその要因なのか？

ともかく俺はおばちゃんに食券を渡していつも通り少しかけ会話、ラーメンを受け取って席につく。

「おーおいしそうだねえ、一夏くんよ」

「あ、どうも鈴里さん」

突然現れた大人びた容姿の少女、その目は普通の人と比べると細く、いつもニコニコと歪めている唇とペアになってどこか淫靡な印象を見るものに与える。スタイルもグラマーなのかスレンダーなのか曖昧だが、とにかく均整のとれたラインが服越しでも現れている。

彼女は零のお姉さんで、昔からの知り合いだった、零とともに3年前どこかに引越して以来会っていなかったが元気そうで何よりだ。ちなみに俺のことをテレビで見えてすぐにでも会いたかったらしいが、専用機のテストやら手続きで始業式から今までこちらに帰ってこれなかったらしい。

「鈴里さんは何を頼んだんですか？」

「んー？冷麺だよ？あと一夏くん、先輩と後輩のメリハリはしつかりつけようね？」

「あ、すいません、昔のくせで」

鈴里さんはあくまでも自然に俺の席の正面に座ってくる、なんというか相変わらず無駄がない。

「ははは冗談冗談、まあ二人きりとか以外は橘先輩って呼んでね？」

変わってないなあ…この人、何だか安心する。と、あれ？今なんて言っただ？

「……あれ？桐原じゃないんですか？」

「んん？あれ？言ってなかったつけ？私は今橘さんの養子になっちゃってるんだよ」

「…初耳ですよ、なにかあつたんですか？」

「あつはっは、ところで、君以外にももう一人男子がいるんだって？」

な、なんだ？話題を思いつきり変えてきた、これ以上は詮索するなっってことだろうか。

「は、はい零です、もう会いました？」

「零…って、あははは一夏くん、お姉さんをバカにしちゃいけない

なあ」

「え？」

「あれ… ホントに連絡いつてないみたいだね… あんまり話したくないんだけど、言っておいた方がいいかな」

少々渋るような表情をした鈴里さんは手元にあった冷麺を一気にすするとゆっくりと語り出した。

「私の両親は死んじゃったんだ、その時に零は行方不明になったんだよ、海外にいくとき飛行機がテロにあつて、ね。零は… 遺体が見つからなかっただけじゃないかな。私は学校の行事でいなかったからさ… 助かったけど、あの時はすごく複雑な気持ちになったよ」

その話を聞いて、きっと俺は信じられないものを見る目で鈴里さんを睨みつけていたのだろう。

鈴里さんは弱ったような笑みを浮かべ、困ったように残っていた冷麺の汁を箸で弄んでいる。

「ま、そんな辛気臭い話は無しにしましょう？」

「あ、はい… そうつすね」

腑に落ちないながらも鈴里さんは微妙な雰囲気のを和らげるように会話を続けてくれた、ここらへんは年の功って奴だろうか、流石である。

「……一夏くん、私を年よりみたいに言うのは止めようね？」

「申し訳ないっす…」

こういうときの女子はすごく怖い、あと逆らわない方が安全、
15
年の人生のなかで学んだ知識は伊達ではない。

7、シリアスはこりこりだね。弄くられるのはもっとこりこりだけど。

（後書

今回中に戦闘に入りたかったんですけどねえ…

まあ伏線設置に手間取ってしまったという、ふはは自分ながらクズめ！

そして相変わらず終わりがたが酷い。いやいや駄文駄文…。

あー、あと今回のイベント前訓練でちょっとだけ鈴がデレる場面は訓練だけしてません、でもデレてはいます…説明しづれえー……。

8、 弄るのは楽しいよね、皮肉な事に（前書き）

タイトルちょっとだけ変えましたー、これからもよろしくー

8、弄るのは楽しいよね、皮肉な事に

うなー…まだ頭がクラクラする…。

やっぱりIS対生身ってありえないでしょ…よく原作であんなこと出来るよね千冬さん。

まあそれはともかく、今日はクラス対抗戦当日、……暗に言えばあのイベントの日なんだけど、あつ危険b…いや何でもないです。

ちなみに鈴ちゃんにぶつ叩かれて気絶した後、泣きながら僕の部屋に入ってきた理由を鈴ちゃんから聞かせていただいたんだけど、なんていうか擁護のしようも無い理由だった。

なんで「毎日作って食べさせてあげる」が「毎日食事を奢ってあげる」になるのかな。

原作読んだときも思ったんだけどわざとしか思えないよ、どうなってるんだろうね一夏の脳は。

「君は女心が分からないって言うけど僕は君の方が分からないよ…」

「で、イグニッションブース…え？なんか言ったか？零」

「んー？一夏はバカだなあって」

「酷くね!？」

何を言うのかね、この阿呆は。ちなみにちょっと遅れたけどここは第三アリーナのAピット、だからどうしたって話だけど、まあ場所くらいは明記させていただく。

「いいや、私も零に同意するな」

「ええ、わたくしもですわ」

おお、素晴らしい援護射撃、コンビネーションはV作戦のあの方々よりも素晴らしいと僕は自負することしよう。

…実に下らないね、あはは。

「まあ、一夏いじりはこれくらいにして」

「そう（だな）（ですわね）」

「お前ら酷え!？」

ツッコミ要員な一夏、ツッコミ要員は必然的にいじられ要員になるって偉い人が言ってたよ。

「だからどうしたんだよ!？」

「まあまあ一夏、落ち着きなよ、はいひっひっふー」

「何故にラマーズ!？ああもう分かったよ!」

ノリツッコミが出来ないとは…まだまだ修行が足りんなあ…、まあいいや、ぶっちゃけ今はどうでもよかったりするし。

「まあこのままじゃ進まないしさつさと本題に入ろうか、勝てるんだよね？一夏」

「あ「勝機は有るに決まっているだろう、零」」

「えーっと「そうですね、いくらあの方が強いとはいえ、わたくし達が一夏さんのコーチをしたのです、負けるわけがありませんわ！」

」

「お前ら台詞かぶせすぎだろ！俺にも喋らせるよ！？」

えー？ナンノコトカナー？っていうか意外にコンビネーションいいな、この二人。

「それにしてもいいよねえ…雪片野太刀と雪片小太刀だけ？追加装備の開発速過ぎじゃない？」

そう、一夏に、というよりは白式に追加武装が送られてきたのだ、原作では送られて来なかったのに。

やっぱり僕の所為でこうなったんだろうか…いや、自意識過剰過ぎ…かな、それ以外となると…やっぱりあの白坏さんって人も僕と同類ってことなのかな？そんな感じには見えなかったけど。

まあともかく、いい方に働いてるんだし、別段気になることでもないか。

「送られて来たのはいいんだけど…二刀流とかやったことねえし…」

「そのために私が昨日少しでも慣れるように二刀流の稽古をしたのだろう、忘れたのか？」

「ああ、ありがとな、箒」

イケメンスマイル発動…！？くおおここまで眩しいものか…！スタ

ングレネードもかくやというべき威力！

篝ちゃんはそのスマイルを見て赤面して「う！？う、うむ、うむ、分かってるなら…よい」とか言ってるし…こっちも眩しいぜい。

む？あーセシリアが超不機嫌そう……爆発しなけりゃいいけども…、とか考えてるうちに。

『両者、準備を開始してください』

アナウンスが入った、そろそろらしいね、さて、どう乱入するか…。

side 一夏

なんとか訓練で一瞬で展開できるようになった白式を展開、それと同時にP I C（？）による浮遊感が体を覆い、足や腕、とにかく体の全身に純白の装甲が出現する。

「さて、行くとしますかね」

ふわり、とP I Cによつて浮き上がり、アリーナに向かつてスラストーを噴かせる。

俺の視線の先には鈴とそのI S『シェンロン甲龍』が試合開始の時を静かに待っていた。全席満員御礼だとかリアルタイム鑑賞だとかはぶつちやけどうでもいい。

それにしても、ブルーティーズといい零式といい第三世代型は非アシロック・ユニット固定浮遊武装になんかの信念でも持っているのか？

肩に横に浮いた刺付き装甲がやたらと目につく。スバイクアーマーやっぱり腕に付けて殴ってくるんだろうか？ すごい痛そうだな。

（しかし名前の読みが某7つの玉集めたら願いを叶えてくれる奴みたいだな… ややこしいし「こうりゅう」って呼ぼう、そうしよう）

『それでは両者、規程の位置まで移動してください』

アナウンスを聞いて鈴との距離を5 mに縮める。

『一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ？』

「言われなくても後で謝るよ、それに、レベルを下げるってたって雀の涙くらいなんだろ？」

『……ふうん、分かったつもり？』

「さあな」

ぎりっとお互いを睨み合う、手は抜かねえ、全力でぶつかって、そして勝つ。鈴もそうだろう、と言うより、そういう奴だ。

「『言葉は不要か……！』」

『それでは両者、試合を開始してください』

ブザーが鳴り響くとともに、俺と鈴は動いた。

俺はスラスターを完全開放して瞬時に後退、助走を付けるために距離をとって、姿勢を前傾させ、右手に雪片野太刀を瞬時に展開、スビードを乗せて叩ききるといふ作業を仕掛ける。鈴は応じるようにバカでかい青龍刀を両端に付けたような、いわゆる両剣とかいうやつでスビードの乗った俺の重い一撃を楽々耐えた。

『やるじゃない！一夏！』

ギリギリと金属同士がぶつかり合う耳障りな音が響く。

「ありがと……よおっ！」

鏢迫り合いの状態から思い切り力を込めて鈴を弾き飛ばす、瞬時に野太刀を格納し、右手に雪片式型を、左手に雪片小太刀を展開して、もう一度鈴との距離を詰める。

鈴はすぐさま反応して両端に青龍刀、のような物がついた近接ブレードを構え直して俺の連撃を受け止める。

鈴は器用にバカでかいブレードを振り回し、俺はくるくると演舞のような剣戟を放つ、何？カッコつけてんのか？違いよ、二刀流だと隙が無いようにするにはこれが一番なんだよ、以上零の受け売り。でも事実その場で真正面みたままやるより楽なんだよな、たまに鈴の剣戟もするする躲せるし。

しかしまあ代表候補生として経験を積んできた鈴と、つい昨日ほどにこれをやり始めた俺との経験値の差は、歴然と言う奴で……。

「くあつ、キッツイ！」

競り負ける、ある種当然だ。俺は一度距離をとって息を整えようとする、が。

『……………甘いつ！』

かこん、とやや軽めの音を響かせて鈴の両サイドにある非固定浮遊^{アンロック・ユニット}武装が開き、その中心が光る。

「……………つ！つく、ああつ！？」

何とか反応して機体を横にずらしたが間に合わなかったようだ、左腕が何かに殴り飛ばされたような衝撃を受け、体ごと持っていかれる。小太刀は離しそうになったもののギリギリ持っていた。

『今のはジャブよ？』

ニヤリと不敵に笑う鈴に呼応するように肩アーマーの中心が再度光りだした。

「くつ……………！」

「何だ、アレは……？」

ぼそりとリアルタイムモニタを心配そうに見ていた篤ちゃんがそう
呟く。

「『衝撃砲』……ですわね、空間自体を圧縮し砲身を生成、余剰で生
じる衝撃で圧縮された空間自体を砲弾として射ち出す……わたくし
のブルーティアーズと同じ、第三世代型の兵器ですわ」

第三世代型……そういえば僕の機体は何が第三世代型なんだろうか？
前に白坏さんに聞いてみたけど今は教えるべき時ではない、とか言
われたし。

好奇心は猫を殺すっていうけど、自分の機体を知りたいってのは不
思議じゃないと思うんだけどな……まあ今はいいか。

モニタに視線を戻すと、徐々に徐々にと追い詰められていく一夏の
姿が映し出されている。

そろそろ時間かな、計算上ではここで出て行くのがベストだ。

「……先生、ちょっとトイレに行ってもいいですか？」

「手短にな」

大丈夫だ、問題ない、この日のためにシステムクラックの勉強はし
てあるからね。

僕は先生からの許可を得て、ピットから出て行った。

「へえ…よくかわすじゃない、コレは砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

そういつて鈴は目だけで刺付きの浮遊武装を指し示す。

不気味ななりをしたソレは砲身が見えず、非常に回避しづらい、さらに、砲身の射角が制限無しらしく真後ろだろうが真上だろうが問題なく追尾できる代物らしい。

鈴の技術の高さも相まって非常に厄介な武装だ。

幸い、野太刀の防御力や白式自体の機動力が高く、致命傷には至ってはいないが、手を出せないのもまた事実。ちなみに野太刀は別名斬馬刀とも呼ばれている、実を言うとテレビでよくみる日本刀を一回り大きくした感じなのだが、雪片野太刀は某アニメのトリ頭の相棒のように重厚な大剣だ。

（ハイパーセンサーで空間の歪みや大気の流れを探らせちゃいるけど…遅い、撃たれた後で分かってもどうしようもない、……特攻を仕掛けるか…？）

ぎりっ、と雪片を握りしめる。

「バリア無効化攻撃？」

聞き返すと、千冬姉は首肯した。

セシリアとの戦いで勝利した時、シールドエネルギーが減っているのに気づいて、コレは何なんだ？と零に聞いたところ、千冬さんに聞くのが一番じゃない？と言われた次第だ。

「雪片の特殊能力が、そのバリア無効化攻撃だ。相手のバリア残量を見無視し、それを切り裂き本体に直接ダメージを与えられる。そうするとどうなるんだ？篠ノ之」

「は、はい、ISの『絶対防御』が発動します！」

「まあ及第点か。『絶対防御』が発動することによって敵のシールドエネルギーを大幅に削ることが出来る。私がかつて世界最強と呼ばれた要因もそれが最も大きいだろう」

さらりと言うが、世界最強、というのは凄いことだ。なんで世界最強だって言い張れるん？つてのは三年に一度の『モンドグロツソ』という大会、この第一回においての優勝者が千冬姉だ、世界最強と呼ばれる姉を持つのは大分苦労する、結構弄られたものだが、小学生のころは零曰く阿呆共を零が丸み込んでくれたりしていたし、中学校になると少し和らいだというのもあるからまだマシなのだろうが。

「雪片が特殊能力を行使するためには膨大なエネルギーが必要となる、それこそ、普通のエネルギーでは一瞬で底が尽きてしまうほどにな」

「あー……」

何となく合点がいった、つまり――

「自分のシールドエネルギーを攻撃に転化している…？」

「ああ、まあ有り体に言えば欠陥機だな、ISとしてはド三流だ」

「そ、そこまで言わなくても…」

「まあ本来拡張領域のために開いているはずの処理まで使って雪片を振るっている、威力は全兵器中でもトップクラスだろう」

「そっぴゃ千冬姉のISも雪片しか持ってなかったな…、いやー本当に自分の姉ながら桁外れの化け物だわ…」。

「バシンッ！」

「無礼な事を考えたろう？」

「申し訳ございません…」

「こうして武力に屈するのか、なんということでしょう！」

「ふん…そもそもお前のような素人が射撃戦闘など出きるものか、反動制御、弾道予測から距離の取り方、一零停止e t c e t c ……まだまだあるぞ出きるのか？お前に」

「う…でも零はやってる…ますよ？」

「……あいつは少々特殊だ、元々向いているのもあるのだろうが」

「…？珍しい、千冬姉が言いよどむなんて……やっぱり、零、何か有

ったのか…？

「ま、一つの事を極める方が向いてるさ、何せ、私の弟だ」

それからの訓練はほとんどを移動技能の強化などに費やした、回避技能を高めるために零やセシリアに毎日一時間ほど絞られたが。あとは…これは自信が有る。

「絶対に、負けないぜ…！」

理屈じゃない、心で勝てば、絶対に勝てる。

「鈴！」

『な、何よ！』

「本気で行くからな…！」

気概に押されたのか鈴は少しだけタジタジとなる。

『な、なによ、そんなことあたりまえでしょ…。とつ、とにかく！
見せてあげるわ！格の違いって奴を…ね…！』

鈴はくるりとバトンのように獲物を回し構え直す、俺は衝撃砲が猛威を振るう前に距離を詰めるために加速体勢に入った。

この一週間で身につけた技術、イグニッション・ブースト『瞬時加速』は出し所さえ間違わなければ代表候補生クラスと渡り合える、ちなみに零はいつの間にか身につけていたが気にしない。

ぐおん、そんな表現がふさわしい加速がISを纏った俺の体に伝わる、急激なGはISの保護機能が働き、俺の意識を失わせるには至らない。

「はあああああつ……！！」

この奇襲は一度しか使えないだろう、だが、否、だからこそ、零落白夜を同時に放つ、外せば、負けは必死だろう、危険な賭けだがやるしか道は無い。

しかし

ズドオオオオオンッ！！

膨大なエネルギー波を放つ光条がアリーナの中心を貫いていた、鈴の衝撃砲などではない、威力が違いすぎる。

光条が落ち着くと、凄い量の煙がその場所からもうもくと立ちこめる、どうやら先ほどのアレは遮断シールドを貫通してきたらしい、空を見ると、そこだけがぽっかりと口を開いていた。

「何が…？」

『一夏！試合中止よ！すぐピットに戻りなさい！…え？零…はあ！

？セキュリティロックが！？どういうことよ！』

なにかあったのだろうか、鈴が何かを怒鳴っている。

『織斑、聞こえるか？鳳にはなぜか零が連絡を入れていたようだが所属不明のISが……よ……んだ……これ……！』

ザザザッつと通信モニタに砂嵐が入る、どうやらジャミングされているようだ。

――――ステージ中央、熱源を確認、所属不明機と断定、口ツクされています

「……！」

バシユウツッ！！凄まじいエネルギーの奔流が先ほどまで俺の居た空間を駆け抜けた。

反射的にステージの中央を見る。

――――そこにいたのは赤い、悪魔。

脳裏に閃いたのは、悪意、戦慄、そしておぞましいほどの、狂喜。

「――――ターゲットを、確認……」

排除、
開始…
L

8、 弄るのは楽しいよね、皮肉な事に（後書き）

今回の戦闘シーン幾分か楽しかった、やっぱり元は有った方がいいっすね。

そしてバリア無効化攻撃がババア無効化攻撃に見えた悲劇、どこまで汚染されてるんだ俺は

ではでは、感想、指摘等お待ちしております

9、 覚悟（前書き）

作者ね、排除くんと戦ったこと無いんですよ

NXすら持っていないノ（＾０＾）ノナンテコッタイ

9、 覚悟

side 一夏

突然の闖入者は明らかな敵意をむき出しにしてこちらを緑のラインアイで睨んでいる。

俺はチラリと観客席の方を見て、遮断シールドが降りていることを確認して雪片小太刀を二本展開して構える。

「何やってるのよ！一夏！とつと逃げなさい！」

「鈴」

「な、なによ……！」

「俺らが引けばアイツは観客席の人たちを狙ってくるぞ」

「……！」

ハイパーセンサーで拡大された視覚が鈴のはつとしたような顔を捉えた、その顔が徐々に覚悟で引き締まっていく。

「分かったわ、でも、無理だけはするんじゃないわよ！」

「……やってやるぜ……！」

スラスターを全力で噴かして急速接近、赤い所属不明のISの懐に入り込む。

「はぁあっ！」

俺は思いっきり振りかぶった小太刀を装甲に突き刺すために右手を突き出す、案の定その一撃を最小限の動きで躲した敵ISは肩のアタッチメントが何かで接続されたバカでかい右腕を俺に向けて振るった。

俺はそれを見切ってスラスターを前方に噴かし後退、受け流すように左手の小太刀で傷のラインを敵ISのバカでかい右手に刻印して、一撃で離脱する。

一旦距離をとって敵の特徴を捉えていく。

まず目を引くのは、赤いカラーリングをされたその機体自体、それはISにとっては重りにしかない全身装甲フルスキンタイプで、緑に光るラインがアクセントとして煌々と光っている。

そして、でかいレーザー砲が直接腕に付いている、先ほどの大出力のエネルギービームもアレによる仕業だろう。大きく出張った肩にはアタッチメントが付いていて、そこからでかい腕が両サイドに垂れている。

胴体は前よりも後ろに大きく出っ張っていて、チラリと背中に装着された大きな銃が見える。

ISとしても非常に大きく、鼻屑目に見ても3mは軽くある。

「貴様、何者だ」

「排除、排除」

返答は…無し、か。まあ当然だろう、答えてたら苦労しない…いや、苦労はするか、どっちにしても。

『り斑…ん！…さ…！…れえ…？…りませ…！』

ノイズ混じりに微妙に山田先生の声が聞こえてくる、制止に入ろうとしたのだろうが、どちらにしてもこちらは引けない状況だ。 - -
- - - - と。

『呼ばれて飛び出て〜！じゃじゃじゃ〜ん！…！』

なんだろう、嫌な予感しかない。あれ？これプライベートチャネルか？…え？どこから？

『な、なによ？これ、一夏？』

『んなわけあるか！…この声は多分…』

『行くよあつ！あたしのレーヴァティンを見るあつ！…！』

ドガアアアンツ…！！と音がして遮断シールドのシールドエネルギーを吹き飛ばした弾丸が、所属不明ISを攫って爆発した。風穴の開いたシールドの中から赤と白でカラーリングされた機体が目も止まらないスピードで敵ISに攻撃を仕掛ける。

そのISは赤く光るブレードを両手に展開して十二連撃ほど敵の胴体に食い込ませた。…えげつねえ、シールドエネルギーなんて有ってないような攻撃してるぞ。

『やあ！みんなのアイドル、橘鈴里！^{たぢりはな}只今参上！』

そついつてド鬼畜IS操縦者鈴里さんが俺たちの目の前に降り立つ

た。

「誰も呼んでませんし、アイドルでも無いですけどね…」

「排除…排除…排除…排除」

side ピット

「ひゃああああああ！？な、なんですか！これええええ！？」

ピット内でいままで必死に連絡をとっていた山田先生が突然の振動に慌てふためく。

なんとか繋がったモニタを千冬が覗き込むと、そこには大穴の開いた遮断シールドと、いままで居なかった赤と白のカラーリングのISが威勢良さそうに赤い剣を振り回しているのが写っていた。

「……また…橘か…！」

がつくりと千冬が肩を落として頭痛がするのか凄い勢いでこめかみに手をぐりぐりさせていた。

セシリアは呆気にとられたような表情でモニタを凝視して、箒はその顔に見覚えがあったためか「ああ、またか」みたいな表情でモニタを見て、ため息を吐いた。

千冬は心を落ちつかせるためかコーヒーに砂糖を入れるために塩の

瓶に手を伸ばし、コーヒーに入れ、かき混ぜている。

「あ、あの、織斑先生、それ…塩です…」

くーるくー…ぴたり

「……なぜここに塩が有るんだ」

「わ、わかりません、けど、大きく塩と書いてありましたが……」

「……」

とても嫌な空気がピット内に漂う。

「え、ええと、取り敢えず連絡を……」

山田先生はスルースキルを発動させようとする、が。

「山田くん、コーヒーをどうぞ」

「え、ええっ？」

哀れ塩コーヒーの刑に処されるのであった。

「あーえー…んんっ！先生！わたくしにISの使用許可を！すぐに
出撃できますわ！」

「そうしたい所だが、これを見る。ああ、山田先生、熱いので一気に飲むといいですよ」

鬼畜である。

ともかく、千冬はブック型の端末の画面を数回叩きアリーナのステータスチェックの画面を開いた。

「遮断シールドがレベル4に設定…？しかも扉がすべてロックされて…ここもジャミング！？…あのISの仕業ですよ！？」

「そのようだ、まあ、橘は最大出力の遮断シールドをぶち抜いたようだかな」

「ええと、アレは見たところフランスのガルド型に見えますが…」

「ああ、あれでもフランスの代表だ、頭が痛くなるな」

「は、はあ…」

「まあ、話題を変えよう、今年度の精鋭がシステムクラックをしている、まあ独自に動いて直接ピットを開けようとしている馬鹿者もいるようだ、どちらにせよ突破できれば部隊を向かわせる」

「零さん…ですか…？」

「そのようだ、姉弟共々馬鹿のようだ、弟の方が少し利口だが」

「…結局、待つことしかできませんのね…」

「何、心配せんでもお前は突入隊には入れないから安心しろ」

「な………！？」

セシリアは一瞬だけ反抗しようとしたがギリギリと歯ぎしりをする
千冬を見て、諦めた。

そしてきよろきよろともう一人の女子を探す。

「あら？篠ノ之さんが……」

千冬の視線は一層鋭くなってモニタを捉えていたが、それに気づく
者は今ピット内にはどこにも居なかった。

side 零

「……………第一ブロック突破…！よし、このまま…！」

端的に言えば調子がいい、その一言に限る。いやだつてさ、仮にも
重要施設のセキュリティシステムのファイアウォールだよ？調子
がいいと言わず…あ、トラップだ。

「……………零…くん…？」

「っ…！誰だ？」

まさに青天の霹靂というべきか、ハッキング…もとい作業をしていた僕は突然声をかけられた方向にぱつと振り返る、その人物は僕の声に驚いたのかびくつと一瞬飛び上がったおびえた目で僕を見つめていた。??????? 簪さんだ。

「あ、ああ、ご、ごめんね、どうしたの？」

…うなー！なんでこんな態度になっちゃうかな！突然とはいえもうちょっとシャキツとしろよ！僕！

「え、ええっと……………」

言葉を探しているようだ、目を虚空に漂わせてる、ふわふわたーいむ。

そして僕は手を休めずファイアウォール突破、かたかたたーいむ。うん、意味ワカンネ。

「て、手伝つても…………いい…？」

「大歓迎！」

もう猫の手でも杓子の表面でも大歓迎！な状況なのだ、手伝つてくれるというのなら拒む理由は一片も無い。

……あれ、そういえば簪さん、なんでここに？と聞こうとすると。

真剣な表情でシステムクラックを試みている簪さんが横に居て、僕は少しだけその表情に……………見とれてる場合じゃなかった…なにしてんだろ、僕。

side 一夏

「くっ……………！」

「排除、排除、排除」

一撃必殺の間合い、しかし、赤い機体はひらりとかわして飛翔していく。

これで四度目、そろそろ当たってほしい。シールドエネルギーの残量も残り少ないし。

『一夏の馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ！』

『私と変わろうか？チャンス作るのも楽じゃないんだよ？』

援護射撃を加えて先程から赤い機体の隙を作っていた二人に罵倒される、これで四度目、いやそろそろ心が折れそうだ。

てか、スラスターの推力高すぎる、なんで一瞬で視界の外に消えるんだ、おかしいだろう。おかげで普通なら回避なんか出来ない攻撃をあっさりかわして見せてる。驚きを過ぎて呆れるぜ、全く。

シールドエネルギー残量は約60、無効化攻撃を出せるのはよくてあと一回ってところか？

「排除、排除」

「うお、あぶね！」

『何やってんのよ！一夏！』

赤い機体、「…なんだか飽きる名前だし、まあUNKNOWNとでも呼ぶか」「いや長いな。」「じゃ排除君でいいだろ」「それでいこうか」脳内会議終了、排除君は攻撃パターンがあるのか、牽制攻撃を行いながら移動。

こちらが本格的な攻撃を仕掛けると圧倒的な機動力で回避、反撃に転じている。

攻撃自体は無茶苦茶ではないのだが、何よりも狙いが正確なため、非常に戦いづらい状況だ。

『ああもう！面倒臭いわね、コイツ！』

「排除、排除」

鈴が焦れたように衝撃砲を展開して砲撃を行うが、まるで無駄だと言わんばかりに剛腕でたたき落とす。これで七回目、如何したもんかな…。

『それそれ！当たっちゃうよー！』

「排除、排除、排除」

唯一有効な攻撃手段に見えるのが、この人の銃撃、っていうか楽しくばらまいてるようにしか見えないのに命中するあたりが凄いやな…。

ともあれ、二人のおかげで俺は排除君の射程距離から外れる、分かった事と言えば、でかいほうの腕がパルスガンってことくらいだ、勝機はいまいちつかめない。

「鈴、鈴里さん、エネルギー残量は？」

『180ってとこね』

『んー370…あの侵入者意外と強いねえ』

これは攻撃分を考えないエネルギー、つまり、食らっても支障の出ないエネルギーだ。随分削られている方ではあるが、まだマシだろう。俺は60…、これは酷い。

ってかどう考えても『雪片式型』の仕様がきつい、………どうにかしないとな…後で。

『結構きついわね…今の火力でアイツのシールドを突破して機能停止させるのはかなり厳しいんじゃない？確率的には一桁台？』
ダウ

「0じゃなければいいだろ？」

『博打打ちだねえ…まあ、アリじゃないか？貴様』

『なんで声まで変わってるの！？それにしても、あんたってホント良くわかんないわね、健康第一かと思ったらこんな感じで…、根本的に宝くじ買うタイプよね』

「うつせーな…」

ちなみに宝くじは買わない、好きじゃないし賭け事が弱いもんでな。ああ、五反田にいくらジューズを奢ったのか…何もかも皆、懐かしい…。年金なんてマヤカシという物だ。貯蓄に限る。

『で？どうすんのよ？』

「逃げたきや逃げろよ、無理強いはしないぜ」

『なっ！？馬鹿にしないでくれる！？あたしはこれでも代表候補生なんだからね！尻尾を巻いて逃げるなんてできるわけないでしょ！』

『ふむ…代表候補生… - - - - - おつと』

「排除、排除、排除」

危なげなくビームを回避する鈴里さん、ともかく、代表候補生の基準はプライドか何かなのか？セシリアも同じような事いつてたしな。

「へえ…じゃあまあ、背中くらいは守ってやるよ、だから、頼んだぜ？」

『へー？え、あ、うん…ありが - - - - - 』

「排除、排除」

『来るよ！鈴ちゃん！』

ビームが鈴を霞めて遮断シールドに突き刺さる、まずいまずい、今は戦闘中だった。集中力を――

「なあ…鈴、鈴里さん」

『何？』

『んー？』

「なんかアイツ、おかしくね？」

『はあ？なにそれ』

『ああ……なんかロボットみたいだね、こっちの様子見て、最適な動きを探ってくる』

『へ？』

「…やっぱり、そうですか。アイツ、人が乗ってんのかな？」

『何言ってるの？一夏、ISは人が乗らないと動かないわよ？』

『コンピューターで制御された完璧な動き…まあ…らしくは有るけど…流石に無人機ってのは…』

そう言って三人とも奴を凝視する。排除君は牽制射とはいえ強力な

ビームを放つてくるため随時動いたまま。

教科書で読んだ限り、ISが無人で動くなど本来はありえない、そんなことは分かっている、だが――――。

「仮に…無人機ならば……」

『どうだつてのよ？無人機なら勝てるわけでもないでしょ？』

「いや、無人機なら、全力で情け容赦なくアイツを壊せる（……。……）。でしよう？鈴里さん」

『えー…全力はだるいなあ……』

「なんか奢りますから」

『よし北産業！たっかいの頼むね！』

ちよろい、しかし金にかかる。なんということでしょう！なんということでしょう！大事なことから（ry
てかあれだけやっという手を抜いてたのか、何となく分かってたけどまさか本当とは。

『結局他力本願？だらしないわね……』

「しゃあないだろ、俺が全力出してもたかが知れてる、より確実にだ」

『フウーハハハー！堕ちろカトンボ！！』

「排除、排除、排除、排除、排除」

「……よし、鈴、アイツに隙ができたなら全力で衝撃砲を撃ってくれ」
『オーケー!』

怒涛のコンボで動きを止めていく鈴里さん、エネルギー弾の光りがまぶし――――

『――夏あつ!』

のわあ!なんだ!? 箒!? ハウリングしてんぞおい!

「な、何してんだ! お前!」

中継室の方を見ると審判とナレーターが伸びている、……ご愁傷さまです。あの様子じゃ当分伸びたままだな、かわいそうに。

『男なら……! 男なら、その暗いの敵に勝てなくてなんとする!』

ハウリングが巻き起こる、凄い音量だ。ハイパーセンサーで箒の様子を見るとはあはあと肩で息をしていた、当然だ。表情は、怒っているような……

「排除、排除、排除」

がしより、と今まで目立たなかった背中の砲身が開放される、鈴里さんが砲火を集中させているが、完全無視の状態で排除君は箒のいる中継室に狙いをつけた。

「――――ッ!! 箒イ! くそ、鈴! やってくれ!」

『わ、わかったわ!』

鈴は両腕をさげ、肩を押し出す状態で衝撃砲を展開、最大出力で放つために補佐用らしい力翼が展開された。
俺はそれを確認すると射線に飛び出す。

『バツ、馬鹿!なにやってんのよ!?!』

「撃てえええっ!!!」

『……!どうなっても、知らないんだからねっ!!!』

高エネルギーの反応を背中に感じ、乗るようにして『イグニッション・ブースト 瞬時加速』を起動。

今さらとなるが、『イグニッション・ブースト 瞬時加速』の原理は、後部スラスタ翼からエネルギーを放出し、それを一度内部に取り込み圧縮、放出、その時の慣性エネルギーを利用して加速する。一旦放出するエネルギーの出所はどうでもいい、つまり、外側からでも良いということ。
速度はエネルギーの使用料に比例する。スラスタ翼が後ろから来るエネルギーを吸収するのを感じて、加速に入る。

「ぶった斬れよおおおおおっ!!!!!」

右手に展開した雪片野太刀が雄々しい光を放ち、ばくりと口を開く、そこから、膨大なエネルギーが吹き出した。

- - - - - 【零落白夜】エネルギー変換率、90:95%:
ISに触れた時の、あの感覚、そして、一体感。世界全体を、把握できるかのようなクリアな五感と、集中力が何十倍にも跳ね上がるような意識。そして、全身から沸き立つような、力。

（俺は！すべてを！守って見せる！！）

轟音とともに振り抜かれたその剣は、排除君の右腕を肩ごと切り落とした。

しかし、寸分間に合わず、でかい砲塔から大量のグレネードランチャーが速射されたのを確認する。

『させはしない！守れ！父神の楯つ！！』
クロノス・レジスト

大量のグレネードは、しかし、不可視の楯によって無に帰される。

「……おせーんだよ…零…あと…- - - - 狙いは？」

『完璧ですわ！！』

よく通る声が、鼓膜を叩いた。うるさい時もあるが、何よりも頼もしい、仲間の声。

大出力のレーザービームが観客席から飛来し、排除君の胴体を貫く。そう、シールドエネルギーは既に尽きている。

「排……除……はい……」

スパークが赤い機体から迸り、緑のラインアイが点滅、やがて、停止した。

「……悪いな、俺たちは、前に進まなきゃならないんだ」

完全に停止した機体に、つぶやくように話しかける。

『まだ、終わってはいない…！』

「！？」

がしより、と左腕が余力を振るい持ち上がり、チャージを開始する。限界まで来たのか、左腕がビキビキと嫌な音を立てるが、チャージは止まらない、俺は野太刀を振り上げ、振り下ろす。白い閃光が、俺を飲み込んだ。

side 零

『誰であろうと、私を越えることなど不可能だ……』

な、ナインボール…？なぜ…？

その場にいた全員が硬直していた、理由は簡単、赤い機体が、変形したから。

普通はありえないことの筈だ、あのVTシステム以外じゃそんなの聞いたことが無い。

しかし、そいつは装甲を一度ドロドロに溶けたような状態になり、再構成された。意味が分からない。

呆氣にとられているような僕等を一瞥すると、そいつは興味を無くしたかのように上を向き、飛んで行ってしまった。

残されたのは荒れはてたアリーナと、意識不明の状態で投げ出されている一夏だけ。

そして――――

「れ、零……？ 零……なの……？」

最大級のトラブルが、そこに有った。

9、 覚悟（後書き）

カオス、ただその一言に尽きる。そして簪さん放置だよおい、どうすんのこれ

零「…いや、疲れてんのは分かるけど…もうちょっと収まりよくできなかつたの？」

いやもう限界、徹夜とかマジ勘弁、寝させておくれよ…ばたっ

白坏「…作者は死んだようだ、それでは、感想、指摘、などお待ちしている」

零「ちなみに後書きは本編不干涉らしいよ」白坏「ふむ…関係ないな…」

カットシーン、およびエピソード、後書きはキャラ説明…他（前書き）

ふ、都合上、カットシーンはあっさりやらせていただく、前半エピソード、後半カットシーン、後書きが新オリキャラ、設定の説明だ、こんなところか。

楽しく書いたつもりだ、読むか？

カットシーン、およびエピソード、後書きはキャラ説明…他

「……………」

「……………」

何だこの空気…居辛いことこの上ないわ。

実の家族との再会ってこんなに息苦しいもんだっけ…？

「ね、ねえ……………」

「何、かな？…姉さん」

「あ、ううん……………」

「あ…そ、そっか」

「……………」

「……………」

…これは酷い…………更識姉妹にとにかく言ってる場合じゃないくらいの
の気まずさだよ。

なにか…………なにか話題を…あ、そうだ。

「姉さん…さ」

「え？あ、ああ、うん、なに？」

「えと…元気…だった？」

「う、うん、零、は？」

「うん、僕も」

「そ、そう」

「…」

「…」

なんていうか、ノリが中学生のカップルっぽい。いや知らないけどさ。

しばらくそうして、なんとか会話を保たせ続ける、しばらくすると緊張がややほぐれたのか姉さんがいつもの落ち着いた表情で僕を見て、こういった。

「なんか…零、変わったね」

「へっ？」

僕は素っ頓狂な声をだして聞き返す、…変わったつもりは無いんだけどな…？

「そんなに変わったかな？」

「うん、なんか、どこことなく、世界の全部を見下してた気がするから、さ、前まで」

「うえっ、姉さん、僕がそんな風に見えてたの!？」

非常に遺憾で心外だ、いや、まあ転生してた事も有って浮かれてたんだろうけどさ、そっか、見ようによつてはそんな風に見えてたのか…。どおりで箒ちゃんに勘ぐられるわけだ…。

「そっか…シヨックだよ…僕は」

「あはは、でも、いいんじゃないかな？本質は全然変わってないみたいだし」

「あは…よく言われる…っていうか橘姓名乗ってるみたいけど、どなた？」

「うん？ああ、孤児院にいたとき私を気に入ってくれたおじさんがいてね？その人奥さんはとる気は無かったらしいんだけど子供がどうしても欲しかったらしくてさ、別にロリコンとかじゃないよ？普通にいいおじさん、その人の娘になったの。IS学園に入れたのもその人のおかげ」

「そっか…良かった」

「うん…それで…零はさ、今まで一体何処にいたの？」

姉さんは今まで見たことの無いような表情になり、僕を真剣に見つめてくる。

「…ごめん、姉さんでも、それは言えない」

そう、言えない、絶対に。絶対に。

「そ……か……気が向いたら、話して……ね？私は、零の、家族だから」
「……………ごめん」

その弱々しい笑みに、僕の頭の奥では、得体のしれない痛みが、チクリとさしていた。

s i d e
一 夏

「う……ああ……………？」

全身に痛みを感じ、安らかな眠りから叩き起こされた、体がうまく動かねえ…。

ともかく状況を確認しよう、そうしよう。ぐるっと目と首だけを回して周囲を確認する。…うん保健室だな、そして俺が寝ている場所はベッド、ある種当然だろ。

「ああ……つつ……どう……なったんだ……？」

「……気がついたようだな」

しゃっとカーテンが開かれる、確認する前に行動、それがウチの姉のモットーだ。

「体に致命的な損傷はないが全身に軽い打撲がある、数日は地獄だろうが慣れる」

「はあ……あ、アイツはどうなったんだ？」

「お前に斬られてから装甲……というよりその姿自体を変えて離脱した、まあ、死なないだけ儲けものと思え」

千冬姉のこんな台詞始めて聞いた、アイツはよほど危険な存在だったんだろう。

「なににせよ、無事で何よりだ、家族に死なれては寝覚めが悪いしな」

そう告げる千冬姉の表情は、いつもよりもずっと柔らかかった、世界で、二人だけの家族、俺にしか見せない表情。

「千冬姉、心配かけて、ごめんな」

俺がそういうと、千冬姉は一瞬キョトンとして小さく笑う。

「心配などしてはいないさ、お前は簡単には死なない、何せ、私の弟だ」

ははっ変な信頼の置かれ方だな、でも、照れ隠しだろ、多分、気にしないことにしよう。

「私は仕事があるので戻る、お前も少し休んだら戻るといい」

それだけ言い残して、千冬姉はさっさと行ってしまった、さすがは俺の理想。仕事に忠実だ。…え？シスコン？気にするな。

この後一悶着有ったが、まあ作者が面白くないというのでカットだそうだ、作者仕事しろ。

何がハーレムだモテやがって畜生…。

作者のオーラがブラックでマッハになってる！？

カット集〜ダイジェスト風に〜

C 1 - 6 篇と一夏のからみ

「全国大会優勝だってな、おめでとっ」

「なぜ知ってる!？」

「新聞読んでt」

「何故新聞など読んでいる!？」

「それはねえだろ!！」

C 2 - 2 (前編) 部屋割りのアレ

「えつとですね、寮の部屋割りが決まりました、あとこれ、ISの規約書です、読んでおいてくださいね」

「「……」「(あまりの量の多さに絶望)」

「えつと……急に決めた所為で二人は同じ部屋ではないんですけど……と、とりあえず!行ってみてください!ねっ!」

「「はい……」「ドヨオン」

「ううっ……」

オチは無い

C 2 - 2 (後編) 割愛された諸々

「うわああああん零ーッ!！」

「うわっ!ドア壊さないでよ!ほう……ブッ!……!……!……!」

「一夏が！ブラジャー持って！付けるようになったのか？って！！」

「お、おぐふ…いってえ…てか…一夏…氏ね…！！」

第2

「私は…当主として…ただひたすら、強く有ろうとした…」

「何故…？」

「それが…貴族の勤め（ノブレスオブリージュ）だから、ですわ…
私は、長く続いたオルコット家を……」

「下らないな」

「ッ！馬鹿にしますの！？」

「自分を殺してまで、それを突き通さなくてはいけないというのが、
貴族の勤め（ノブレスオブリージュ）というのならクソ喰らえ、だ。
僕は君の幻想をぶち壊す…！」

「零……さん…」

「……（アルエー？）」

フラグ完全に建ってるんじゃない？これ。

第三

「ブラジャーみたいな感じですが、サポートこそすれ、害にはなりま

「せんよねっ！」

『「……」』

「ハッ、失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した」

「んんっ、山田先生続きを」

「失敗した（ry」

『「「せんせーい！！帰ってきてえええ！！！」』

第4

「orz」

「なにこのでっかい」

「使用申請を忘れて練習できなかったそうだ」

「一夏は馬鹿だなあ」

C 2 - 2 （後編） 一夏VSセシリア

「突然だが」

「あ、作者」

「これ本格的に書きたいからあとでいいか？」

「よし…」

カットシーン、およびエピソード、後書きはキャラ説明…他（後書き）

カット集は大体こんな感じでした。

そして……

「やあ！」

この人の説明つす。まず乗ってる機体

レーヴァテイン

フランスのガルド型、具体的に言うところフルメタルパニック！のレーヴァテインのISバージョン。

ガルド型はランスロットとかブラスタあたりのデザインを踏襲している。

高機動機体で、火力も高く、主に中〜至近接戦闘が想定されている。ちなみにラムダドライバは装備してない、つけたら無敵だから。この人の場合。

橘鈴里

基本的には竹尾ワツ太、もとい竹を割ったような性格、女性らしい繊細さも持ち合わせているのでときめいた研究員も多いとか。

零の姉だが、とある事情により離ればなれに。

一夏には零は死んだのだろうと語るが、諦めておらず、零を探すためフランスの代表にまで上り詰めた、基本的に表に出すことはない

が、重度のブラコン。

こんな感じです、人気…でるか？被ってたりするし、キャラが。

chapter 3 プロローグ（前書き）

新章突入っす

ところで10万PV突破したんですが…なにか…やった方がいいですよね、多分。

取り合えず候補考えときますね。次あたりアンケートやりたいと思います。

chapter 3 プロローグ

「ふむ…『H-1』が起動するか……」

『凄いね、いつくんは』

「……まあ…短期間でここまで白式の性能を引き出すのは賞賛に値するな」

『束さんとはとてもうれしいよ！あ、そついやしゅーちゃん、あの機体の技術ってどこで手に入れてきたの？』

「んー？なぜだか知らんが私の機体のコアの中に入っていた、適当に作っただけだから精度はそこまで高くないな、気になるか？」

『そうだね、興味が尽きないよ、っていうかAIの技術があそこまですべて高精度低いつて言っちゃうんだ…凄い世界だね…』

「ふむ…？まあいい、で、雇い主さま？」

『ふふん、当然だね、次の手は打つてあるよ』

「そうか…まあ、頑張れよ」ブツッ

『アルエー？手伝ってくれないのー？』

暗い室内に腑に落ち無い、とても言いたげな声が響くのだった。

s i d e 零

六月某日、日曜だというのに僕は生徒会室の一角にいた。
なんでつてのは聞かないで欲しい、一応生徒会に入ってることにな
ってるんだから。

「……………送りますね、先輩」

「ん……………虚ちゃん、おくつとくわ」

「はい、会長、……………本音、起きなさい」

「ううう……………」

「……………」

生徒会室内の空気は殺伐としていて正直居辛い、本音を言えば今す
ぐに逃げたい。

……………この書類の山から逃げきれるのであれば、だが。

どうしてこんな風になってるのかというと、IS学園は軍事学校みたいなものなんだが、人を殺傷できるものを扱っただけあって書類申請するものが非常に多い、まあ実を言うと申請するための書類が多すぎて金の無駄なので、ブックサイズの電子端末で事を済ませている。…違う、話がそれた。

…なにが言いたいかというと、教師陣にとっても負担がかかるという事だ。無論教師も黙っちゃいけない、非常時にはこうして生徒会や風紀委員とかに仕事回ってきちゃったりする。

報告書の作成とかいろんな方面に出さないといけないし、あの赤い所属不明ISの特徴の報告や、ぶっ壊れた備品の調達などなど、生徒会に回ってきた仕事もかなり多い。教師陣の仕事量に比べればまだ随分マシだけど。

普段はゆったりとしているこの生徒会室の雰囲気も無言の圧力で凄いことになってる。

のほほんさん超うなってるし。…いや仕事してよ!?

「……もうちょっと人手欲しいですよ、虚先輩」

「そうね…これは流石にきついわ」

「少数精鋭が今のトレンドなのよ、虚ちゃん、零くん」

「「トレンドって…」」

なんかカッコつけていられる範囲の仕事量じゃ無いと思うんですが、…言ってもダメか、この人の場合。

練習も簪さんのところへ行くのもこの分じゃ無理だな…この分じゃ、はあ………凄く…帰りたい…。

side 一夏

俺は久々のIS学園の外、すなわち親友五反田のウチに居た。

「で？」

「で？って何が？」

うお、油断させようとしても無駄だぞ、格ゲー中に何て奴だ。あ、やべ、奥義使いやがった。

「だーら女の園の話だよ、いーい思いしてんだろ？」

なんだまたその話か。

「してるわけねえだろ、ウーパールーパー状態だつっつの」

「例えが古いな、相変わらず」

うつせ、ちなみにこの五反田弾は中学に知り合って、なんとなく馬が合って友達になった、以上。

備考はまあまあいいやつ。あとなぜかバンダナ常備。

「てか嘔吐くなよ、メール見てるだけでも楽園じゃねえか、なんだそのヘヴン、招待状ねえのか？」

「お前次第じゃね？」

「乗れるわけねえだろ、馬鹿か」

まあそりやそうか、俺と零が例外なんだな……零が例外……。

「まあた下らねえこと考えてんのか……」

「何故分かった!？」

そして寒気が！後でボコられそうな予感がする！！

「まあ、アレだ」

「どれだ」

「鈴が転校してきてくれて助かったな、うん」

気分的な意味で、俺が何やらハマしたらしく最初は避けられまくってたけど、最近では話し相手が増えた感じがしている。

「あー…鈴、鈴か…」

ん？なんだこいつ、にやにやと苦笑の中間みたいな顔しやがって。
おかしな奴だ。

「よし、ジュース一本な」

「おわあ！？ふ、ふざけんな！！そんな賭けルールねえだろ！」

「いんだよ、お前の運を少しはわけろ」

「意味分からん！？」

ちなみに今俺と弾が対戦してるゲームは『IS/VIS（インフィニ
ット・ストラトスノヴァーストスカイ）』っていう内部数値いじっ
ただけでベストセラーをもぎ取った化け物ゲームだ。因みに諸事情
により千冬姉のデータは無い。

「やっぱ使うならイタリアのテンペスタだな、エグすぎる」

「たまには別キャラ使えよ、メールシュトロームとか」

「メールはネタバレ用だろ、常識的に考えて」

このソフトを開発したのは日本のゲーム会社なんだが、各国から『
わが国の代表がこんなに弱いわけが無い』とか言われてさっき言っ
た通り、内部数値をお国別バージョンにしたものを発売したのだ、
これまた売れてしまったのだった。おお、ボロイボロイ。

世界大会での一幕は特筆することもないな、うん。

「で、話は戻るんだが……」

なにかを聞こうとした弾の聲は爆音によってかき消された、…ドア
こわれてないよな？

「お兄！さっきからお昼できたっていつてんじゃん！！さっさと食
べにきなさ……いよ……？」

突然の闖入者オブザランは俺を見るとどんどん凍っていくように語尾
を細めていく……何があつたし。因みに蘭は弾の妹だ、有名私立学
校に通ってる、いわばエリート、某青い機体の人が脳裏をよぎった。

「久しぶり」

「い、いいいー夏さん！？」

何をそんなに驚く必要があるんだおい、それにしてもラフな格好だ
な…まあ、慣れたけど。いやだって男が比較的少数だから人の目気
にしないんだよ、女子連中が。

胸元開いた服着たりノーブラだったり、目のやり場にこまるつたら
…因みに零は基本休日でも本校舎に行ったりひきこもってたり訓
練場で練習してたりする、……なんでこんなに回避スキル高いんだ、
こっちなんかほぼ毎日気まずい思いしてるってのに。

「い、いやあのですね、き、来てたんですか？全寮制の学校に通っ
てると聞いてたんですが……？」

「ああ、今日は家の様子見るついでに寄ったんだよ」

因みにちよつと埃たかってただけで全然綺麗なもんだった、一月で
はそう変わらないもんだな。

…ってかなんで昔から蘭はこんな感じなんだろう、なんか妙にたど

たどしいよな、敬語じゃなくてもいいのに。

「蘭！ノックくらいしろよ、恥知らずだと思われ……」

うは、すげえ眼光、視線だけで弾がマ・オのように縮んでくぞ。相変わらずわかりやすく何よりだ。

「ねえ、なんで言わないの？馬鹿なの？」

「いやもうほんとすいません、勘弁してください、もう何もでないっす」

「そういう話じゃないよね？それとも何？言いたくないの？殺されたいの？」

カツアゲ現場見てるみたいだ、蘭の雰囲気氷の女王みたいですげえ怖い。

「あ、あの、よかつたら一夏さんもお昼どうぞ？まだ、ですよね？」

「あ、ああ、ありがたく頂くよ」

「いえ……」

ぱたん……

「……」

「……女って怖い」

このあと昼飯をこちになった、因みにその時蘭がIS適正Aだった、かわいく変身したりした。弾は自爆してたりしたな…自爆つつたら個人的にプリ。ーが…どうでもいいな。

「へえ…蘭が…ふーん…」

「ああ、で、入学したとき俺が面倒見ることになったんだよ」

「はあ、あんたね、いい加減女子と軽く約束事するの止めなさいよ、後ろから刺されても文句言えないわよ？」

なんだそりゃ、聞いたことねえぞ、そんな逸話。っていうかもっと突っかかると思ったんだけど、意外と落ち着いた感じで話すのな、蘭とかの話になると結構つつかかんのに。

「……………あ」

「あ…」

「あって何よ、あって、あ」

なんだこの絵面、三人揃いも揃って「あ」って、因みに順番は俺、
箒、鈴だ……今気づいたけど全員一文字だな。
いや俺は厳密には二文字か。

「……」

箒…いかにもなにかあったように黙るなよ…。因みに何があったか
って言うと、学年別トーナメントで優勝したら付き合ってほしいと
のことだ。あ、いい忘れたけど今俺の部屋は一人部屋だ、整理がつ
いたんで箒は移動することになったらしい。

「よ、よう！箒！」

「な、なんだ？一夏！」

「「……」」

いかな、会話が続かない、っていつかあの時からずっとこんな
感じだからな…。

「……なにしてんの…？」

もう一人の幼なじみの救いのような声に俺は振り向こうとする…ん
？鈴、なんでいやな物見たような顔してんだ？

「おお、れ…い…？」

「…ああ、うん、何」

す、凄い顔だな、おい。目の下に隈ベツトリ貼り付けて…しかも心

なしか老けてるように見えるぞ、何があったし。
よく見たらのほんさんが背中であつてゐるし…ほんとに何があつたんだ。

「君らと…姉さんの所為だよ…ふあ…眠い…」

「お、おう…？なんか…スマン」

「ああ…うん、そうだね…栄養は…摂らないとね…」

完璧に末期だろ、幻聴聞こえてないか？零。

勝手に隣に座つてうどんをすり出す零、背中にのほほんさんを背負つてゐるから非常にシニールだ。

「まあ…零は置いておいて、何かあつたの？アンタら」

「いや、そんなことはない！」

ありや…完璧被つた…早く反応しようとした結果がこれだよ。
まずいんじゃないか？

「何その反応…わざと？わざとなの？」

「んなわけないだろ…」

「…うまし…」

ガチ重症なんじゃないか？零。ともかく筈がなぜか気を害したよう
でぶいっと顔を逸らしてそのまま歩いて行つてしまった。

「あー……」

なんだろう、ふわっと揺れたポニーテールを見て、なぜか『止めなければいけないけど止められない気持ち』になった、すげえ変な気分だ。

「じゃ、あたしは部屋に帰るわ、その寝ばすけ見てたら最悪背負って行かなきゃなんないかもだし」

零を見ると麺をすすりながら目を閉じてた、もとい完璧に眠ってる。おい、なんで箸が進んでんだ、眠って無いのか？どっちなんだ。

「はあ…しかたねえな、あ、鈴、誘ってくれてありがとうさん」

「……たまにはアンタから誘いなさいよまったく…」

「へ？」

「…何でもないわ、じゃーね」

鈴も箒に習ってか長い栗色のツインテールをなびかせて食堂を出て行った。……俺もなんかなびくものつけるべきか？制服改造して裾長くしたり、最悪マントとか。

「…燕尾服……」

「似合わねえから止めとけ」

「僕は…アホ毛…？」

いや、たまになびいてつけどさ。…取り敢えず動けはするみたいだな、俺はそう判断して部屋に帰るのだった。

…明日は……朝から実習だったな、零…大丈夫か？

「やっぱりハヅキ社製のがいいんじゃない？」

「えー、ハヅキ社製はデザインだけでしょー」

「だがそれがいい」

「私は性能的にミューレイの方がいいと思うんだけど、特にスムーズモデルなんか、どうよ？」

「あー…あれ高くない？」

月曜の朝、気怠いのは現時点では俺だけのようだ、ん？お、零もだつたか、机に突っ伏してる。

ともかく女子は手にカタログを持ってあれやこれやと議論を交わしていた。

「あ、織斑くん、おはよー、突然だけどISスーツどこ社製？」

「ああ、えーっと、たしか特注品だな、男用のが無いからどっかのラボがイングリッド社製のストレートアームモデルを改造したんだ」と

「ふーん、そうなんだ、…イングリッド社製のはあるけどストレートアームモデルはない……ちえ」

「ところで零くんのは？」

「あ……ああ……うん……確か、倉持技研特殊技術開発課の開発したエクスペリメントモデルだって……」

昨日の疲れが継続してるのかヨボヨボとした口調で零はやたら面倒くさそうな単語の羅列を並べた。

「クラモチギケントクシユギジュツカイハツカ？」

凄いな、二人共一切噛まずに言ったぞ、やたら長いのに。代わりに凄いたどしかったのは気のせいだろう。

「…そういう部署だってさ、眠ってもいいかな…？」

「どうぞどうぞ」

まあともかく、ISスーツというのは文字通りIS展開時、体に着用する特殊なフィットスーツのことだ、このスーツなしでもISに乗っても別にいいんだが、反応速度が鈍るらしい。詳しくはよく覚えてない

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位に伝達、ISはそれを受け取って必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れていて、小口径の拳銃の弾丸程度なら完全に受け止められます、衝撃は消えませんのであしからず」

ふむふむ、つまりは防弾チョッキも兼ねてるのか、と、すらすら説明しながら現れた山田先生のほうに振り向く。

「やまちゃん詳しい！」

「一応先生ですので、……ってやまちゃんってなんですか!？」

「っていうか一応先生って…謙遜なんだろうけど、スルーしがたい言葉が……」

「山ぴー見直した!!」

スルーしたね、気にするのって俺だけ?なんか虚しいわ。山田先生子供っぽいからなのか?

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですから、予習してきてますよ、これくらいは。…って、や、山ぴー?」

ともあれ入学から大体二ヶ月、山田先生には現在8つほど渾名がついている、まあ、慕われているということかな?人徳のなせる業である。

そんな感じで生徒から渾名で弄られる先生、扱いやすいのかなんのか。ちなみにやまやはアウトらしい、某酒屋チェーンが(r y

「諸君、おはよう」

『お、おはようございます！（お姉様！）』

おい、かつこの奴、後で屋上な。それはさておき、教室内の空気が一斉に締まったものに変質する。一組担任、織斑千冬先生の登場だ。

（おい、零、起きろ）

（あ、ああ……もうちょっと寝ていたかった……）

わがままも言つてられない、この立てば鉄人、座れば要塞、歩く姿は突撃戦車の……言ったら確実に殺されるな。

昨日家に帰ったときに出したスーツをきちんと着てくれているようで、黒のタイトスカートと薄手のスーツを着た千冬姉の姿は威風堂々としている。ちなみに学年別が終わると生徒も衣替えらしい。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業なので各人気を引き締める。スーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れるなよ、忘れた場合は代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう、それもないものは……まあ、下着で構わんだろう」

普通構うだろ……女子のみならば別……いや構うけども、俺らがいる中でそれはマズい。

ちなみに学校指定の水着はスク水というやつで、学校指定のISスーツと見た目大した変わりはない、っていうか思わぬところで生き残ってたよな、五反田が興奮しそуд。零はあっさり「ほー……」と

いったただけに留まってたけど。
そういえば体操服もブルマとなぜか生き延びてるものも多い、なん
の趣味だ、これは。

「では、山田先生、HRを」

「は、はいっ」

連絡事項はそれだけのようで千冬姉は山田先生にバトンタッチ、ち
ようど眼鏡を拭いていたようで、慌てて掛け直すさまはまるで子犬
のようだ、かわいい。

「ええとですね、今日はなんと！転校生を紹介しちゃいます！！し
かも二名！！」

「ふーん…あ」

「え……」

『ええええええええええええええええっ！？』

いきなりの転校生紹介にクラス中がざわつく、零はものの見事に口
ーテンションだが。

っていうか噂好きの彼女達の情報網をかいくぐっていきなりの転校
生だ、驚くのも無理は無い。

そんなことはどうでもいいといわんばかりに教室のドアが開いて行
く。相変わらずの無機質で…。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきた二人を見て、皆食い入るように二人の内のもう一方を見る。

そりゃそうだろう、だってそいつは……………

……………男子だったのだから。

chapter 3 プロローグ（後書き）

やっと2巻突入かよ…

鈴里「随分かったよね、ところで私の出番は？」

あー…多分来ると思う、そして今更ながら第一主人公が脇役になつてゐるのに気づいた

白坏「遅すぎるだろ、原作やってるから多少は仕方ないけど…だいたい主人公にするつもりならなんで15才とかの設定にできなかった？」

えー…だって…なんていうか、首輪付きが学校で勉強してる姿が思いつかなかつたっていうか…。仕事柄年がら年中戦闘してるって感じだったからね、イメージが。

白坏「ひどいイメージだ…、まああながち間違っちゃいなかったけども」

だろ？そしてこれ以上はくどいんでまくとしよう。

白坏「だな」

鈴里「っていうか初対面なんだけど…」

気にするな、よくあるこつた。

白坏&鈴里「（こいつは…）」

じゃ、いつも通り、感想、指摘、評価、などなど、お待ちしてまーす

1、転校生はブロンドさん（前書き）

今回アンケートを悩みに悩んだ末何故か本編が長くなってしまった。
まったく、自分ながらわけがわからないよ。

1、転校生はブロンドさん

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました、この国では不慣れなことも多いですが、皆さんよろしく願います」

そう言つてペコリと頭を下げる転校生、シャルル・デュノアさん、当然皆は静まり返つてゐる。

一夏も信じられないものを見るような目で見つめてゐるしさ。自己紹介したんだし、定例の拍手くらいしてあげようよ。空気が重過ぎて正直やれる気はしないけどもさ。

「お、男……？」

眠い、あ、違つた、誰が言つたのか、超素朴な疑問が教室内に放たれた。

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方が居ると聞いて本国から転入を……」

しかし皆まで言わせないのが……クオリティ、彼の話は最後まで及ぶことは無かつた。

『きゃああああー……っ！』

爆音の如き心の叫びが教室内を満たした。耳が！耳がきーんて……痛い！

「男子！ふた…三人目の男子！！」

「しかもウチのクラス！！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった！！」

最初の人酷い！僕に何の恨みが！？ってまえと同じ人じゃないか！
いい加減にしろ！

そういえば、小学生のころ、友達に異性って感じじゃなくて妹とか
弟みたいな感じするって言われた事が有る。

これからはこれにすがって生きていこう。完璧に藁だけど気にしない。

「あー騒ぐな、静かにしろ」

面倒くさそうに千冬さんは女子生徒を一喝、影響力は流石なようで
一瞬で沈黙した。鶴の一声ってこういうことを言っただろう。

「皆さんお静かに、まだ自己紹介は終わってませんよー」

山田先生のほわほわした空気でもた弛緩してさっきよりも静かにだ
が、ざわざわとクラスがざわめく。

まあ、二人居るし、正直に言えばどっちもインパクトはかなり強い。
意識の隅に追いやってはいたけど忘れられる筈もないくらい
の存在感だから。

それにしても、二人共実際見るとアニメとかより綺麗だなあ、箒

やんや鈴ちゃんの時も思ってたけど、百聞は一見に如かず、ってやつだろうね。

まあさつきからスルーしてたけど、良いタイミングだ、ちょっと二人の容姿をまとめてみよう。

まずシャルル、人懐こそうな中性的な顔立ちで、瞳はアメジスト色、濃い金髪は首の後ろあたりで束ねられている。体つきは男子にしては細めで、足がスラッと長く、スタイルが良いと十二分に言えるスタイル。

にこやかな笑みになんら嫌味な所は無く、文句なしに『貴公子』と名乗れるだろう。…まあ、自分で言ってたら流石に痛々しいけども得意技はエンジェルスマイルのようで、そこかしこから荒い鼻息が聞こえてくる。すごく怖い。

次にまだ自己紹介をしていない銀髪の女子、こちらは赤い瞳で、その瞳を縁取る釣り上げられた目尻は刃を思わせる。長い髪は腰近くまで有って、輝かんばかりの銀髪は適当に切ったということを証明するように不揃いだ。

そして何より目を引くのは、医療用ではなく、ガチの黒眼帯、悪役の将校がつけてそうなアレ。

雰囲気はぱつと見軍人だ。刺々しい目に何かを射抜かれた女子も居るようで、先ほどから興奮したような鼻息がすこし後ろから聞こえてくる、すごく怖い。

「……………」

銀髪の女子は目を開いたままクラスを見回している。…ああもう、なんで鼻息がますます荒くなってくるのかな、いわゆる H E N T A I ばっかか。ここにいるのは才色兼備って女子たちなのに残念だ…

いろんな意味で。

少しすると千冬さんの方を向いて、仏頂面に複雑そうな表情を混ぜている。

「…挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬さんに指示をされるとすぐさま佇まいを直し、返事をする銀髪さん、もといたラウラ。その言動にクラス一同ポカンとしている。千冬さんは面倒くさそうに眉を釣り上げて視線でラウラさんを威圧。視線で人を殺せそうだ。はいそこ興奮しない！

「了解しました…織斑先生」

すっと、姿勢を直立不動にして、やはり軍人のような雰囲気再度漂わせるラウラさん。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

様子を見るとこれだけらしい、いやあ、さすがデレ前、無愛想極まりない。

クラスメイトの反応を見ると、どうやらこの後に続く言葉を待っているようだが、まあ期待しない方が良いね。

「あ、あの…以上…ですか？」

「以上だ」

いたたまれなくなったらしい山田先生が聞いてみるが、ぶつきらばうな返事と視線に撃墜される、南無。

「……！……貴様が……！」

そして、ラウラの視線がついに隣の一夏と会ってしまった、ラウラさんはツカツカと一夏の席に歩み寄り……

——ヒュンッ！ 思い切り、空振った。

なぜか、僕が一夏の腕を取って思いつきり引つ張ったから。上半身だけがうまいこと引つ張られて平手打ちの射線から逃れる。

「なにしてんの、ラウラさん」

「……なぜ邪魔をする」

やっぱり人を殺せそうな視線でこちらを睨むラウラさん、……常人なら何かに目覚めるかトラウマになりそうだ。

「朝っぱらから友達が殴られるのは目覚めが悪いでしょうに」

「……………」

少し怖いけど、この程度ならどうという事はない。幼少期に千冬さんに怒られまくって残念ながら耐性ができているからね。ネタじゃなく、割とガチで。

「あ、あのかな零？」

「え？」

「肩外れた……」

「…ツヨクイキロ」

「無責任な！？」

ええい黙らっしゃい、なぜシリアスシーンをギャグにしようとするんだこのアホタレは。

ラウラさんも呆れたのかつかつかと千冬さんに指示された席に行ってしまった、鋭い視線はそのままに。

「……ではHRを終了する、各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合しろ。今日は二組との合同演習だ、気を抜くなよ！では、解散！」

千冬さんは素早く連絡を終えて解散の指示を出した、相変わらず様になっていて格好いい。一夏？…肩だらつとたらして唸ってるよ、戻すときが痛いんだよね、あれ。

「おい、桐原、織斑は…それどころではないか、デユノアの面倒を見てやれ、同じ男子だろう」

とのことだ、まあ当然だね。

「君が桐原くん？初めまして、僕はシャルル・デユノア」

「初めまして、改めた自己紹介は時間が惜しいから、早く移動しようか」

早く移動しないと女子にものを投げつけられかねない、朝一番からそんな目に会うのはごめんだ。

「え、あ、ああ、うん。えっと…織斑君は……」

「くっ、肩から痛みが逆流する！ギャアアアアアアアッ！」

……。

「ほっとしてさっさと行こう、一夏なら多分どうにでもなるよ」

「あ、あはは」

こんな奴関わってられない、正直に言えば「しっ！見ちゃダメ！」とか言われるレベルだよ？

まあそれはともかく、急がないと本気でヤバイ。

「さあ早く行こう、ハアリアアアップ！」

「え、え、そんなに！？」

なにがそんなになのかはいまいち分からないけど急がないと頭に火花が咲く。そして…

「あっ！転校生発見！！」

「しかも桐原くんと一緒!!」

展開が早すぎる……!防衛部隊はどうした!?!……冗談はともかくとして、HRが終わってしまつて尖兵が解き放たれたようだ、ここで捕獲されれば確実に間に合わない。つまり僕等の命は無い。

ここは誰かを犠牲にせねば切り抜けられないだろう、というわけで。

「悪いけど、僕はまだ死にたくないんでね……!一夏!逝けっ!!」

「ちよつと待て字がおかし……ぎゃああああああ……」

必要な犠牲だったのだよ……さらば、一夏。一夏はまだ生きています。

「え、えーと……ははは……」

「シャルルさん」

「え?な、なに?」

「慣れた方が良いと思うよ、常にこんなノリだから」

「はは、あははは……」

全力疾走しながらシャルルは苦笑いをするのだった。

「よし、今日も命が有った……」

「こ、こんなに大変なんだね…男子って」

校舎から脱出できたと思っただけで上級生が外で待ち構えていた。わりといつもの事だったりするんだけど、今日はなんかもう勢いが違ったのだ。

目は血走り、手をわきわきさせ、口は裂け…いやそこまでじゃないけど、とにかく凄い勢いで、くぐり抜けるのに苦労した。ナニが彼女達をここまで暴走させるのか…あ、いや、すいません。

ともあれ苦労した甲斐あって着替える程度の時間は確保出来たのだ。一夏は…犠牲になったのだ…。

「さて、着替えよう、ウチの担任は怒ったら手がつけられないからね」

一回だけ女子が実習に遅れたことがあるんだけど、見てられない、うん。従ってどうなったかはトップシークレットだ、言葉に出すのもおぞましい。

……。視線を感じる、十中八九、シャルルのものだろう。なるほど、

他の男子の体に興味がある、と。

「…とうっ！」

「うわぁ！」

一瞬で上半身の衣服を脱ぐ、なぜか（・・・）シャルルの悲鳴。え？意地が悪い？ふふふ、まあ気にしない、気にしない。ちなみに既にISスーツは着用済みだよ。それにしても悲鳴を出すほどかな。

「あ…も、もう着てるんだ」

「そりゃーね、わざわざ着替えに時間かけるほど暇じゃないもんで。――それにしても」

僕がニヤリとほくそ笑み、シャルルが若干身を引く。

「え…つと…？」

「シャルルはえっちなぁ」

「なっ！？ち、違うよ！！」

顔を真っ赤にして否定するシャルル、なかなかかわいい。とまあそれは別として、僕は笑いながらズボンを脱いで完全にISスーツのみとなる。

ちょうどそのタイミングで、圧縮空気の抜ける音が入り口から響いた。

「…んじゃ、僕は先に行くよ。ま、遅れないようにね？」

「あ、うん、分かった」

時計を見ると…うんギリギリかな、怒られないとは思っけど、ちょっと嫌な目に会っただけくらいか。…一夏が。

side 一夏

あ、ああ…朝から酷い目に会った…零め…覚えてろよ…。

なんとか更衣室にたどり着いた俺は、よたよたと自分のロッカーに壁伝いに歩いていく。もし他人にこの姿を見られたら老人が障害者と評価するだろう。いやなんの評価かは知らないけど。

ロッカーの前には制服のままのシャルルが驚いたような顔をして俺に近づいてきた。

「だ、大丈夫？ 織斑くん！」

「あ、ああシャルル…何とかな…酷い目にあつた…」

いやほんと、何て言うんだろう…獅子？ 獲物を目の前にした獅子？ とにかく死を覚悟した、割と本気で。

「ってシャルル着替えないのか？時間ヤバイぞ？」

「え？あ、ああ、うん、大丈夫、着替えるよ」

「そうか、ウチの担任は怒らせても得なことなんか一つもないからな？早く着替えないと酷い目に会っぞ」

俺は言いながら着替えをするために制服の上着を一気に脱ぐ、仕方がないだろ、一々ちまちまやってたらあの鬼神に殺されてしまう。まだそんな目には会いたくない。

しかしシャルルはそれが分からないのか未だ制服のまま、…なんで目を微妙に出して顔を押さえてるんだ？

「シャルル？」

「え！？え、え、ええと、何、かな？」

超挙動不審、こう書くとなんかの奥義みただけどただキョドってるだけだ。念のため。

まあ、それは置いておいて。

「かなり時間押してるから急がないとヤバイぞ、具体的には死ぬことになるかも知らん」

「う、うん！分かってる！分かってるから！！そっち向いて！」

ぐい、と顔を押される、言われれば押さなくてもやるのに…シャルルはどうやらせっかちなようだ。

ともかく無駄話はこれ以上できん、ぱぱっと着替えてしまおう。

……よし、終わった。

「シャルル、着替え、終わったか？」

「う、うん」

「じゃ、いくか、しつこいようだが時間が無いからな、走ろうぜ」

「あ、うん」

……なんだかなあ、まあ無駄話は出来ない、誰かのせいで遅れそうだし。

……第二グラウンドに到着、無論無事ではなく。

「遅い!!」

鬼のお叱りを受ける、まあ出席簿アタックがこないだけありがたいと思うことにしよう。

俺とシャルルは指示どおりに一組の列に入る、…零…何食わぬ顔してんな…畜生め。

「随分ゆっくりでしたね」

何の因果か隣はセシリアのようだ、四月のクラス代表決定戦から俺

や零に構ってくる、あれか、友達になりたいのか？…いや、もうな
ってるな。何だ？

「スーツを着るだけで、どうしてこれほど時間がかかるのですか？」

「道が込んでたんだよ」

いやリアルに、アレ単独で切り抜けるってかなりムズいぞ。

「ウソおっしゃい、いつも間に合うくせに」

いやほんとに、死ぬかと思ったんだが。

それにしても何故こんなにも当たってくるんだろうか、セシリアは
あれか？綺麗な薔薇には刺があるのを実践しようとしているのか？
ちなみに鈴には思い切りからかわれた。

「ええ、ええ、一夏さんはさぞかし女性と縁が多いようですから？
そうでなければ二月連続で叩かれそうになったりはしませんよね」

うな、すげえ嫌味だ、…いやまあ、転校生に叩かれそうになった時
を思い出したけど…なんで叩かれそうになったのか…いや、やっぱ、
アレだろうな。ドイツだつてたし、『教官』とも言ってたしな。

…はあ…、複雑、つか、なんつついか…。

「なに、アンタまたなんかやったの？」

「…ん？鈴か？どこだ？」

「後ろよ！このバカ！」

あーそうだ、今日は合同だから後ろのに二組が控えてるんだったな。
てか鈴か、いやまあ、鈴以外に二組女子はそんなこと言わないな、
バカとか×3

「一夏はバカだもの」

「そうよバーカ」

「ですわね」

お前ら酷え！てかこれ前にもやった気が！？

「で、何があつたの？」

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の方に叩かれそうになりましたの」

「はあ？一夏、アンタなんでそんなにバカなの！？」

「安心しろ、バカは私の目の前にも二名いる」

金属がきしむ音を響かせて首を目の前に戻す二人、目の前に御座す
は最強の鬼であつた、南無。
イツ・シヨウ・タイム。

バシーンッ！！

本日も快晴なり、と。うむ、平和だ。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦を想定した訓練を開始する」

「はい！」

合同演習だからいつもより人が多い、その分声の大きさと数も倍だ。返事もかなり気合が入っている。

「くっ…何かというとすぐに人の頭をポンポンと…」

「…一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

ズキズキと痛むのか頭を押さえながら恨みがましい目で睨んでくる鈴とセシリア、これが逆恨みって奴か。なるほど、不条理極まりないな。

こういうのはまともに相手をしない方がいいんだ。授業に集中しないと千冬姉の出席簿アタックが飛んでくるだろうし。

「今日は戦闘の実演してもらう、丁度活力がありあまってる奴もい

るようだからな………凰、オルコット」

「ええ!？」

「な、なぜわたくしまで!？」

お前らさつき騒いでたろうに……、そして指名されたなら諦めろ、二人共、千冬姉に説得やOHANASIは通用しない。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。それと桐原!」

「……、え……?は、はいっ!」

鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をして零は返事を遅れながらも返す。いや、仕方ないな、完全に脈絡無かったし。

「送られてきたパックのインストールは済んでいるな?お前にはその実演をやってもらっ」

「え?あ、ああ、はい。分かりました」

バックってなんだ?という俺やクラスメイトは疑問符を浮かべる、が、話す気はないようで、零はISを展開するために俺たちから離れた。千冬姉はすぐに分かれるとだけ言っ指示を再会する。

「よし、オルコット、凰、前に出ろ」

ぶつくさ言いながら二人は前に出る、すっげえやる気なさそうだがアレで戦えるのか?

「お前ら少しはやる気を出せ、……………」

ん？なんか千冬姉が言ってるな、遠いせいでよく聞こえないけど。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくし、セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せる良い機会よね！専用機持ちの」

……一体何したんだ千冬姉。買った飯を奢るとか？もしくはデザート、すいーつなんて言わないんだ。

まあ、やる気があるのはいいいことだな、うん。

「それで、相手は零さんですか？まあ凰さんでもよろしいですが」

「ふふん、こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるな、バカども。対戦相手は……………」

千冬姉の言葉を遮るように風を裂くような音が空から聞こえてくる、……まさか。

「ああああーっ！ど、どいて！どいてくださーいっ！」

ん？なんだと？俺か？…って、おわあ！？流星が降ってくる！！

どかーん

流星を喰らった衝撃で俺は数メートル吹き飛ばされゴロゴロと転が

る。

「ふいー…危ない危ない…展開がギリギリ間に合って助かった…」

ゆっくりと体勢を立て直し、ふわりと空中に浮かぶ。が。なにかが上に被さっていて身動きが取れない。

「大丈夫かい？一夏」

オープンチャンネルで零に問いかけられる、が。何だろう、すっげえ不穏な空気が…。

というかまずこの物体をどかさなければ、……よっと。ふにゅ

「…………ふにゅ？」

「あ、あのう…織斑くん……ひゃん！」

俺が上のものを持ち上げようとして手を動かす、すると、何か柔らかくて大きいものが手の中に入ってきていた。そしてそれが喋っている、聞き覚えのある声だ。これは——山田先生…？はっ！なにか不味い、空気が凍りついたような気が…！

「そ、その、ですね、困ります…こんな場所で…。い、いえ！場所だけじゃなく私と織斑くんは教師と生徒で——」

「い、いや！触ってるのはすいません！故意じゃないです！だから

——」

必死にこの状況から脱出しようと試みる俺。頼むから退いてくれという祈りを込め、説得しようとするが、そんな俺の祈りは聞き届け

られなかったらしく。

「ええ！？恋じゃない！？そ、そんなあ……」

「ど、どうしてそんなことに！？っていうか、いいから——」

涙目になった俺と山田先生。因みになんで俺が涙目になってるのかというと、女子たちの中から放たれる邪悪な視線×3によるものだ、マジ怖い、誰か何とかしてくれ。

ぶつちやけぐいぐい押すわけにもいかないし、この体勢からの脱出は山田先生に動いてもらわないと——

ビシュウッ！！

「あ、あら？外してしまいましたわ？うふ、うふふうふふふふふふふ」

ヤバい、ヤバいヤバいヤバい。レーザーが！俺の頭のすぐ横を！そしてセシリアがヤバい！ヘルプミー零！おいこら目を逸らすな！！

『いやー、無理。同情したくも無いし、助けたら多分殺される』

プライベート・チャンネル
個人秘匿回線で零の答えが送られてくる、同情したくないって何だお前。

ともかく、鬼神の勢いは分かった。しかし、どうしよう。

A、どうしようもない

…本当にありがとうございました。グッバイ青春。

こんなことしている間にガシーンと、ああ、これは双天牙月の連結

音が、たぶん投げるんだろうな。あれって確か投げた後戻ってくるんじゃないっけ。ブーメランだな、まるで。避けられても意表をついて背中から切れるし、回収の手間も省ける。わぁ超便利。

逃げられない、確実に被さってる俺と山田先生に直進してくる『双天牙月』。

「はっ！」

火薬が弾ける音と薬莢が地面に落ちる音が二連続で俺の上から響く、
ということは山……やべえ

上に目を向けると細い両腕に、銃口から硝煙を燻らせるクラウドス社製五十一口径の『レッドバレット』を持った山田先生が局部を俺に押し付けた状態で、まあ、なんというか、伏せていた。うん。伏せていた。

俺の内心とは裏腹に山田先生は落ち着き払っている、この体勢からの射撃で双天牙月を打ち落とすことといい普段の山田先生からは想像ができない。

そして決壊寸前だ、何がと言わないが。

「……山田先生、こんなやつの近くにいると襲われちゃいますよ。とりあえず離れてください」

零が山田先生を俺から下ろす。聞き捨てならないことを口走ってるが、とりあえずは助かった。

友人連中には今女性には興味ないと言い張っちゃいるが俺だって男の子だ、だから……うんまあアレだ。

「え？え……っと、襲われる……って？」

「あー……」

答えに困窮する零。いやあ、なんていうか、山田先生……。眩しい
っす。

「あーゴホンゴホン。……さて、小娘ども、いつまで惚けている。
さっさと始めるぞ」

「え？二対一で、ですか？」

「いや流石にそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

負ける、というのが気に障ったのだろう、二人の目に闘志が宿る。
ちなみにセシリアの試験官は山田先生だったらしく、一度勝ってい
るということもあり、いつもに増して気合が入っている。

「では、始めろ」

開始の合図に千冬姉が手を振ると、セシリアと鈴が飛翔する。ワン
テンポ遅れて山田先生も飛び立っていった。

ちなみに先ほどから零は隅のほうで端末をいじっている。何でかは
知らないが、まあ何かの下準備だろう。

1、転校生はブロンドさん（後書き）

続きはすぐ書きます、これは単にアンケートどうしようと思んできた結果です。

いやガチで。なんで書き終ったの木曜で公開日曜の夜やねん

まあともかく、作者の足りない頭で絞り出した結果っす。これで勘弁したってください。

A、そもそもやらなくてもエエよ。

B、熱血三バカ研究トリオの熱い日常

C、首輪付きIS学園参入（ifストーリー）

D、一夏と鈴里さんのフラグ立ててデート、白坏さんと誰かでも可（無論女子おk）

E、俺の案を採用してくれ（読者案）

です。AとEが酷いですがBCDも大概っすね、これは酷い。

特に期限は無いです、どしどし投票してくれたら嬉しいです。

2、火力こそ正義（前書き）

W i k i さん 正義、情報いつもあざーっす

2、火力こそ正義

時は少し飛んで、場所は食堂。

「ふいー…やっぱ二対一はきついね…」

ちゅーとストローからジュースを吸い出す、今日の食後のジュースは食堂で唯一不評なトロピカルジュース。

……うん、くそまじい。メロンやらなんやらとにかく適当に果物詰め込んだって感じだね。

「でも……凄かった…」

向かいに座る簪さんがぼつりと呟く。やや顔が熱っぽい、ああいうの好きだっけ？

「うん、零って確か三ヶ月前に乗り始めたばかりでしょ？なんであんなに銃の制動力とか引き際とかが上手いの？素人じゃどんな厳しい訓練してもこの短期間であんなに動けないよ」

シャルルが僕に不思議そうに聞いてきた、正しくは二ヶ月前かな？まあ何でもいいけども。

多分この質問はどこかでずーっと訓練してたのか？っていうのを聞いているのかな。

「全部何となくだよ。それに僕じゃなくてFCSが異常なんだよ、OSも半端じゃなく精巧だし」

噂に聞くと『変態技術屋集団』とか『変態に頭脳と金を与えた結果がこれだよ！』とか言われてるらしい。

オペレーションシステム

ちなみに倉持は主にOSやFCS（火器管制システム）、武器の開発に力を注いでいて、基本的にフレームなどは販売していない。フレームなどの技術は他国家や企業に高値で売りつけることで研究開発費を稼いでいるかららしい。どんだけ活発なんだ。

ちなみに打鉄式や零式は試作品のテストベットとして作られたらしい。……まあ明らかにヤリタイダーな武器がいっぱいあるしね、式式で言えば連射式の荷電粒子砲だったり48連装ミサイルポッドだったり。零式なんかは銃剣とか、あと『天蓋』なんかもヤリタイダーって感じがするね。

ともかく毎週毎週二つか三つ必ず試作品が送られてくるってどうなんだろ。おかげで倉庫まで試作品で埋まってきた、毎週千冬さんに頭を下げる日々が続く、辛い。やるんだけどね！断ったらモルモットだし！！

「ふーん…随分性能のいい機体なんだね…」

「…シャルル、物欲しそうな目で見てもデータは上げないよ？」

「いや、いいよ。倉持は提携先だし、零式のデータは本社に送られてきてるから」

そうでしたか、ええ知ってましたとも。…何やってんだろつか、僕。とと、話題がかなりそれた気がする。ええと、元の話題は……。

「えと……今日の実習凄かったね……？」

「ああ、うん。特別パックが送られてきて????????」

「????????よし、そんなものでいいだろう。終わるぞ」

シャルルが自社の製品ラファール・リヴァイブの説明をしているのを、千冬はすつと言葉で制する。

ちょうど、連携が上手く行かず、鈴に突っ込んで行ったセシリアが鈴とともに山田先生のグレネードによって空から叩き落とされたところだ。

「くっ、うつ……ま、まさかこの私が……！」

「あ、アンタね…なに面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！無駄にバカス力衝撃砲を撃つから！こちらはフレンドリーファイアさせないように必死なのですわ！」

「こっちの台詞よ！無駄にビット出して！流れ弾回避するの結構大変なのよ！？しかも無駄に早くエネルギー切れするし！」

「ぐぐぐぐぐつ！」

「ぎぎぎぎぎつ！」

両者の背中に龍と虎のスタンド（のようなもの）が現れる。いわば龍虎合間見える、だろう。ただ単に仲が悪いだけなのだろうが。

それにしても、両者の主張がどれも正しいだけあって、非常に見苦しい。尊敬の眼差しを送る生徒はほとんど居なくなっていく。それでも気づかぬ二人は、未だに睨み合っていた。

「…と、まあ、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を払え、いいな？…よし。おい！桐原！！」

千冬は突然大声を張り上げて隅で端末を弄っていた零を呼んだ。零は突然の呼びかけにすこし飛び上がったから千冬の方を見る。キョトンとしていたのが女子に受けたのか、すこしだけくすくすという笑い声でざわめく。

「調整は終わったか？」

「ええ、今すぐ始められますよ」

若干バツが悪そうにしながら零がそう答えた。

「よし、転校生に实力を見せてもらおうこととしよう、ラウラ、デュノア」

「はい」

「はい！教官！」

「教官は止めろといったらう。まあいい、ISを展開しろ」

「はい」

「了解しました」

「よし、桐原、お前もだ」

「はい」

三人がほぼ同時に自身のISを展開する。

オレンジ色の装甲に中央から別れた推進翼と、マルチウエポンラックが特徴的なカスタムモデルのリヴァイブがシャルルの体に展開される。

明るいシャルルのリヴァイブとは対照的に黒く、肩に背負った巨大なりニアカノンが特徴的な機体がラウラの体にまとわれた。

そして、最後に特別パックをインストールした零の零式が展開される。

しかし、それを見たものは、誰も彼も、絶句した。

「は、あははは……ははは……」

本人も流石のリアクションに泣きそうになっていた、彼が泣きそうになるのも、その場にいた全員が絶句するのも当然の事だろう。

特別パックを装備した零式は、横に二つずつ巨大なエネルギーカノンと、グレネードカノンの砲塔を展開し、その両手にはガトリングガンが握られていた。

その他にも背中に背負った巨大なバックパックや、四つの大型スラスター、全面後方それぞれに展開された二対のシールドにより、まさに要塞といった風体のISがそこに居て、普通に浮いてたりするもう、啞然とするしかない。

「……何の冗談だ？」

「ら、ラウラさん！あ、えーっと…零……くん？」

山田先生が超怪訝な顔をしたラウラさんの言動を制して零のフォロ―しようとするが。当の本人は泣きそうな笑いそうな顔をしながら、放心していた。どうやら何だこいつ的な視線に完全に打ち砕かれたようだ。

……さすがに何が砕かれたのは自明の理なので言動は控えさせていたたく。

「いや、いいです、山田先生。僕にとっても悪夢だから、笑えばいいと思うよ……」

名台詞の無駄遣いである。

そして情けなさ過ぎて微妙な空気となる。当然だろう。

「あー！ゴホンっ！！それでは！開始しろ！」

千冬は微妙になった空気を払拭するために、気合を入れて喝をする。
すぐさま反応した三人は無言で上昇する。

「くっそう…遅いなあ…！」

二人に比べればほとんど亀の歩みだ、移動スピードはスラスタ―出力が高くとも、その重さ故にかなり遅い。

「…そんな固定砲台で何をするつもりだ」

「ええい！知るか！」

零はやや自暴自棄になって左のガトリングガン『アヴェンジャーC2-ver2.5』を二人に向けて空転を開始して、片方のアヴェンジャーC2を手放し、リヴォルヴァー・グレネードカノン『疾風怒濤』に交換して二人に狙いを定める。

「そこだ！」

「狙いが甘いな、勘は良いが」

「おっと」

零がアヴェンジャーをもっとも近くに居るラウラに向けて連射させる、が、ラウラはあっさりと機体ごと体を捻って射線から逃れる。そのついでか切り返しに三本のワイヤーブレードが放たれ、前面の

シールドの装甲を軽く削っていく。

シャルルは牽制射と分かっていたらしく、回避したまま近づいてはこなかった。

「ほう…固いな、さすが鈍重なだけある」

「凄いなこれ……っと、気は抜けないな」

零は自らの機体の堅牢さに感心する、それも一瞬の事で、ハイパーセンサーにグレネード弾を回避したシャルルの位置を確認させ、意表を突かれないような位置取りに徹する。

先程の一撃で完全に頭が冷えたらしく、二人から銃口を外さない。

「どうしようか」

「…私に聞くな。…しかし、このままでは埒が明かん、…仕掛けるぞ」

確かに、零と彼らの距離は両者牽制が軽くできる程度で本格的に当たる事はない。千冬の視線も中々にきついため、早く終わらせた方が無難だろう。

「どちらかが囷にして詰めていくぞ、接近しろ」

「了解、行こうか」

二人は合図をすると、散開して零式の両サイドをはさむ形になる。零式はスラスター出力をすべて前方にまわし後退を図るが、そもそもが鈍足のために間に合わない。

完全に両サイドを取った二人は、まずシャルルがスラスターの出力

を最大にして零式に接近していく、的確に反応した零は仕方なく両手のガトリングとグレネードをシャルルに向けて横にスラスター出力を集中させる。

「うわっ！」

「ある程度の傷は予想している、出来れば大ダメージは避けたかったけどね！」

シャルルは連装ショットガンの『レイン・オブ・サタデー』を展開して零式に弾丸を浴びせるが、分厚い装甲が多少破損するだけで、シャルルは確実に爆風や弾雨によって、近づけないままにシールドエネルギーが削られていく。

「くっ…！」

「まずは一人…！？」

「……………？」

シャルルのシールドエネルギーが削り切れそうになる直前、弾雨が完全に停止した。否、それどころか、零式の巨体その物が動けなっていた（……………）。

「ツメと読みが甘かったな、戦争に予想外の出来事はつきものだ」

「しまっ…！？」

「まあ教えてやろう。これが????？」

ワイヤーブレードとプラズマ手刀を展開したラウラが零に近づき、ワイヤーブレードによって前面装甲と後方の装甲を引き剥がすと、露わになった零の首元にプラズマ手刀をつきたてる。

「?????絶対防御が発動、零のシールドエネルギー残量が一瞬で0になった。」

「敗北の味だ」

その零にラウラは拳を振りおろし、地面に向かって叩き落とす。

「つく!?!」

絶対防御ですべてのエネルギーを使用した零式には、その落下スピードを緩める手段はない。

が、なんとか体勢を立て直し、零は無事着地に成功する。

「危なかった…」

「何してんの!ラウラさん!桐原君のシールドエネルギーは…!」

「…………ちっ」

『何をしている、早く戻れ。ラウラ、…あまり調子乗るなよ』

「???????てな感じだったね。ISが無ければ死んでたかも」

「ほんとに大丈夫なの？ 零」

「……悪意があるように……見える……」

まあ確かにね、確実に何か恨みでもあるか。一夏に何とかして因縁をつけようって魂胆だったかもしれない。

因みにそのあとの普通生徒のIS実習については、僕のところはハブニングも無く普通どおりに進んだ。なんだか一夏達のところ見るとちよつとうらやましいけどね。その時一夏が女子をお姫様だっこしててもげろ！ って言いそうになったのは御愛嬌だと思うんだ僕は。言ってみようか、もげろ！

ともかく、一夏はここにはいないので空しくて仕方が無い。うん止めよう。

取り敢えずはラウラさんの事だね、まあ…罪を恨んで人を憎まずってことで、ここはひとつ。あとで必ず復讐果たさせていただくけどね。全部許せるほど僕は出来ちゃいない。

「まあ、命に別状はないし。多分気付かなかったんでしょ、仕方ない仕方がない」

いやまあ確実に気づいてたとは思っけどね。

「それならいいんだけど…あ、このエビフライおいしいね」

「それは…私も、お勧め……」

暗い話題ではあったけど、そもそもここは食堂だ、本来こんな空気であるべきだね。似合わない話題はするものじゃない。

「ふうー今日もおいしかった、ごちそうさまでした」

「早い…」

「あはは…駄目、かな？」

ふるふると簪さんは首を振って否定してかき揚げうどんを食べる作業に戻る。なんだか話しやすくなったような…そうでないような雰囲気の流れる。非常に微妙で困ってしまう空気だ。

びるるる

「…あ、僕だ。ちよつと失礼」

「うん」

「あ…う、うん」

電話に出るために食堂から出て、すぐ横の自動販売機のコーナーのベンチに座って電話に出る。

「はい、桐原です。何でしょう」

『やあ、零くん』

やや聞き慣れない落ち着いた男の声が電話の向こうから聞こえてくる。

「えーっと…？」

『ああ、君とは初めまして、かな？倉持陽一だ、以後お見知りおきを』

倉持…陽一……ああ、そういえば雑誌で紹介されてたな、軽薄そんな顔とは裏腹にかなりのやり手だって。

たしか場末の小さな工場を今の倉持技研にしたのは彼だとか、経済手腕もなかなかのもので技術力を売りまくって最先端を進んでいくっていう方針を作り出したのは彼らしいし。

ともかくそんな社長さんが僕に用ってことは、やっぱりあのゲテモノの件かな。

「はあ…倉持の社長さんですか、特殊兵装のデータの件で？」

『ああ、それは学年別だっけ？そのトーナメントでやってもらうから。ついでにもう二つくらいパッケージをそちらに送るよ』

「多くないですか？」

『仕方ないんだよー、式式がテストに使えないから零式にやってもらわないと。まあ君はよくやってくれている方だけだね。そうそう、白坏さんから聞いた話では君が簪ちゃんの式式のサポートをやっているって話だったんだけど、どうなのさ？』

「あー進行状況はいい感じですかねー、僕は手伝ってないんですけど」

『えー？話が違うよ？』

「本人の意志を尊重しました。まあこの分ではトーナメントまでに行けるのは本体と荷電粒子砲くらいでしょうけど」

『優柔不断だね、強引にでも割り込ませてもらったらよかったのに』

「ええ、まあ流石にこのままだと間に合わないので、ソフトウェアの面とかハードの見直しとかは僕が手伝ったりしてます」

『ふーんふんふん…なるほどねえ、さて、僕はこれから仕事なんですね、失礼させてもらうよ。ああ、そうそう、白坏さんから宣告があったと思うけど、式式はちゃんと完成しておくように、武器については君に送ったのを流用してくればそれでいいよ』

「分かりました、じゃあこれで」

『はいはい、じゃーね』

何か割と適当な人だったな。あとちょっとだけイラッとする喋り方だったけど、この程度は気にしない事になっている。

うん、まあ、それどころじゃない人もいたりするからね。「そちらにとつても、悪い話ではないと思いますか？」とか、「〴〵はあなたを強く希望しています」これなんかは暗にかなり重圧かけてるからね、少しイラッとする。外交官なんかが多いんだよねこういう人が。

「あれ、零、終わったの？」

「ああ、うん。あ、授業もそろそろだし、ちょっと待ってて、今食器片付けてくる」

「大丈夫…私が、やった」

「あ。ありがとね、簪さん」

「う、ううん」

恥ずかしそうに簪さんは顔を俯ける、ううん…なんかこっちも恥ずかしいよ。シャルルはなぜかニヤニヤしてるし、止めてほしい。…まあ気持ちは分からなくもないけどね。

某日、某所。

何者かの手によって置かれた十二の端末の内、十一が暗い部屋に灯っている。

ディスプレイにはサウンドオンリーの字が表示され、今はどれも完全に静まっていた。

それらは完全な秘匿回線で、絶対に他者に聞かれる事はない。かの天災でさえも。

それは、ある種『存在しない場所』だろう。

『……済まない、皆。どうやら私が最後のようだな』

最後の一つの端末が光を灯し、声が流れる。

それを口火に、今まで静かだった部屋にそれぞれ特徴的な声がぽつぽつと流れ出す。

『遅いぞ、オズワルド』

『極東は遅刻文化でも広まっているのかね？』

『ハハッ、ヨーロッパやアメリカはいつも遅れるじゃないか。極東は馬車馬のように働かなければ生きていけないらしいから大目に見てあげなよ』

遅れて来た彼を叱咤する声を、小馬鹿にしたような声が水を差す。

『貴様……』

『静まれ。始まるものも始まらんだろう』

『チ……』

『ふん』

『……なんにせよ、済まん』

『気にするな、さぞ多忙だろう？』

『心遣い、感謝する』

『……………始めよう』

先程の声よりも静か、だが、より存在感のある声がその場を引き締めた。

『さて、今日も時間はあまり無いだろう。手短に済ませるぞ』

『僕んとは年中暇だよ、仕事くれっての』

『そのうちな。さて、まずは…『山猫』か。どうだ？オズワルド』

『ああ、応じたよ。楽すぎて裏があるんじゃないかと思うほどだ』

『ふむ……………成程、噂通りか』

『ま、案の定、ミッション成功時は莫大な金を払うことになったがな』

『予算は十二分にある、元より承知の事だしな』

『しかし、彼女は何故あんなに金を必要とするのかね？なにか目的があるわけじゃないだろうに』

『それは我らの関与することではないだろう、好奇心は猫を殺す』

『僕暇だから突っ込んじゃおっかなー』

『クソガキが…自重しろよ』

『ハア？頭の固いおっさんはうんうん唸ってなよ、本来ならあんたじゃなくアン姉さんが居る場所なんだからね？その事理解してる？あつ固過ぎてよくわかんないかゝ、ごめんねゝ？』

『何だと…！』

『……馬鹿者ども……やめろ……』

『しかしな…！』

『やめろと言っている、追放するぞ。クラウドス』

『……く……』

『あはっ』

『お前もだ、クラウドディア』

『ちえー』

『ついでだ、言っておくが奴は味方と思うな、敵の敵だ。油断すれば一瞬で喉の骨を噛み砕かれるぞ』

『……それは奴と会ったの感想か？オズワルド』

『ああ、奴は危険だ。あの『天災』と同様に、な』

『…留意しよう、次は…この前に私たちに攻撃を仕掛けてきた例の無人ISか』

『……そうだな、鹵獲した『H・1』とやらはどうする？』

『……………ああ、あの『天災』の…『H・1』というのは？』

『機体に刻み込まれていた、随分と丁寧なものだと感心したよ』

『成るほどな、折角だ、コアを抜いて技術研究すれば良い。戦力の強化にも繋がるだろう』

『それではつまらん』

『…何か良い案があるのか？』

『試験段階だが、体を与えてやるというのはどうだ？』

『エル、それは…』

『大丈夫だ、こちらも試験段階だが、制御は何とかできるだろう。
…あの『天災』が関与しなければの話だが』

『…消されかねんのではないか？かの博士は十全なものでなければ
壊してしまうと聞くが』

『ふ…失敗からはや二年、すべてのミスは拭い去った。アレが関与
することはない』

『ふむ…まあ、その時はその時か。しかし、そもそも計画にあん
なものは必要ない、精精オプションがいいところだ』

『随分自信があるんだね、自分の練った計画に』

『当然だ、でなければ貴様らに話すものか』

『何よりだ。で、計画の下準備の進行率はどうだ？』

『50%、思ったよりも進み具合が芳しくないが、私の部署で新技術の開発に成功した』

『ふむ……では……』

『ああ、そうだな……時期はわからんが、そろそろだ』

『そろそろ……か』

『これで……』

『ああ……世界は変わる……』

『……感慨深いのはわかるが、浸るのは成功してからだ。それでは、皆、励んでくれ』

すべての端末の光が、ひとつを除いて完全に掻き消える。

『そっか。これで、僕は報われるのか、ふふ。楽しみだね”0（ぜ
口）”』

すべての灯りが、消えた。

2、火力こそ正義（後書き）

戦闘シーンはややガス欠ぎみ、実力がなければかりに…すまんかった。
今日もオリキャラ二人は出てこない…げふつごふつ！

白坏「…クズが」

いや、ホント反省してますって…、……ちなみに、一夏たちの弁当
あーんシーンとかいろんなものは別方面って事で写してないです。
要請があれば書きますが。

と言うわけでいつも通り感想お待ちしてます。アンケートもまだ締め切
めて切っていないのでどしどしご応募くださいね。

3、黒の暴走兎（前編）

「んーと、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのはね、単純に射撃武器の特性を理解してないからじゃないかな？」

「なんで疑問形？…まあでも、零にもはっきりそう言われたな」

シャルルが転校してきてからはや五日。今日は土曜日だ。青く澄んだ空が眩しい。

「零にも？…ところで今日は居ないみたいなんだけど…どうしたのかな」

「ああ、いつもは土日にはわけのわからない武器の試射とかしてるんだけどな。そこら辺で」

「零さんなら整備室らしいですよ？なんでも完成させないといけない物があるとか。先日のパッケージ破損の件もあるでしょうし」

ふーん…最近特に疲れてたのもそれが関係してんのかな？…っていうかいたのか、セシリア。

その他にもなぜ知ってるのかとかも気になるけどな。ちなみに鈴に聞いたら女子ネットワークだと。…微妙に分からんが、俺らは常に監視されてるっばいな。少し気味が悪い。

「まあいいや。で、一夏。射撃武器の特性なんだけど、一夏の”知ってる”は多分”知識として知ってる”なんだよね」

「うーん……そう、なのか？」

「うん。証拠にさつき僕と戦ったときにもほとんど間合いを詰められなかったじゃない？」

「あー……まあ、確かに、『瞬時加速』も読まれてたっぽいしな……」

「一夏の機体は至近接戦闘のみに特化した機体だから、より深く射撃武器の特性を理解してないと対戦じゃ勝ことは出来ないよ。特に一夏の『瞬時加速』は直線的だから、反応しなくても弾道を予測するだけでいいもの」

ふむう……簡単に言うくとぶっちゃけ読みやすすぎて正直障害にもならないって事か。結構ショックだな。

まあ事実鈴とのクラスマッチ以降、模擬戦では奇襲なんて成功しなくなっただけだな。初見じゃないとほとんど意味が無いって事か。

「いや、そうでもないよ。あまり急激な方向転換は身体的負荷が凄いからダメだけど、例えばタイミングを見計らったり、通常の加速と併用したりすれば随分違うと思うよ。瞬時加速自体はプロでも反応が遅れることだってあるし」

「…なるほど、勉強になるぜ」

いや実に説明がわかりやすい。話の度に説明に聞き入ってしまう。…いっちゃんんだがウチの専属コーチ達の説明よりよっぽど頭に入る。

『こつずばーつとやってから、がきん！どかん！…』という具合だ』

『何となく分かるでしょ？感覚よ感覚、は？何でわかんないのよ、このバカ！』

『防御の時は右半身を斜め上方前方へ5度傾けて、回避の時は後方へ20度反転ですわ』

…うん、まず筭、それだと実演しねーとわかんねえよ。あと鈴、他人が誰でもお前みたいにできるわけじゃないからな？セシリアは比較的良い方だが理論的過ぎて分かりづらい。

こんなもんか。というわけで今の状況で言えるのはシャルルさんマジ天使。だな。

零も説明するときはわかりやすく説明してくれるんだが、基本的に自分の事で手一杯なのと、説明したくない（正しくは女子の重圧が酷すぎて説明できない）とのことらしい。

「ふん、私のアドバイスを聞かないからだ」

「あたしがあんなにわかりやすく教えてあげてるのに…」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不足だと…」

…何を言ってるんだ…アレで分かる人間の方が凄いのと思うんだが…。俺の気のせいなのか…？

「えーっと、確か白式って『後付武装』^{イコライザ}が無いんだよね？」

「お、ああ。何回か調べたんだが、^{バズロッド}拡張領域が開いてないんだと。

専用の武器…野太刀と小太刀以外は量子変換は無理だとさ」

「うーん多分だけど、その要因はワンオフ・アビリティーに容量を大量に使ってるせいじゃないかな」

「ワンオフっつーと…唯一仕様のアレの事か？」

「うん。通常は第二形態から発現するんだけど、それでも発現しない機体が圧倒的に多いんだよね。ちなみにそれに似た特殊能力を複数の人間に使えるようにしたのが第三世代型IS。イメージジェネレーターを使って擬似的にワンオフ・アビリティーを再現した物が大多数だね」

「なるほど。それで、白式の唯一仕様はやっぱり『零落白夜』なのか？」

「うん、それにしても凄いよね、第一形態から発現するなんて。さつきも言ったとおり多くの場合は二次移行しても発現しない場合の方が多いのに。しかもその能力って確か織斑先生の使っていたISの能力と一緒にだよね？」

「そういうことらしい、うん、多分そうだ。一回だけ千冬姉の戦闘を見たけど白式とまったく一緒の物だった…筈だ。武器も同じものだし、どうにも因縁めいている。」

「…まあ思うところは有るがIS自体よく分からんもんだしな。そういうこともあるんだろ…ごく稀に。考えるだけ無駄だ」

「なにより、あの（…）何を考えているのかよく分からない東博士（あの人）の作った物だ。長年一緒にいた千冬姉でも何を考えてど

う行動するかは完璧には分からないらしいからな。

「うーん…まあ、そうだね。こういうことを考えるのは僕等の仕事じゃないし。じゃ、射撃武器の練習でもする？」

そう言つてシャルルが手渡してきた五十五口径のアサルトライフル『ヴェント』を受け取る。

「おう…つてあれ？確か他の奴の装備つて使えないんだよね？」

「基本的にはそうだけど、使用許可が本人から出れば登録していれば使えるんだよ。ちなみにもう登録して許可は出したから。さっそく試しに撃つてみて」

「おう…こうか？」

妙な重さを持つ銃を、零やセシリアの見よう見まねで構えてみる。えーっと確か、脇で挟んで…左手で前に押し出すように…。

「そうそう、上手いね一夏」

「まあ、手本は結構いるからな。見慣れたのを真似するだけでいいんで楽なもんだ」

「意外と勤勉なんだね…一夏」

「意外つてなんだ！？」

非常に遺憾だ、心外にもほどがあるぞ。普通に勉強くらいしとるわ！してないと授業で当てられたときに出席簿アタックが飛んでくる

からな。あれは本当に痛いんだ。

「まあまあ。オツケー、構えはそんな感じで維持して。火薬銃だから瞬間的に反動がくるけどEISが自動で相殺してくれるから心配しなくてもいいよ。あつ、センサーリンクは出来てる？」

「……いや、無いみたいだな。格闘オンリーの機体だから」

「ふうん…格闘オンリーか…特化しすぎじゃない？」

「いやー…俺に言われても…」

FCSすら受け付けないこの機体に言ってほしいもんだ。聞き入れるかどうかは別として。

「それじゃあ仕方ないから目測でやっちゃおう。僕がサポートに回るから、その体勢のまま撃ってみて」

「了解…つと。んじゃ、行くぞ」

バン！

「…おお」

バン！

「ほっほっ…」

「…どっつっ…」

「ああ、まず、速い！って感じたな。そりゃ撃ち抜かれりゃ痛いはずだ」

それが本心からの感想。面積が小さい分、瞬時加速と同じ初速で飛んでいると仮想するなら、速さ的には俺と白式より弾丸に軍配が上がるだろう。先ほどのシャルルの言葉も合点がいった。

「成るほどな、こりゃ簡単に間合いが開くし、続けて攻撃もされる」

「う、うん」

「…どうしたんだ？シャルル」

「いや…ホントに意外で、さ。多少説明はしないといけないかなーとか思ってたんだけど」

「見くびってもらっちゃ困るぜ…これくらいは何とか分かる」

まあともかく、格闘メインの筈はともかく、鈴やセシリア、零と戦うときに一方的な展開になる理由が多少理解できた。むろん納得もいったしな。あとはどうやって勝ちにいくか、かな？

「だからそうだと私が何回も説明しただろうに…！」

「って、それすら分かってなかったわけ？はー…ほんとバカね」

「わたくしはてつきり解った上であのような無茶苦茶な動きをしているものと思っていましたか……」

……語弊がある、ってのはまさにこの事だな。俺たちは一度ゆつく

り話し合う必要がありそうだ。

てかお前ら何度も思うがあんの説明でよく…いやよそう。なんか嫌な予感しかないし。

「あ、そのまま続けて。一マガジン使いきってもいいよ」

「おう、サンキューな」

とりあえずは仮想的な出現させてそれに向かって何発か撃ってみる。反動による衝撃を受け止めながらどうやって間合いを詰めるか考える。つってもどう考えても被弾覚悟の上だけだな。肉を切らせて骨を断てればいいくらいしか思いつかない。妄想ではいくらずも勝ちパターンは掴めるんだけどな…実践じゃそうもいかないもんだ。

「んー…ふうん…はあ……」

「…どしたの？一夏」

「いや、どうにも、な。まあいいか…そういやシャルルの機体って確かリヴァイヴなんだよな？随分形状とかカラーリングが変わってる気もするけど」

「うん、僕のリヴァイヴは実家がカスタムしてくれたものを使っているんだよ。一回だけガルド型に乗ってみないかって通知もナービス・レイレナード社からきたんだけど、そっちは辞退したんだ」

「ナービス…レイレナード？」

「ああ、うん。フランスの新興企業だよ、どこで培ったのかは不明

だけど、新技術を活発に開発していてフランスの第三世代のシェアはこっちにとられちゃってるんだ。まあまだデュノア社が完全に劣ってるってわけでもないけど」

売上はまだこっちの方が有利だしね。とシャルルはどこか寂しそうにそう言う。どこか引つかかるような感じがするな…なんだろうか。

「…ねえ！ちよつと！アレ！」

「え？…ドイツの第三世代型！？」

「まだトライアル段階って聞いてたけど…」

急にアリーナが慌しくなる。俺は丁度一マガジン十六発を撃ちきったところで注目の的に視線を移した。

「……………」

「シャルル、もう一本マガジンくれないか」

「…え？あ、ああ、うん。はいこれ」

「サンキューな」

「う、うん。え？あれ？」

シャルルは盛大に狼狽しながらマガジンを俺に手渡す。どう考えてもこちらを睨んでくるもう一人の転校生がこっちを睨んでくるのがその要因だろう。

だがしかし、そんなこと知ったことではない。俺は忙しいんだ。

「おい」

バァン！バァン！

「む、外れた」

「え、えっと」

「おい」

バァン！バァン！

「むう……」

「ね、ねえ、一夏」

「……おい」

バァン！バァン！

「私の話を聞け！」

ズドォン！

「うおっ！？危ねえだろ！」

もう一人の転校生ラウラ・ボーデヴィツヒのレールカノンの一撃が目の前の地面を抉った。何すんだバカ危ないだろバカ。

「……いや、ある種一夏の所為だと思つよ……?」

「……そうか?」

「そうだ」

シャルルに対する問いかけをラウラが遮る。正直なところぶつきらばう極まりなく、俺としては、不快、そう、不愉快だ。

「……何の用だよ」

というわけで自然と俺の口調も刺々しくなってしまう。初日の態度といい、どうも気に入らない奴だしな。

つてかわざわざ敵を作るような態度をとって何が得なのか。理由が分からん。

「貴様も専用機持ちと聞いた、私と戦え」

模擬戦の申し込みか? まあ俺にはそんな暇なんざ無いがな。

「……戦う理由が無い、それに、面倒だ」

「貴様には無くとも私にはある。『モンド・グロツソ』……言い逃れはさせん」

「……………」

……ほんとに……なんでアレの事でこいつに恨まれなくちゃいけないんだ。千冬姉にならまだしも。

それとも……羨望……ってやつか? 恰好いいもんな千冬姉。まあそれは

ともかく、憧れの人に泥を塗ったことが許せないってところか。

「……心当たりがあるか、では、言葉は不要だな？」

「悪いが、断る」

「そうか……ならば……戦わざるを得ないようにする。そういうことだ」

ガチャリ、と傍観していた生徒の群れにレールカノンの砲口を向けるラウラ。その口元は、悪意に歪んでいた。あいつは――
――本気だ。

「させるかつ!!」

「飛んで火に入る何とやらだな、……単純馬鹿が」

飛び込んできた俺に向かってその巨大なレールカノンの砲口を転換し、歪めた口元をさらに歪めていく。

……しかし、そのレールカノンは何かに撃ち貫かれ、爆発し、俺にその火力を見せつける事はなかった。

「「!?!」」

「ビューティホー……まだまだ捨てたもんじゃないね、ビルの屋上での見張りのバイトでも再開しちゃおうか」

「コア過ぎて、分からないと思う……」

「撃たなきゃ当たらないでしょう!」

「コア……」

「ちえ」

ふざけながらやってきたのは、打鉄の印象を少し残したISを展開させた大人しそうな顔立ちの女子と、ISの身長にも匹敵する長さの砲塔のようなものを持ち、頭をフルフェイスのヘルメットのようなもので覆った零式だった。

「で、何やってんの？」

零はがちゃりと重い音を立てて構えていた巨大な銃の銃口を上へ向ける。

「……また貴様が、懲りずによくも……」

「何回も言っけど友達が怪我するほどおもしろくないことは無いんでね、邪魔するんなら吹き飛ばすよ」

「……」

「……」

先ほどラウラが砲口に向けた女子達やその周りの女子がザワめいていたのが聞きつけられたのだろう。

アリーナの管制塔の中の慌しい様子が目の端に入る。

「……ここは引こう。…貴様とはいずれ決着をつける」

「…望むところだ」

ラウラはISを解除するとアリーナゲートへ去って行った。ゲートの向こうでは教師が頭に角つけておいでだろうが、あの性格からすると、涼しい顔でスルーするだろう。

「はぁ………ったく………」

心底疲れた様子で零がフルフェイスのバイザーを上には押し上げる。疲労が色濃く残る顔のため息を吐いていた。ISを展開したままその場に崩れ落ちる。

「ど、どうしたの…？」

「ああ、いや…何でもない」

「大丈夫？一夏、零」

「ああ、俺は何ともない」

「僕も………」

「嘘つけ、どう見たって疲労困憊じゃねえか」

「何ともないよ………それより今何時…？」

「え？えつと4時だよ」

「むう………時間か。簪さん、残念だけど、模擬戦は明日にしようか」

ISを解除した零は少しおぼつかない足取りでアリーナのゲートへ向かっていく。確かに土日のアリーナの使用時間は4時半まで、俺達もここで切りあげるのが得策だろう。

てか突っ込むの遅かったけどあの状態で戦うつもりだったのか、無駄茶するな、零は。

「じゃ、俺らも上がるか。あ、シャルル、これありがとな」

「どういたしまして、じゃ、僕は少し用事があるから」

「用事？新装備のテストかなんかか？零みたいに」

「うーん、まあそんなもんかな、ちょっと時間かかるから先に行つて？」

「出来れば一緒に着替えたかったが…仕方ないな。じゃお先ー」

「うん」

もう若干慣れたけど、どうもシャルルは俺と着替えたがらないんだよな。普段の態度から嫌われているってことはないはずだけど、フ口の時もやたらと突っ込んでくるし。…細身の体がコンプレックスなのかね？

まあいい、引き際は大事だよな、うん。

ISを展開したままゲートに向かう、慣れると展開したままの方が楽に移動できる。足使わなくてもいいし。

更衣室に入ると、燃え尽きたぜ…な感じの零が首からタオルかけて頂垂れていた。因みに着替えはすでに済ませているらしく、制服に身を包んでいる。

「ああ…一夏、早いね」

「……ほんとに大丈夫か？零」

「だいじょーぶだいじょーぶ、これくらい寝れば治るさ」

そう答える零はやはり元気が無い。最近疲れた姿しか見てないのは気のせいじゃないな。なんか出来ればいいんだが……。

「あのー……織斑ちゃんと桐原くん、それとデュノアくんは居ますか？」

「あー、シャルルはまだアリーナです」

ドア越しに突然山田先生の声が聞こえてきた。因みに着替えはすでに済ませてある。

「入っても大丈夫ですか？まだ着替え中だったりますか？」

「大丈夫ですよ、着替え終わってます」

「そうですか！では、失礼しますね！」

やけに張り切ってるな山田先生。

「では！発表します！」

「はい！」

「はあ……」

「今月下旬！なんと！大浴場が開放です！！」

3、 黒の暴走兎（前編）（後書き）

というわけで前後篇に仕分け。苦情は…受け付けますよ？

大丈夫じゃない、大問題だ。

というわけで、しつこいようですが、アンケートとじどじご応募くださいね。

指摘とかもお待ちしております。

3、 黒の暴走兎（中編）（前書き）

今回も絶賛！タイトル詐欺回！はーじまーるよー

3、 黒の暴走兎（中編）

どうやら大浴場が開放されるようです。

とまあ僕にとっては正直どうでもいい話なんだけどね。シャワー派だし。

取り敢えず、その時一夏が感激のあまり山田先生に抱きついた瞬間、シャルルがドアから入ってきたのは正直驚いた所じゃなかった。一瞬だけでも背筋が凍るかと思ったよ。

とまあその後は特に何も起きなかったから僕は部屋で寝ていたんだけど。

「……………何？」

『あつ零か！？』

最初の設定から変えてない携帯が耳障りな着信音をがなりたてるので、取り敢えず横になった状態で携帯に出る。

すると、こちらもやはり耳障りな幼なじみの声が、耳の中でわんわん鳴り響く。

「五月蠅い…何が有ったのさ…………？」

『お、おう。悪い…ってそれどころじゃねえんだよ！え、ええと！シャルルに胸が有って！そ、それでだな！』

「五月蠅いったら……まったく、分かったから、今そっちに行く……」

ということは、あれか、ラッキースケベなあのシーンが来たのか。
…なんか随分早いような気がするけど、まあこんなもんか。最近整備室に入り浸ってたから時間の感覚がよく分かんないんだよね。ともかく、僕は通話の状態を切って……しばらく寝転がっていた。いやもう力入らなくて……ダルいったら。

「はあ……どうしよう……？正直僕が行かなくてもどうにでもなるような気がしてならないんだけど」

まあ、なんだかんだ言ってるけど寝起きの気の向かなさは異常だと思っただ。それにこの布団ふかふかで……もう魔性な感じだよ。逃げられない……。と布団をもふもふしていると、突然ドアが控えめにノックされた。
…あれ？

「むう……はあい、ちょっと待って下さいーいねー……」

やや足を引きずりながら、僕はパジャマのままでドアへと向かう。因みにナイトキャップとかパジャマの柄が星とかはない。スタンダードな黒の無地だ。

それにしても誰だろうか、普段は誰も来たりしないんだけどな、会長と姉さんくらいか。

因みにどちらも適当にお茶をかつくらってお菓子を食べて退散していく。カフェじゃないんだから……。

「はいはい？……って、あれ？簪さん？」

「あつ、零……」

僕がドアを開けると、そこにはいつも通りな簪さんが居た。

「……えつと……?」

「えつと、ご飯、一緒に、どう?」

やや首を傾げ、簪さんは僕に聞いてくる。なんだか小動物みたいだな……可愛い。

しかし眠気は今だ覚めず、僕はややもややした感覚のままその誘いに応じる。

「ああ、うん分かった。じゃ今から着替えるね……上がってく?」

「へっ!?!い、いや、そ、そんなの……!」

「あ、ああ、ごめんね?……じゃ、ちょっと待ってて」

いやって言われたよ……いや、思い返してみると僕が無神経すぎたか……? 拒絶されても文句言えないや。駄目駄目だなあ……。一夏の事言えないぞ。

取り敢えずは制服に着替えよう。あんまり待たせると悪いし。……あれ、なんか忘れて……? まあ、いいか。忘れるってことは大した事でも無かったんでしょう。

と、いうわけで食堂だよ。そう言えば最近描写が食堂に集中してる

って話だったけど、どれだけ食い意地張るのかな、作者は。さておき、いつもの通り僕は日替わり定食の食券を買って、ささと列に並び、今もまだ眠気ではつきりしない頭で簪さんと喋り始める。

「そう言えば、コア適性はどんな感じなの？まだ下がったまま？」

「うん…何かバグがあるかと思ったんだけど、見直させてもらった限りでは皆無だった…」

表面上は気丈なものの、やはり残念そうに簪さんは項垂れる。コア適性が上がらないってことは無いはずんだけどな、一応日本が所有しているコアの中ではかなりの適性を示してみたいだし。

それが一度一気に下がって戻らないことなんて聞いた事が無い。こうまで異様に下がると、正直本人の問題どころではないと僕は思う。まるでコア自体がすり替わったような、そんな気がしてならない。

「やっぱりコアが変わったんじゃないかな…それ以外はあり得ない数値だったよ？」

僕の言葉に簪さんは押し黙り、しかし首を横に振り否定の意思を示した。

「うっん、コアの番号は、変わって無かった…多分…私の、所為…」

「……何か心当たりでもあるの？」

「無い…けど…」

こういうところがあるのは簪さんの悪い癖だね、なにかと自分の所為にしようとか。そんなこと無いんだからもっと自信持てばいいのに。

「そくだよぉかんちゃん！えいつ！」

突然現れたのほほんさんが、うなだれていた簪さんの背中にぴよんと飛び乗る。

簪さんは何とか踏み堪えると、困惑した表情を僕に向けてきた。

「のほほんさん、簪さん困ってるから。降りてあげなよ」

「ぶうぶう」最近全然生徒会に来ないれいの言うことは聞きたくないよぉ」

「うつ…痛いところを……」

仕方ないってのはあの人の前じゃ通用しないんだろうな…でも式式完成させないと僕死んじゃうんだよね、リアルに。だって絶対強いでしょあの人。

はっ…まさに前門の虎後門の狼ってやつか。この場合、前門の山猫、後門のばけね…ゲフンゲフン。

「生徒会に、入ってるの…？」

「へ？…まあ一応…ね、最近全然行っていないんだけど…」

「……私、帰る」

「えっ！？ちよつまっ……ああ……」

簪さんは、踵を返すとさっさと行ってしまった。のほほんさんを背中に載せたまま。

っていうか忘れてたよ…なんっていう、うっかりミス……姉妹で鬼門だもんなあ…。とはいえ今から追いかけて行くのは気が引ける、っていうか無理。

だってなんて声掛けたらいいのさ。齒の浮くような台詞は僕は掛けられないよ。

「ハアツ……ヘタレだなあ…畜生……」

周りの白い目線に僕の場合はガリガリと削られていく。…気にしないよ、これでも割と慣れてる方なんだ。

仕方なく僕は食堂のおばちゃんから今日の日替わり、サワラの焼き魚定食を受け取って席につく。

「まったく、相変わらずだな、零」

「箒ちゃん……」

食欲をすっかり失した僕の向かいの席に、箒ちゃんがどかっと腰を落とす。相変わらず男らしい。

そしてやはり白い目。うぐう……。

「追っかけなさいよまったくもう。あんたほんと相変わらずよね」

「…鈴ちゃんも居たのか……はは…今日もラーメン？」

「話を逸らすな、何故追いかけてなかったのだ？」

そんなこと言われても……。

「僕には出来ないよ… あんな大衆の前で女の子追っかけるなんて…
一夏ならともかく……」

「アンタ小学生の時もそれやって無かった？ ホント変わんないわね」
鈴ちゃんの明らかな白い目に僕の精神力と体力はガリガリと音を立てて削れていく。これ以上はほんとに命に関わるかもしれない。

「人は人、零は零、だろう。確かに一夏ならやりかねんが。アレは追いかけるべきだったと思うぞ、何が有ったかは知らんが」

「うう……おっしゃるとおりです…」

経緯はどうであれ、僕が悪いんだろう。もはや減る精神力はなくなっている。

反論のしようもなく、机にうなだれて、サワラをつつく。手遅れってことは無いんだろうけど…どうしようか。

「行くつもりなら、止めておけ。この状況では動きづらかるう」

「まー、どう動くにせよ一旦待った方がいいんじゃない？ 明日になればきつと整理がつくと思うわよ。のほほんさんがフォローなり何なりしてくれるでしょ。きつと何事もなかったように話しかけてくれるって」

そうなると僕としては非常に心苦しくも有るんだけど… 打つ手は正直見当たらない。何を今更って時間だし。

むう……人間万事塞翁が馬、か。待つしかないとはね、齒がゆいもんだ。

「……そう言えば、一夏はどうしたのだ？」

「そーそー、あいつ全然来ないのよ、なんか知ってる？」

「え？あー、一夏？」

そういえば……あつ、思い出した。でもこれ言えないな、シャルルがまずいことになるし。

よし、取り敢えずはぐらかそう。

「えーつと、確か何とかの申請で書類に署名しにくくために職員室に行ったと思ったけど。山田先生が大変そうにしてたし、しばらくかかるんじゃない？」

「む……」

「ちえつ、仕方ないわね、さっさと部屋に帰ってティナでも弄って寝ようつと」

鈴ちゃんはラーメンを片付け終えたようで、箸を容器の端にひっかけて、さっさと返却しに席を立つ。

僕のサワラ定食も、そろそろ食べ終わるな。多分そろそろ落ち着く所だしね、あっちも。

「…………ご馳走さまでした。じゃ、お先失礼するよ、箒ちゃん」

「うむ。ではな」

……さて、どうなってるんだよ。

「突撃隣の晩ごはん！こんちゃーヨネスケです……よ……？」

「えっ」

「あっ」

「へっ」

ぱたん。

えーっと、ベッドの上に押し倒していた。

誰が？一夏が。

誰を？シャルルを。

ま、まさかそっちの気が……！？

「おい……なんか物騒な考えてないか？」

「ひっ、やられるー！」

「冗談でもマジでやめてくれ……。頼むから話聞けって…」

ちえ、シリアルか。ともかく僕は一夏に促されて1025室に、
… もとい一夏とシャルルの愛のs

「っ痛あい!？」

「下らない事考えてんじゃねえ!さっき言っただよにそっちの気は
ねえんだよ!」

そんなに怒んなくてもいいのに、中学でなんかのトラウマでも植え
付けられたのかな？

っていうか、どうでもいいけどテンション高い…さっき酷い目にあ
ったばかりなのに。

事情説明中……

途中でセシリアが来て一夏を連れて食堂に行ってしまったよ。どう
でもいいけどうらやましいよね。美少女が部屋に来て、腕組んで一
緒に歩けるんだから。僕もさっき似たような場面にあったけど。
ともあれ、シャルルの説明はこんな感じ。

実はシャルルが女の子で、デュノア社の社長の隠し子。

IS適性があったからテストパイロットをした。

業務不振でシェアがレイレナード社にぶんどられそうだから一夏の

白式のデータを盗りに来た。

取り敢えず女だつてばれたら何とかして 放送禁止 して 放送禁止 しろとのこと。

一夏はそれに対してここに居たいなら居ればいいと言つた事。まあでもさすがに 放送禁止 は出来ないけど、とのことだ。

原作通りだね、細かい所は少し違つていたような気がするけど。

「ふうん……で？」

僕はシャルルの話が終わつた事を悟り、シャルルに聞く。

「で？つて…それだけつていえば、それだけだけど……つていうか、驚かないの？僕が女だつて」

「……薄々は気づいてたんだけど、まあ、言いだせる空気でも無かつたしね」

実は最初つから知つてましたと言つたら、アレだし。ぶつちやけ、男らしいしぐさが無かつたんだよね。ただ単に女らしさを無くしただけつて感じだったかなあ、見た感じ。

「……そつ……か……」

「……取り敢えず、この事がバレれば、まず間違いなくデュノア社は倒産するだろうね。手出しができないとはいえ、フランス政府は君を見限る」

シャルルに、僕は先ず事実を並べたてる。ある種、当然だろう。い

くら切羽つまっていたとはいえそんな外道な事をしたのだ。この事が知れば株はただ下がりしてデュノア社は倒産するだろう。

それに、シャルルは非公式の専用機持ちの上、政府を騙していたのだ。政府としてはいくら実力があろうが見限るのは当然のことだ。むしろ、暗殺者が飛んできても文句は言えない。

せめて二人目の男子操縦者として世間に知れ渡っていなかったことが幸いだった。

「……うん」

シャルルは、その事を知っていたようで、沈んだ顔をしながら、頷いた。

「君は卒業後の行き場を風評被害ってやつで失うわけだ。まあ実力が伴ってるから、楽ではないだろうけど、スカウトされると思っけどね。……そこでだ」

「…なに、かな？」

諦めきつたシャルルの表情に、僕の頭の奥が焼けるような音を立てて、痛む。

かつて見た、その表情に。胸に暗雲が立ち込めた。

「君は、どうしたいんだ？」

「どうしたい……って？」

「IS学園に居たいのか、そうでないのか。それに、デュノア社の行く末だ」

「……！何とかできるの？」

前者はともかく。後者の言葉に、シャルルは大きく飛びつくように顔を寄せてくる。

それにしても、憎悪しかないと思ったんだけどね、デュノア社には、やっぱり、血の繋がりは強いって事なのかな？……いや、シャルルが優しすぎるだけ、か。

「…何かを出来るのは君だけだ」

「…ッ」

シャルルは、僕を見てか、その言葉を聞いてか、少し怯えた表情を作る。

「…分かってる…分かってるよ……でも…っ！」

理解することを拒むように、シャルルは小さく首を横に往復させる。

「『どうしようもない』…か……」

「っ！そ、そうだよっ！僕にデュノア社がどうにかできるわけが…

…！」

「出来ない…か、それは、諦めている、の間違いなんじゃないか？」

「っそんなことっ…！」

シャルルは僕の胸倉につかみかかり、今まで堪えていたであろう感情を放出し出す。

「僕に…僕にどうしろって言うのさ！？さっき零が…！零自身が言
ったじゃないか！僕には何の力もないんだよっ！全部…全部持つて
いかれちゃったんだ！愛する人もっ！戻りたい所もっ！何もかも！
！」

それは、駄々をこねる子供のような言い分だった。しかし、シャル
ルにとっては、紛れもない事実なのだろう。

「だから、だから僕は従うしかなかっただ！！何も出来ないんだ
から！！君に、わかるのかよッ！」

その言葉に、僕の中の何かが、音を立てて断ち切れた。古い記憶が、
次々と蘇り、あの頃の自分が、この体に吸収されていくように戻っ
てくる。

「僕に……………」

否、それは、自分ではない。

「…………俺に何がわからないって？目を覚ませよ、ガキが…！」

自分でも驚くような低音が、鼓膜に響き渡る。それは、底冷えする
冬を思わせるような、冷めきった低音でも有った。シャルルも悲痛
な表情のまま、驚きで表情を固くする。

「っ！？」

数瞬遅れ、シャルルから息を飲むような声が、喉から発された。あ
まりの驚きに文字通り言葉もでないのだろう。

俺は、その表情に、昔の俺の面影を覚え、吠えた。

「何も出来なくなつて！頼ることぐらい出来るだろう！？何も出来なかつたんじゃない！お前は何かしなかつたんだ！周りを見ることも！手を差し伸べてくれる人ぐらいいるだろうが！渡る世間は鬼ばかりじゃねえんだ！困つたら絶対助けてくれる、お人よしの馬鹿共がわんさといるんだよッ！！」

シャルルの胸ぐらを掴み、俺は吠えつづける。

先ほどのシャルルの言葉、言わばそれは、手を差し伸べたはずの一夏への愚弄の言葉だった。本人にはそのような感情は込めちゃ無いらんだろうが、今の俺の前ではそんなことは許されなかった。

「困つてるんなら！誰かに助けを求めろ！！事実一夏は頼んでもねえのに手を差し伸べてくれたはずだ！」

「……………つてる…」

「分かつてる！？いいや！お前は何も分かつちやいねえ！！仕方ねえ！？んなわけあるか！自分の力だけで全部が全部解決できるワケがねえ！！だつたら頼ればいいだろうが！それが人つてもんだ！違うか！？」

「…っ……………」

「誰かを…頼れよ」

心が抜け落ちたように呆然としたシャルルを見つめ、返答がないことを認め、言葉が続ける。

「……………今の、俺に言えるのは、これだけだ。決心ついたら言え、何とかできるようにくらいしてやる」

とん、と軽く押してシャルルをベッドに寄りかからせる。

俺は、いや、僕はゆらりとドアへと向かい、ノブに手をかけた。

「…あり、がとう」

微かに聞こえたその言葉に、なぜだかはよく分からないが、仕方ないような気持ちになって。

「…どういたしまして」

こんな言葉を掛けた。ったく、しょうがないな、僕もシャルルも。

そして、部屋に戻ると同時に、忘れていた眠気が、突如僕の体を襲っていた。ぐ…ぐ、眠すぎて…ベッドまで行けぬ………がくつ。

3、 黒の暴走兎（中編）（後書き）

くせえ…自分でも書いてて恥ずかしくなっ たわこんなん。

ともかく長らくお待たせして申し訳ない。

そして零くん二重人格みたいな感じになってますがちょっと違います。あれが地です。一応。

黒の暴走兎編、まだまだ続くよ！いやもうそろそろ終わるかな？

では、感想、評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5592v/>

IS インフィニットストラトス×ACfa 【パブリックエネミー】

2011年10月20日12時08分発行